

# 一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 九七 九八

take its place and that the arrangements for its administration should be provided at once. In order to avoid hardship and confusion I must, therefore, consider the bill as a whole and the imperative need of the country for legislation of this general character. For this reason the bill is approved.

〔五月六日上院議場ニテ議員 McKeller ハ往電第三八二号妥協案全文ヲ朗讀シタル上兩院協議会ノ某委員ヨリ右案ヲ自己ニ提示シ之ハ大統領ヨリ出テタル提案ナルカ上院民

主党議員ノ右案ニ對スル意向内探有度旨依頼アリタリト述ヘタリ五月六日郵送議事録第八一六六号参照。

〔五月六日下院議場ニテ議員「レイカー」ハ本件妥協案全文ヲ朗讀シ新聞ノ伝ル處ニ依レハ大統領ハ右ノ案ヲ兩院協議会ニ提出シタル趣ナリト述ヘタリ五月九日郵送議事録第八四八七頁参照。

九七 六月十七日(着) 在米國埴原大使(ヨリ) 豉原外務大臣宛(電報)

排日条項實施ニ関スル妥協案ニ付キ報告ノ件

第五三四号

貴電第二二八八号ニ關シ御來示ノ妥協案(一九二六年三月一日迄延期案)ハ行政部ヨリ何等公表シタル事ナシ兩院協議会モ何等正式ニ之ヲ公表シタル事ナシ上下両院議場ニ於テハ數言之ニ言及セル議員アリ從テ右妥協案ニ對スル記録議事録ニ掲載セラル内重ナルモノ左ノ通

〔五月十五日下院議場ニ於テ移民委員長「ジョンソン」ハ「排日条項実施ヲ二十ヶ月間延期シ其ノ間ニ新条約成立セハ該条項ヲ実施セズ」トスル案両院協議会ニ提案セラレタルモ云々タト云ヘリ往電第四二七号及五月十六日付公第五一

五号付屬議事録第八八七八五頁参照。

〔五月六日上院議場ニテ議員 McKeller ハ往電第三八二号妥協案全文ヲ朗讀シタル上兩院協議会ノ某委員ヨリ右案ヲ自己ニ提示シ之ハ大統領ヨリ出テタル提案ナルカ上院民

主党議員ノ右案ニ對スル意向内探有度旨依頼アリタリト述ヘタリ五月六日郵送議事録第八一六六号参照。

〔五月六日下院議場ニテ議員「レイカー」ハ本件妥協案全文ヲ朗讀シ新聞ノ伝ル處ニ依レハ大統領ハ右ノ案ヲ兩院協議会ニ提出シタル趣ナリト述ヘタリ五月九日郵送議事録第八四八七頁参照。

〔五月六日下院議場ニテ議員「レイカー」ハ本件妥協案全文ヲ朗讀シ新聞ノ伝ル處ニ依レハ大統領ハ右ノ案ヲ兩院協議会ニ提出シタル趣ナリト述ヘタリ五月九日郵送議事録第八四八七頁参照。

九八 一月一日 在米國埴原大使宛(電報)

2 日米間交渉

九八 一月一日 伊集院外務大臣(ヨリ)

新移民法案中ノ差別待遇規定削除並ニ二国籍

二申入レ方訓令ノ件

別電一 同日伊集院外務大臣発在米國埴原大使宛電報

第二号

新移民法案中ノ差別規定ニ対スル抗議ノ理由  
一 同日同電報第三号  
憲法改正決議案ニ対スル抗議ノ理由

第一号

貴電第八二二号ニ關シ今回ノ合衆国議会ニ提出セラレタル移民法案及帰化不能外国人ノ子ノ国籍ニ関スル憲法改正決議案ニ付テハ貴官ハ既ニ國務長官ニ面会シ其意見ヲ求メラレタル由ナルカ移民法中ニ帰化能力ヲ標準トスル差別待遇規定ヲ設クルコトニ付テハ貴官御承知ノ通現行移民法制定當時帝国政府ノ最モ強硬ニ抗議シタル所ニシテ主義ニ於テ飽迄容認シ難キ所ニ有之又国籍ニ關スル憲法改正決議案ニ付テハ其ノ成立ノ曉在米二十数万ノ本邦人ハ多年刻苦ノ基礎ヲ朝ニシテ失フコトナルヘク其ノ影響ノ重大ナルニ鑑ミ政府ノ痛心ニ不堪ル所ナルト同時ニ該決議案提出ノ日本国民ニ与ヘタル反響ハ強烈ニシテ從来飽迄穩健説ヲ主張シ來リタル人士ニ於テモ米國カ斯迄非道ノ処置ニ出ルニ於テハ此上黙止シ難シト為スニ至リ有識有力階級ノ論調モ著シク陰惡ニ傾キツアリ其結果ハ啻ニ政府ヲ窮境ニ陥ルノミナラス国民ノ対米感情ヲ悪化シ為ニ両國国交ノ為メラレ

慮スヘキ事態ヲ釀成スルノ虞アルニ付キ貴官ハ帝國政府ノ訓令トシテ更ニ國務長官ニ面会セラレ移民法中差別待遇規定削除方並ニ決議案通過阻止方ニ付キ篤ト懇話ヲ遂ケラレ同長官ノ応対振回電アリタン

尙ホ貴官ヨリ國務長官ニ對スル交渉ノ形式及論拠等ニ付テハ貴官ノ裁量ニ一任スヘキモ當方氣付ノ点ハ移民法ニ付テハ別電乙号ノ通ナルニ付是等ノ諸点ニ付テハ特ニ充分ノ考量ヲ加ヘラレタシ

尙ホ又移民法案ニ關シテハ先方ト協議ノ上必要ニ志シ法案ノ字句ニ付改正ヲ要スル点ヲ具体的ニ文書ヲ以テ國務省ニ申入レラレ當方ノ要求ヲ容レンマル様貴官最善ノ御尽力ヲ希望スルモ決議案ニ付テハ素ト一國ノ忠誠(アレジヤンス)ニ關スル國內問題ニシテ文書ヲ以テ抗議ヲ提出スルトキハ先方ヨリモ文書ヲ以テ全然當方ノ要求ヲ拒絶スルノ虞アルノミナラス選挙期日ヲ控ヘ排日論者等ニ依リ政治運動ノ具ニ供セラル懸念モ存スルニ付此問題措置方ニ付テハ特段ノ考量ヲ用イラレ度差当リ貴官長官間ノ内談ニ止メラレ文書ヲ提出セサルヲ妥当ト思考ス

(別電一)

# 一、米国ニ於ケル排日移民法成立問題 九八

一月一日伊集院外務大臣發在米國埴原大使宛電報第二号

## 別電第二号

甲号

一、新移民法ハ現行日米通商航海條約ニ違反ス蓋シ帝国政府カ旧條約第二条末項ノ削除ニ苦心シ千九百十一年ノ宣言ヲ為シタル所以ハ米國ノ国内法ヲ以テ移民ニ關シ差別的待遇ヲ与ヘラルコトヲ避ケンカ為ニ外ナラサリシナリ（大正五年四月二十一日珍田大使ヨリ大統領ニ提出セル覚書参照）

二、米国政府側ニ於テハ右旧條約末項ノ削除カ米国ノ移民制限ニ關スル國家固有ノ主權ヲ毀損スルモノニアラスト了解セシコトハ千九百十一年一月二十三日付國務省ヨリ帝国大使館宛書面ニ明記セラレタル處ナリ然レトモ右ハ一般的移民ノ制限ニ關スル國家主權ヲ毀損セストノ意味ニシテ差別的規定ヲ設ケントスルノ意味ニアラサルコトハ當時國務長官ノ言明シタル處ナリ又該條約批准ノ際上院カ該條約ハ移民法ノ条項ヲ改変スルモノニアラストノ条件ヲ付シタルモ亦同一ノ意味ヲ明カニセントシタルモノナリ右上院ノ付シタル条件ニ關シ千九百十一年二月二

四、千八百九十年ノ人口統計ヲ基礎トシ其ノ百分ノ二ヲ以テ一年ノ入国数ヲ定ムル一般的標準ヲ日本人ニ適用スル場合帝国政府ハ之ヲ以テ満足スヘキヤ否ヤニ關シテハ暫ク意見ヲ留保ス元來在留本邦人ノ甚タ少數ナリシ千八百九年ヲ以テ標準トスルコトハ表面ハ兎モ角事実ニ於テ本邦人ニ對シ區別待遇ヲ与フルモノニシテ真ニ公平ナリト謂ヒ難キニ付結局ハ承認スルトシテモ一応ハ異議ヲ挿ミ置ク必要アレトモ第一段ニ於テハ帰化能力ニ係ル差別待遇撤廃ニ尽力スルヲ要ス

五、新移民法ト紳士協約トノ関係ニ付テ觀ルニ新移民法カ本邦人ニ對スル差別的待遇ヲ規定セハ其成立ト同時ニ日

本政府ハ當然紳士協約上ノ義務ヲ免レ米國本土並ニ其隣接国等ニ對スル帝國臣民ノ渡航上ノ從來ノ制限ハ凡テ之ヲ撤廃シ得ル次第ナルカ完全ナル移民ノ制限ハ其ノ出發國ト受入國トノ共助ニ依テ其ノ目的ヲ達成スルコトヲ得ヘク出發國ノ共助ナキ場合完全ニ移民制限ノ目的ヲ達成スルノ困難ナルハ從來ノ經驗ニ依テ米國政府ノ知悉スル處ナラント思考ス新移民法中ヨリ差別的待遇ニ關スル規定ノ削除セラレタル場合帝國政府ハ喜ンテ現在ノ紳士協約ヲ引続キ遵守スルノ意思ヲ有スルモノナルカ此場合ニ於テハ本邦人渡航者ハ現在ニ於ケルカ如ク紳士協約ト移民法トノ双方ノ制限ヲ受クルコトトナルナリ即チ現在紳士協約ノ下ニ渡航シ得ル者ハ商人、学生、再渡航者及米國現住者ノ家族等ナルカ前三者ハ新移民法ニ依ルモ定員外ナルヲ以テ仮ニ影響ナキモノトシ米國現住者ノ家族ハ紳士協約ノ下ニ於テハ數ニ限リナク渡航シ得ルモ新移民法実施ノ結果其ノ渡航數ハ新移民法ノ定員（quotat）ノ範囲内ニ限定セラルル次第ナリ

六、或ハ移民制限ハ本邦人ノミニ適用スルモノニアラスシテ均シク他ノ東洋人ニモ適用スルモノナリト謂ハシモ他

一、米国ニ於ケル排日移民法成立問題 九八

一〇四

十五日付國務長官ノ書面ハ最モ重要ニシテ同書面中長官

ハ移民法中ニハ差別規定ナキカ故ニ上院ノ付シタル条件

ニ付帝國政府ニ於テ異議ナキモノト思考ス云々ト述ヘタ

リ當時ノ移民法カ日本人ニ對シテ差別的規定ヲ含ミタラ

ンニハ日本政府ハ現行條約ヲ批准セサリシナルヘシ

三、千九百十七年制定ノ現行移民法カ議會ニ審議中帝國政府ハ右ノ理由ニ依リ差別待遇ノ條項削除ヲ要求シ米國政

府ハ之ニ同意シ其結果差別規定ハ凡テ削除セラレタリ

ノ東洋人ニ付テハ必要トアラハ現行移民法ニ於ケルカ如ク緯度及經度等ニ至リ適當ノ制限ヲ設クル方法モナキニ非サルヘシ

七、千八百九十年ニ於ケル布哇在留本邦人數ハ新移民法ノquotat算出ノ基礎トナルヤ否ヤ不明ニシテ從テ新移民法ノ一般原則カ本邦人ノ定員何程トナルヤ不明ナルモ何レニスルモ一年數百名ニ過キサルヘシ而モ其數百名ニ對シテモ紳士協約カ適用セラレ新ナル労働者ノ入國スル虞ナク日本人定員ハ前記ノ如ク結局現住者ノ家族ノミニ依リ充タサルルコトナルヘキ處帝國政府ノ有スル情報ニ依レハ加州方面ニ於ケル排日論者サヘ此上尚一万五千人ノ日本婦人ヲ入國セシムル必要ヲ認メ居ル由（日米問題懇談会決議參照）ナルニ依リ新移民法ニ於テ一年僅ニ数百名ノ日本人家族ノ入國ヲ認ムルコトハ如何ナル方面ニ於テモ異議アルヘシトハ思考スル能ハス此少數ノ日本人族ノ入國ヲ阻止スル為ニ帝國臣民ノ最モ嫌忌スル差別的待遇ノ規定ヲ設クルコトハ徒ニ帝國臣民ヲシテ米國ノ友情ニ疑念ヲ挾マシメ其ノ反感ヲ挑発スル外何等ノ実益アリトハ思考セラレス

一〇五

# 一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 九八

一〇六

八、要スルニ移民法上ニ差別待遇ノ規定ヲ設クルハ帝國政府カ條約ヲ改正シ紳士協約ヲ遵守シ多年間幾多ノ犠牲ヲ払ヒ苦心ニ苦心ヲ重ネテ維持シ來レル政策ヲ一朝ニシテ水泡ニ帰セシメ帝國政府ヲ政治上非常ノ窮境ニ陥ルモノニシテ現ニ民間ニ於テハ政府ノ無為無能ヲ攻撃スルノ声漸ク高マリ來リ政府ハ之カ対策ニ甚シキ困難ヲ感セントス之等ノ点モ米国政府ニ於テ充分諒察セん事ヲ切望セサルヲ得ス

(別電二)

一月一日伊集院外務大臣発在米国埴原大使宛電報第三号

別電第三号

乙号  
一、米国ノ帰化法ニ關スル問題ハ国内問題トシテ從来努メテ此ニ関スル論争ヲ避ケタレトモ同法カ近來各種排日立法及言説ニ基礎若クハ口実ヲ与フルニ至リ殊ニ今回議会ニ提出セラレタル憲法改正決議案ノ如キハ明ニ本邦人ノ権利制限ヲ目的トスルモノナルカ故ニ本問題ニ關シ帝國政府カ米国政府ノ考慮ヲ求メントスルハ實ニ止ムヲ得サルニ出ツルモノナリ

然享有スヘキ各種ノ公権私権ヲ剝奪シ彼等ヲシテ将来全

ク凡テノ人類ニ必須ナル向上的精神ト希望トヲ失ハシメ

米国内ニ於ケル不幸ナル少數民族トシテ終始セシメントスルモノニシテ人道上實ニ黙止シ難キ余リニ非道冷酷ヲ極メタル立法ナリ

五、本決議案ハ人種的偏見ニ基キ且ツ直接ニ本邦人ノ権利制限ヲ目的トシ余リ苛酷ヲ極ムルモノナルカ故ニ本邦内ニ於ケル輿論ノ反感ヲ衝動シ將又日本国民ノ面目上忍ヒ難キ事実トシテ両国ノ親善關係ニ憂フヘキ影響ヲ釀成スルニ至ルヘシ

九九 一月四日(着) 在ニューソーク姉妹領事代理ヨリ

伊集院外務大臣宛(電報)

米国出生外国人兒童ノ帰化権制限ニ關スル憲

法改正共同決議案ニ關シ日米高等委員會設置

ヲ懇意セルウッズ大使宛ノ金子堅太郎電報大

要報告ノ件

第二号

渋沢子爵ヨリ掘越ニ對シ金子子爵ヨリ「ウッズ」大使ニ宛タル左記電報ヲ同大使ニ轉交方依頼シ來リ昨二日堀越ハ之

一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 九九

二、抑モ何人カ一国ノ市民トシテ最モ優秀ニシテ忠誠ノ精神ニ富ムヤハ各個人ニヨリ個々ニ決定セラルヘキ問題ニシテ人種若ハ皮膚ノ色ニヨリ概括的ニ決定セラルヘキニ非スルニ米国帰化法ハ独断的二人種ニヨリテ帰化能力ノ有無ヲ定メ日本人ヲ帰化シ得サル人種トシテ排除スルコトハ日本国民ノ正当ナル自負心ヲ損傷スルモノニシテ其ノ最モ不快トスル処ナリ

三、特ニ今回議会ニ提出セラレタル憲法改正決議案ノ如ク

兩親カ帰化権ナキ場合ニ其ノ子ハ当然市民権及帰化権ナキモノトスルハ理論ノ飛躍ヲナシタルモノナリトノ非難ヲ免レス米国出生児カ親ノ有スル思想ト感情トヲ繼承シ此ノ思想ト感情トカ米国ノ文化ト精神トニ相背反スル場合ニ限り本決議案ノ論理ハ成立スト雖モ實際ニ於テ米国出生児ハ多クハ米国ノ文化ト雰囲氣内ニ成長シ米国ヲ自己ノ郷土トナシ米国ノ思想ト精神トヲ体得スルモノナリ

四、理論ハ姑ク之ヲ置キ太平洋沿岸諸州ニ於テハ本邦人ハ單ニ帰化能力ヲ有セサル理由ニヨリ各種ノ権利ヲ奪ハレ其生業ヲ失ヒ今ヤ殆ント其前途ノ処置ニ窮シツツアリ然ルニ前記決議案ハ更ニ何等罪ナキ彼等ノ子孫ヨリ其ノ当

ヲ同大使ヘ転電セル趣ナリ

左記(電報大要)

日本ノ災厄ニ際シ米国上下両院カ市民トナリ得サル外国人ノ子供ニ關スル憲法改正ニ付共同決議ヲ為セルコトヲ遺憾トス而シテ若シ本案ニシテ議會ヲ通過セハ實ニ日米両国民ノ關係ヲ危クスルニ至ルヘシ故ニ直ニ両国政府ヲ代表スル高等委員會ヲ組織シ本件其他ヲ解決スルニ適當ニシテ且満足ナル方法ヲ調査スルコト必要ナリ云々

右既ニ御承知ノ義ト存スルモ為念

在米大使、全米各領事(ホノルルヲ含ム)ヘ転電セリ

(参考)

大正十二年十二月三十一日伊集院外務大臣発在米国埴原大使宛電報第七十九号

帰化不能外国人ノ子ノ国籍ニ關スル憲法改正決議案阻止ヲ懇請セル電報日米關係委員ヨリ発電ノ件

第七十九号

東京日米關係委員協議ノ結果渋沢子爵ノ名ヲ以テ桑港アレキサンダー、紐育ゲーリー・ヴァンダリップ、ヘンリー・

タフト、ギューリック及ウイックカシャム等ニ宛テ十二月二十九日左ノ電信ヲ發送セリ

# 一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 100

一〇八

今般華盛頓州選出上院議員「ジョーンズ」氏等ニ依リ合衆國議会ニ提出セラレタル帰化不能外国人ヨリ米国ニ於テ生レタル子孫ノ市民権ニ対スル憲法改正共同決議案ハ何等罪ナキ在米日本人ノ子孫ヨリ各種ノ公権私権ヲ剝奪セントスルモノニシテ余リニ冷酷ヲ極メ本邦ノ輿論ニ甚タ面白カラサル影響ヲ与フルモノナルニ付右決議案ノ通過セサルコトヲ希望スル次第ナルカ貴殿等ニ於テモ之方阻止方ニ付充分尽力セラレンコトヲ希フ

尙ホ金子子爵ヨリ帰米中ノ「ウツズ」大使ニ宛テ日米問題審議ノ為予テ子爵ヨリ同大使ニ話シ置キタル高等委員設置方ニ付尽力ヲ依頼スル電信發送ノ筈ナリ

100 一月六日(着) 在ニユー・ヨーク姉歯總領事代理ヨ  
伊集院外務大臣宛(電報)

## 憲法改正、日米高等委員会設置共ニ困難ナル

趣其ノ他ニ付キギューリック博士ノ所見聴取

ノ件

第三号  
昨三日所用ヲ以テ「ギューリック」博士訪問ノ序ニ今回ノ憲法改正案(拙電第一号参照)ニ付博士ノ意見ヲ求メタル

處本案ノ通過ヲ見ルコトナカルヘキカ万—上下両院ニ於テ夫々三分ノ二ノ多數ニ依リ通過スルコトアリトスルモ四十八州中三十六州ノ賛成ヲ得ルコトハ殆ト想像シ得サル処ナリト樂觀シ居レリ尚博士ハ愈議会ニ於テ本案通過ノ模様見ユルニ至ラハ自分ハ生命ヲ賭シテモ同志ト共ニ我連合協会ト提携シテ国内ニ大ナル反対運動ヲ起ス決心ニテ其ノ準備モ為シ居ル次第ナリトテ非常ナル熱心ト意氣ヲ示セリ仍テ本官ハ予テ贈アル日米關係委員会ノ計画ニ係ル高等委員会ノ件ニ付所見ヲ聽キタル處博士ハ自分カ昨年初夏日本ニテ渋沢子爵等ト本件ヲ考究セルトキト今日ニ於テノ自分ノ意見ニハ多少ノ相違モ來シ居ル次第ニテ今日ハ之ヲ実行スルコト余程困難ナリト思考ス実ハ昨年夏桑港上陸ノ際「アレスサンダー」不在ノ為「リンチ」ニ面会セル處同氏ヨリ「アレスサンダー」ノ内話トシテ本件ニ關スル國務長官「ヒューズ」ノ不賛成意見ヲ聞キ鮮カラス失望セリ唯「ヒューズ」カ如何ナル理由ニ依リテ反対シタルヤハ聞クヲ得サルモ自分ノ察スル處ニテハ左ノ点ニ於テ「ヒューズ」カ不賛成ナルモノノ如シ

一、法律上ノ困難アルコト即チ仮ニ高等委員ヲ両国ヨリ出

ストシテモ之カ権限ノ問題ニ付容易ニ兩国カ一致点ヲ見出シ得ルヤ疑ハシク又仮ニ之ニ法律上何等カ「アグリーメント」ニ達シ得ル権限ヲ与ヘタリトシテモ第一ニ米国ニ於テハ憲法ヲ改正セサル限り条約ヲ作ルニハ常ニ議会ノ協賛ヲ経サルヘカラサル狀態ナレハ所謂高等委員会ナルモノハ要スルニ唯問題解決ノ方法或ハ事情等ヲ調査研究シ之ヲ夫々本国政府ニ報告スルニ止マルコトナルヘク是レ實際上無キニ勝ルトスルモ何等「エフ エクティブ」ノモノニアラス

一、高等委員会ノ委員ノ選定ノ困難ナルコト殊ニ米国ニ於テ然リトス

三、米国ニ於テハ一般ニ特ニ所謂排日運動者ハ所謂加州問題ヲ以テ國際的問題トハセズシテ之ヲ單ナル東洋人ノ移民問題トスルコトニ努メ居リ自然日米關係委員会ノ如キ設定セラレタリトシテモ夫ハ決シテ米国ノ國內問題ニ容喙シ得ルモノト認メズ却テ之ガ為ニ面白カラザル輿論ヲ生ムニ至ルコトヲ恐ル兎ニ角現状ニ於テハ委員会ノ設置ハ困難ナリ

博士ハ此等ノ意見ヲ述べタル後其持論タル所謂二重国籍問

一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 100

一〇九

博士ニ對シ何等カ博士ニ於テ所謂加州問題ナルモノヲ解決スルノ途ニ就キ意見アリヤト尋ネタル處余リ好キ考モナシト申セルニ付「ハーバード」ノBuell教授ガ雑誌Foreign Affairs(客月十五日出版)ニ寄稿セル米国ニ於ケル日本人問題( (不明) Peril)ニ闘スル論文ノ結論ニ闘シ博士ノ意見ヲ叩キタル處博士ハ極メテ腹蔵ナキ自分ノ意見ヲ述ブレバ実ハ「ブル」教授ト自分ノ結論ハ略一致シ居リ近ク一論文ヲ發表スル心算ナリト語リ唯「ブル」ノ意見ト異ル点ハ紳士協約ヲ新シキ而モ發表シ得ル協約トセバ必ズシモ之ヲ條約トスル必要ナシト思考セラルガ兎ニ角全体ヨリ觀テ「ブル」ノ意見ハ極メテ公平ナルモノト思

# 一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一〇一

一一〇

フ之ナレバ日本ニ於テモ可然考量ヲ払フベク又米国ニ於テモ納得スルモノ多カルベシトノ感想ヲ述べ居レリ

因ニ前頭 Foreign Affairs ハ客月十七日付公第三九〇号ヲ以テ二十一日発送セルニ付既ニ御接受ノコトト存ズルモ為念其結論別電第四号ノ通り報告ス

在米大使及全米領事〔「ホノルル」ヲ含ム〕へ転電セリ

一一〇 一月十四日 松井外務大臣ヨリ  
在米國埴原大使宛（電報）

新移民制限法案等ニ関スル我ガ申出ヘノ米国

側回答督促方訓令及ビ本邦輿論ノ現況通報ノ

件

第二〇〇号

昨年貴電第八〇五号並ニ往電第一号ニ關シ本邦ニ於テハ右諸問題ノ経過ヲ重要視シ之ニ対シ多大ノ注意ヲ払ヒ居ル現状ニ鑑ミ今期通常議会ノ劈頭ニ於テ本大臣ノ試ミントスル演説中ニハ是非共或程度ノ言及ヲ為スノ必要アリ且ツ本問題ハ前記ノ事情ヨリ推シテ本期議会ニ於テ相当論議セラルコトト予想スルニ付議会開会前前広ニ前記帝国政府申出ニ対スル米国政府ノ応答振及態度ヲ承知シ置度右御含ミノ

一一一 一月十七日（着） 在米國埴原大使ヨリ  
松井外務大臣宛（電報）

新移民制限法案ニ關シヒューズ國務長官ニ覺

書手交ノ件

第三一号

貴電第一号、第二〇〇号ニ関シ

「ジョンソン」移民法案第十二条b項ニ關シテハ成ルヘク

当方公式ノ申入ヲ待ツコトナク米国政府当局ヲシテ自發的ニ適當ノ措置ニ出テシムル様仕向クルコト然ルヘシト存シ其後佐分利ヲシテ公然トナク國務省掛官ノ注意喚起ニ尽力セシメタルモ何分涉々シキ効果ナキニ付本使ハ一月十五日國務長官ニ面会前記移民法案ノ条項ニ付テハ曩ニ長官ノ注意ヲ喚起シ置キタルカ爾來下院ニ於テハ着々同案ノ審議ヲ進メツツアル模様ニテ我國民ハ其成行ニ甚大ノ注意ヲ払ヒツツアリ万ニモ右ノ如キ条項通過センカ我國論沸騰ノ必然ナルニ顧ミ我政府ノ憂慮措ク能ハサルハ實ニ当然ノ次第ニテ本使ノ接受セル訓令ハ斯ル事態ノ下ニ發セラレタルモノナリト述ヘ貴電第一号及別電甲ノ主旨ヲ參酌適宜作成シタル數頁ニ亘ル覚書（写郵送ス）ヲ手交シ一讀ヲ求メタル

上至急米国政府ヲ促シ何分ノ回答ヲ求メラレ回電アリタシ尚本問題ニ關スル本邦新聞紙等ノ論調ハ今日迄ノ所比較的冷静ノ態度ヲ持セルモ右ハ一方国内問題ニ忙殺サレ居ルト他方輿論緩和ヲ試ミツツアル向アル結果姑ク政府ノ処置ニ信頼シ米国ノ態度ヲ観望セントスルモノニシテ之ニ依ツテ

本問題ニ關スル我カ輿論ヲ推断スルハ誤解ナリ殊ニ前記往電中一言セシ如ク從来飽迄穩健說ヲ持シ日米關係ニ改善ニ尽瘁シ来レル有識有力階級ノ人士迄モ本件最近ノ展開ニ關シテハ頗ル之ヲ心外トシ僅カニ米国政府ニ於テモ此点御含ミノ上本件交渉ニ付格段ノ御尽力ヲ煩シタシ尚今日ノ場合新聞論調ノミニ依リ本邦輿論ヲ察知スルハ難ク本件ニ關シ國民ノ中堅根柢深キ所ニ深ク憂慮スルモノアル次第ハ「ウッズ」大使ノ横浜着ヲ俟テ金子子爵ヨリ同大使ニ對シ説明スル筈ナリ

## 一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一〇二

一一二

官ハ右ノ如キ言明ヲ与フルハ困難ナリ蓋シスル言明ハ当國ニ於テハ之行政カ議會ノ權限ニ容喙セントスル越權ノ措置ナリトノ強烈ナル議論ヲ惹起シ事態ヲ悪化セシムルコト必定ナレハナリト答へ更ニ種々應答ノ末國務長官トシテハ此際本件日本政府ノ申入ニ對シ米國政府ハ細心ノ考慮ヲ尽シツツアリト云フ以上ノ言明ヲナスコト困難ナリト述ヘタリ本使ハ更ニ十二月四日（昨年往電第八〇五号）（編註）ノ會見ニ言及シ回答ヲ促シタルニ長官ハ実ハ本件ニ關シ其ノ後貴官ト親シク私的懇談ヲ遂ケント欲シタルモ自分ノ攻究セル限りニテハ差當リ實行可能ノ名案ナク新條約商議ハ或ル一案タルヘキモ之ニハ抑ヘ難キ有力ノ反対アリ旁私見交換ノ基礎トスヘキ試案スラ考へ付カサル為思ヒナカラ遷延シ居リタル次第ナリトノコトニ付本使ハ右有力ノ反対トハ何レノ方面ニ存スルヤ承知セサルモ自分ノ有スル情報ニテハ加州ノ「マクラッチ」一派スラ必スシモ條約商議ニ反対ナラズト承知スルガ如何ト反問シタルニ長官ハ「マ」ノ如キハ彼自身以外何物ヲモ代表セザルモノナルモ兎ニ角右ハ自分ニハ初耳ナレバ該情報ノ根拠ヲ知リタシトノコトニ付本使ハ桑港ニ於テ日米有志間ニ開カレタル懇談会決議ノ大要ヲジ余ハ再議ニ譲ルコトトセリ

察スル所長官ノ心底ハ我申出ノ理由アルヲ認ムルモ大統領選挙ヲ前ニ控ヘ上下両院トモ「レ」党ノ極メテ少數ナル多數ヲ占ムルノミニシテ何レノ重要法案モ劇甚ナル政争ノ為審議進捗ヲ阻止セラレツツアル現状ニ鑑ミ啻ニ反対党ノミナラズ政府党内ニスラ有力ノ反対ヲ惹起スルノ危険ナル問題ニハ手ヲ触レザラントスルモノノ如ク果シテ然リトセバ本問題（後者）ノ関スル限り選挙終了ヲ期シ何等力解決案ヲ工夫スベシトノ「アッショーランス」ヲ与ヘシムルニ止マルベキカト思考セラル處是レスマ容易ノ業トハ思ハレザルモ我方トシテハ結局右ノ方針ニテ進ムヨリ外ナキカト思考ス何分ノ御電訓ヲ仰ク

將又前者即チ移民法案ニ付テハ是非トモ問題ノ条項削除又ハ修正ノ手段ヲ講ゼシムル為不日重テ長官ト面議スベシ尤モ貴電第二号ノ四人國數標準ノ規定ニ關シテハ御來示ノ次第ハアルモ本案ノ主旨目的ニ鑑ミ右ハ決シテ我ニ有力ノ根拠アル議論トモ思考セラレザルノミナラズ肝腎ノ前記差別的条項削除ニ關スル我有力ノ主張ヲ弱ムル處大ナルニ付全然手ヲ触レザルヲ得策ト思考ス

尙前顧本使提出ノ覚書ニ於テハ該差別的条項ガ現行日米條約ニ抵触スルヤ否ヤノ点ニハ言及セズ專ラ右ノ如キ条項ハ若シ法律トナルニ於テハ文明世界ノ總テノ尊敬ト礼遇トニ值スル我國民ニ對スル不当ノ差別ナルコト及我政府ハ移民制限ニ關スル他國ノ主權ニ言議ヲ挿マントスルモノニアラザルナリ又他國ノ好マザルニ強テ之ニ我移民ヲ送ラントスルモノニアラザルモ我國民ノ正当自負心ヲ毀損スル此種ノ差別的立法ハ默過スルヲ得ズ我政府及國民目下冷靜自重ノ態度ヲ持シ居ルハ専ラ米國政府及國民ノ高キ正義心ニ信賴シ紳士協約及現行條約締結ノ經緯ニ照スモ米國政府ノ必ズヤ斯ル立法阻止ノ為適當ノ措置ニ出ヅベキヲ期待スルガ故ナリトノ大局的見地ヨリ立論セリ是レ條約論ヲ提起スルトキハ限リナキ「テクニカル」ノ議論ヲ誘起シ為ニ根本ノ問題ヲ疊ラシムルノ虞アルコト前例ニ徵シ明カナレバナリ尚右會見ノ際国籍ニ關スル憲法改正案ニ付テモ再ヒ口頭ニテ國務長官ノ注意ヲ喚起シタルニ長官ハ前回同様憲法改正案ノ通過容易ナラザルハ貴官モ知ラル通リナリト謂ヒ何等「コンミット」スルコトヲ避クルト共ニ余リ心配スルニ及バザルベシトノ態度ヲ仄カセリ本案ハ仮ニ日程ニ上ルコ

# 一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一〇三 一〇四

一一四

トアリトスルモ尚時日アルベケレバ移民法案ノ問題ヲ片付ケタル後ニ譲ル方得策ナルベシト思考ス

編註 日本外交文書大正十二年第一冊第五六文書

一〇三 一月十九日 在米国埴原大使ヨリ  
松井外務大臣宛（電報）

新移民法案中ノ差別条項削除乃至修正方ニ関

スル國務長官ノ意向問質シノ件

第三六号 （一月二十日接受）

往電第三一号ニ關シ一月十九日重ネテ國務長官ニ面会往電  
第三五号ノ情報ニ付注意ヲ喚起スルト共ニ其ノ後長官考慮  
ノ結果如何ヲ問ヒタルニ長官ハ本件ハ自分ノ熱心ニ注意ヲ  
注ギ居ル處ニテ既ニ一応大統領ニモ協議シ何トカ該条項削  
除又ハ修正ノ目的ヲ達セント苦心シツツアル次第ニテ目下  
ノ形勢ニテハ下院移民委員会ヲシテ先づ之ニ同意セシムル  
コトハ困難ナル折ニ本會議ニ其ノ儘報告セラレタリトスル  
モ絶望スベキニアラズ本案ニハ各方面ノ利害錯綜スル關係  
モアレバ議員説得ニハ諸種ノ考慮ト「タクト」ヲ要スル事  
情アルニ依リ本案進歩ノ各段階毎ニ日本政府ニ於テ心配セ  
ラルルハ無理ナラヌコトナリトスルモ為ニ事ヲ苛立ッテ自

分ノ尽力ヲ困難ナラシムル様ノコトナキヲ希望スト云ヘル  
ニ付本使ハ苟クモ長官ノ立場ヲ困難ナラシメントスルガ如  
キハ我政府ノ素志ニアラザルコト勿論ナルモ万ニモ斯力  
ル条項ガ法律トナルニ於テハ為ニ日米關係ノ上ニ生ズベキ  
重大ノ影響ヲ恐ルガ故ニ早キニ臨ミテ之ガ防止ノ途ヲ講  
ゼラレントヲ求ムルニ過ギズ若シ（脱）ナラザル可シト  
ノ保障ヲ与ヘラルニ於テハ我ハ喜ビテ之ニ信頼セントス  
ルモノナリト述べタルニ長官ハ本使陳述ノ趣旨ハ善ク諒解  
セリ  
自分ハ此際右ノ如キ保障ヲ与フル能ハザルモ最善ノ努力ヲ  
惜マザル可ク而シテ右ノ努力ガ結局成功センコトヲ希望ス  
ルモノナリト述べタルニ付本使ハ此上迫ルハ事ニ利アラズ  
ト思考シ長官ノ尽力成功ヲ切望スル旨述べテ分カレタリ  
右ノ如ク長官ハ該条項改廃ニ付我ニ對シ何等保障ヲ与フル  
コトヲ固ク固辞シツツアルモ其ノ口裏ニハ目的達成ニ付相  
当自信アルモノノ如クナルニ付我方トシテハ暫ク沈黙シテ  
長官尽力ノ成行ヲ観望スルコト然ルベキカト存ズ

一〇四 一月二十一日 在米国埴原大使ヨリ  
松井外務大臣宛

新移民制限法案ニ關スル國務長官宛我方覺書  
写送付ノ件

付屬書 大正十三年一月十五日付在米国埴原大使ヨリ

米国國務長官宛覺書写

付 記 右覺書ノ和訳文

（一月二十一日接受）

機密第五号

大正十三年一月二十一日

在米

特命全權大使 塠原 正直（印）

外務大臣男爵 松井 慶四郎殿

移民制限法案ニ關スル件

本件ニ關シ一月十五日國務長官ト会談ノ顛末ハ曩ニ往電  
第三一号ヲ以テ及報告置候處同日同長官ニ手交シタル覺書  
写別紙ノ通ニ有之候間委細右ニテ御聞悉相成度尙新移民法  
案中ノ差別的条項ハ若シ法律トナルニ於テハ現行ノ日米通  
商条約違反ナリトノ点ヲ右覺書中ニ入レサリシハ前記往電

アルカ如ク少クトモ先方ニ弁駁ノ糧ヲ供スルノ虞アル條約  
論ヲ出発点トスルニ於テハ前例ニ徵シ兔角ニ「テクニカル」

ノ議論ヲ誘起シ我方主張ノ鮮明ヲ害シ其ノ力ヲ弱ムルヲ虞

書写  
大正十三年一月十五日付在米国埴原大使ヨリ米国國務長官宛覺

Copy.

JAPANESE EMBASSY  
Washington

## MEMORANDUM

The Japanese Ambassador at his interview with the Honorable the Secretary of State on December

13th, 1923, took occasion to call the Secretary's attention to certain provisions of the bill which was introduced in the House of Representatives on December 5, 1923, by Mr. Johnson of Washington, entitled "A Bill to limit the immigration of aliens into the United States, and to provide a system of selection in connection therewith, and for other purposes," in their relations to the existing commercial treaty between Japan and the United States and to certain understandings of the two Governments.

A similar measure is before the Senate also, which was introduced in that body on December 6, 1923 by Mr. Lodge of Massachusetts.

In the bill there is, among other provisions, one which excludes from admissible classes aliens not eligible to United States citizenship (Sec. 12, b, H.R.

cy, which stands for international justice and is opposed to discriminations against American nationals.

It may be recalled that in concluding the so-called "Gentlemen's Agreement" of 1907, which involved no small sacrifices on the part of the Japanese Government, and in making the Declaration of February 21, 1911 which is appended to the Commercial Treaty of 1911, between Japan and the United States, the sole desire of the Japanese Government was to relieve the United States Government from the painful embarrassment of giving offence to the just national pride of a friendly nation, which is ever so earnest and has spared no effort in preserving the friendship of the United States.

In agreeing to the terms of the so-called Gentlemen's Agreement, which were arranged in deference to the suggestions and wishes of the United States Government, and in concluding the Commercial

101).

By the decision of the United States Supreme Court of November 13, 1922 in the case Takao Ozawa vs. the United States, noneligibility of Japanese nationals to United States citizenship is determined.

If therefore the provision above referred to is to be permitted to remain in the measure when it becomes a law, it means an open declaration on the part of the United States, that Japanese nationals as such, no matter what their individual merits may be, are inadmissible into the United States, while other alien nations are admissible on certain individual qualifications equally applicable to them all. It is not easy to understand that this would not be an arbitrary and unjust discrimination reflecting upon the character of the people of a nation, which is entitled to every respect and consideration of the civilized world. Nor does it seem to harmonize with the well-known principles of America's foreign poli-

Treaty of 1911, one important object of which for Japan was, it will be remembered, to avoid such discriminatory legislation as that now under consideration, the American Government showed that it fully understood and appreciated the Japanese opposition to any form of discrimination against Japanese people as such, and virtually assured the Japanese Government that, in return for these sacrifices, made in order to preserve the self-respect of their nation, the United States Government will see to it that there shall be no discriminatory legislation on the part of the United States against Japanese people as such.

For instance in the note of February 25, 1911, informing the Japanese Ambassador at Washington of the ratification of the Treaty of Commerce and Navigation between the United States and Japan, the Secretary of State stated in part as follows:

"By the Resolution of the Senate the advice and

consent of the Senate to the ratification of the Treaty 'is given with the understanding, which is to be made a part of the instrument of ratification, that the Treaty shall not be deemed to repeal or affect any of the provisions of the Act of Congress entitled "An Act to regulate the Immigration of Aliens into the United States," approved February 20, 1907.'

Inasmuch as this Act applies to the immigration of aliens into the United States from all countries and makes no discrimination in favor of any country, it is not perceived that your Government will have any objection to the understanding being recorded in the instrument of ratification.'

The meaning of the last paragraph above quoted seems to require no elucidation.

To speak frankly, the mere fact, that such a provision is introduced in the proposed measure, in apparent disregard of these most friendly and effective

ernment to effectively prevent by all honorable means the entrance into the United States of such Japanese nationals as are not desired by the United States, and have given ample evidences thereof, the facts of which are well-known to the United States Government. To Japan the question is not one of expediency, but of principle. To her the mere fact that a few hundreds or thousands of her nationals will or will not be admitted into the domains of other countries is immaterial, so long as no question of national susceptibilities is involved. The important question is whether Japan as a nation is or is not entitled to the proper respect and consideration of other nations. In other words, the Japanese Government ask of the United States Government simply for that proper consideration ordinarily given by one nation to the self-respect of another, which after all forms the basis of amicable international intercourse throughout the civilized world.

endeavors on the part of the Japanese Government to meet the needs and wishes of the American Government and people, is mortifying enough to the Government and people of Japan. They are, however, exercising the utmost forbearance at this moment, and in so doing they confidently rely upon the high sense of justice and fair-play of the American Government and people, which, it properly approached, will readily understand why no such discriminatory provision as above referred to should be allowed to become a part of the law of the land.

It is needless to add that it is not the intention of the Japanese Government to question the sovereign right of any country to regulate immigration to its own territories. Nor is it their desire to send their nationals to the countries where they are not wanted. On the contrary the Japanese Government showed from the very beginning of this problem their perfect willingness to cooperate with the United States Gov-

The Japanese Ambassador begs to request, under instructions from His Majesty's Minister for Foreign Affairs, that the Secretary of State will be good enough to give his early and sympathetic consideration to the matter as above presented. Further he ventures to hope that the memorandum which he had the honor of handing the Secretary of State on December 4, 1923, may be considered in connection with the present one, for while they relate to two distinct matters, in their essence both representations may be applied with equal cogency to the one as to the other.

(Signed) M. Hanihara

January 15, 1924.

(文 附)  
和解書ハ承認シ

日本大典ノ一九二二年十一月三十日正規署名印記トテ承認シ  
之鑑一九二二年十一月三十日「スルハヌレ」至選正鑑印「公  
ニハハハ」此ノ正記ハ鑑ニ鑑玉ヲハシタニ「和解書ハ大國

## 一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一〇四

一一〇

セントスル外国移民ノ制限及移民選択制度其他ニ関スル規定ヲ設ケントスル法律案」ト題スル法案ト現行日米通商条約並ニ両国政府間ノ了解トノ関係ニ就キ長官ノ注意ヲ喚起シタルカ同種ノ法案ハ一九二三年十二月六日「マサチュー・セツツ」州「ロッヂ」氏ヨリ上院ニモ提出セラレタリ

前記法案規定中ニ合衆国市民トナルノ資格ナキ外国人入國ヲ許可スヘキ階級ヨリ除外スルノ条項アリ

然ルニ小沢孝雄対合衆国事件ニ於テ一九二二年十一月十三日合衆国大審院ノ下セル判決ニヨリ日本国民ノ合衆国市民権ナキコト確定セラレタリ

従テ若シ前記法律案ニシテ該条項ノ存シタル儘法律トナルニ於テハ他外国国民力均等ニ適用セラル個々ノ条件ノ下ニ入国ヲ許可セラルニ反シ日本国民ハ其特質アルニ係ラス其日本人タルカ為メ合衆国入國ヲ許可セラレサルコトヲ米国ニ於テ公然宣言スルコトトナルヘシ然ルニ右ハ文明諸國ノ凡テノ敬意ト考量トヲ受クルノ資格アル国民ノ特性ニ對スル專断不当ノ差別待遇ナルハ容疑ノ余地ナキカ如ク且又斯クノ如キハ國際正義ヲ擁護シ米国民ニ対スル区別待遇ニ反対スル一般ニ周知セラルル米国外交政策ノ本義ニ合致

日本政府ニ於テ合衆国政府ノ懲憲及希望ニ從ヒ定メラレタル所謂紳士協約ノ条項ニ同意スルニ當リ將亦今尚記憶セラル如ク目下問題トナレルカ如キ差別立法ヲ避クルヲ以テ日本政府ノ主要目的ノ一トシタル一九一一年通商條約ヲ締結スルニ當リテモ米国政府ハ日本人タルノ故ヲ以テ日本人ニ対シ設クル差別待遇ハ其如何ナル形式タルヲ問ハス日本ニ於テ反対ヲ為スヘキコトヲ篤ト了解シ且ツ之ヲ諒トスルコトヲ表示スルト同時ニ日本政府ニ対シ其ノ払ヒタル犠牲ノ報酬トシテ其國家的自尊心ヲ傷ケサランカ為メ合衆国側ニ於テ将来日本人タルノ故ヲ以テ日本人ニ対シ差別的待遇ヲ為ササラシメサル様尽力スヘキコトヲ日本政府ニ向テ保モノナリ

障セリ例ヘハ一九一一年二月二十五日日米通商航海條約ノ批准ヲ通告セル書簡中ニ於テ國務長官ハ華盛頓駐劄日本大使ニ対シ左ノ如ク陳述セリ

上院ハ一九〇七年二月二十日裁可セラレタル「合衆国ニ入国セントスル移民ヲ制限セントスル法律」ト題スル法

律ノ如何ナル規定ヲモ無効ナラシメ又ハ之ニ影響ヲ及ホスヘキモノト認ムヘキニアラストノ了解ノ下ニ本條約ヲ批准スルモノニシテ且ツ右ハ批准書ノ一部ヲ為スヘキモノナル趣同院ニ於テ決議致候

然ルニ本法ハ合衆国ニ入国スヘキ一切ノ外国移民ニ適用セラレ或國ノ利益ノ為メニ區別待遇ヲ設クルモノニアラサルヲ以テ貴國政府ハ批准書ニ記載セラレタル右了解ニ対シテハ何等異議ヲ挿サマレサルヘシト思料致候

以上引用セル末節ノ意味ニ就テハ茲ニ別ニ説明ヲ要セサルヘシ

率直ニ陳述セハ前頃法案中ニ斯ル規定ヲ挿入セルハ明カニ日本政府カ合衆国政府及國民ノ必要ト希望トニ添ハシカ為ナシタル最モ友誼的ニシテ且実効アル努力ヲ無視スルモノニシテ日本政府及國民ノ最モ苦痛トスル所ナリ然レトモ日本ニ於ケル排日移民法成立問題 一〇四

スルモノト思惟セラレス

本政府及國民ハ目下能フ限り隱忍維レ努メ合衆国政府及人民ノ正義及公平ノ觀念ニ倚頼シ以テ正当ノ方法ニヨリ其考量ヲ求ムルニ於テハ前記ノ如キ差別規定ヲ米国法律ノ一部ト為スヘカラサル理由ヲ容易ニ諒解セラルヘキヲ確信スルモノナリ

日本政府ニ於テハ自國ニ渡來セントスル移民ヲ制限スヘキニシテ又日本國民ヲ欲セサル國ニ向テ之ヲ送ラント欲スルモノニアラス却テ日本政府ハ本問題發生ノ当初ヨリ合衆國ノ欲セサル種類ノ日本國民ノ合衆國入國ニ対シ名譽ニ合致セル方法ニヨリ有効ニ防止スルカ為メ合衆国政府ト全然協力スルノ意思アルヲ表明スルト共ニ之ニ対スル十分ノ証拠ヲ示セルモノニシテ此事ハ合衆国政府ニ於テ篤ト熟知セラルル所ナリ惟フニ本問題ハ日本ニ対シテハ政策ノ問題ニアラスシテ主義ノ問題ナリ數百又ハ數千ノ國民カ他國ノ領土ニ入國スルヲ許容セラルルヤ否ヤノ問題ハ國民ノ感受性ノ問題ヲ包含セサル限り何等重キヲ置クヘキモノニアラス日本政府ノ重大視スル所ハ日本カ國家トシテ他國民ノ受クル尊敬ト考慮トヲ与ヘラルルヤ否ヤノ問題ナリ換言スレハ日

## 一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一〇五

一一二

本政府ハ単ニ合衆国政府ニ対シ一国民カ他国民ノ自尊心ニ通常与フル考量ヲ受ケンコトヲ要求スルノミニシテ此ハ文明諸国間ニ於ケル國際的交誼ノ基調トナルモノナリ

仍テ下名ハ茲ニ日本外務大臣ノ訓令ニ基キ國務長官閣下力ニ對シ迅速且同情アル考慮ヲ加フルノ好意ヲ有セラレントコトヲ請フト共ニ更ニ一九二三年十二月四日下名ヨリ國務長官閣下ニ手交スルノ光榮ヲ有シタル覺書ニ対シテハ本覺書ト関連シテ考慮セラレンコトヲ希望ス蓋シ右二個ノ申入ハ夫夫別箇ノ問題ニ關スルモノナリト雖モ其一方ノ主要論点ハ他方ニ対シ均シク強ク援用シ得ルモノナレハナリ

一九二四年一月十五日

埴 原 正 直

一〇五 二月二十二日(着) 在米國墳原大使(ヨリ)

松井外務大臣宛(電報)

新移民法案ノ排日条項不成立ノ場合ニ於ケル

対処方針内示方請訓ノ件

第一一八号

二月二十一日國務長官ニ面会貴電合第六三号ノ英訳ヲ示シ右ハ素ヨリ我カ新聞評論ノ全部ニ非サルモ以テ本問題ニ対

テ正当ニ有スル自負心ニ対シ米国民カ至当ノ考慮ヲ払ハントヲ望ムニ過キサレハナリト述ヘタルニ長官ハ自分モ其点ヲ恐ルルカ故ニ精々努力シツツアル次第ナリト云ヒ更ニ長官ハ米国人中此ノ際條約ニ依リ本問題ノ解決ヲ図リテハ如何トノ提議ヲ為ス者アル處之ニ対シ自分ハ仮ニ條約締結力解決ノ一案ナリトスルモ右ハ政争激甚ノ此ノ際唯ニ上院ノ賛同ヲ得ル見込皆無ナルノミナラス却テ無用有害ノ論議ヲ挑発シ徒ラニ事態ヲ悪化セシムルニ過キサルヘキニ依リ此ノ際ハ本件法案排日条項ノ不成立ニ努力ヲ傾注スルヲ最善ノ策ナリト思考ストノ態度ヲ持シ居レリト云ヘリ

右ハ或ハ本使ヨリモ此際條約案ノ考慮ヲ促シ來ル事アルヘキヲ見込テノ暗示カトモ想像サルル結果シテ然リトセバ仮ニ此際我方ヨリ条約商議開始ヲ促スモ長官ヲシテ之ニ応ゼシムル見込ハ當分之レ無カルベシト思考セラレル乍去当期議會ニ於テ幸ニ移民法案排日条項ヲ不成立ニ終ラシムルヲ得タリトスルモ之ニ依リ問題ハ毫モ解決セラレズ所詮現行日米條約ノ改(脱)アルカ又ハ新條約商議ニ解決ノ途ヲ求ムル外ナカルベク然ル場合ハ現行紳士協約ニ依リ渡米可能ナル者ノ範囲ヲ更ニ極度ニ制限シ且紳士協約中ノ少クトモ或

ル条項ハ正式條約中ニ抱容スルノ覺悟ナクテハ到底商議成立ノ見込ナカルベク又我方ニ右ノ覺悟アリテモ從来当國議會側及國民ノ多數ガ見テ以テ純タル内政事項ナリトスル本問題關係ノ事柄ニ付条約ヲ以テ解決ヲ与ヘントスル義ニハ有力ノ異論アルベキ事明瞭ナルニ付愈我方ニ於テ條約案以外解決ノ途ナシト見込ヲ立テタル場合ハ機會ヲ逸セズ當國政府當局ハ素ヨリ成ルベク一般ノ輿論ヲ其ノ方面ニ傾クルノ施措ニ出デザルベカラズ就テハ日米懇談会決議事項(昨年二月十五日付在桑港總領事發貴大臣宛機密公第一三号往信) Buell 教授案(在紐育總領事發貴大臣宛電報第四号)「ギューリック」博士案(二月十六日付本使發貴大臣宛機密第一五号往信)等ノ諸案及幣原「モリス」内商議ノ経過等ヲモ篤ト御参考ノ上大綱ニテモ我政府ノ御方針ヲ最終確定案ノモノトスルコトナク成ルベク早自ニ御内示アル様致シタシ但右御(内)示前ト雖事態ノ推移進展如何ニ依リテハ本使ノ裁量ニ依リ我方ニ有利ナリト認メラル方向ニ關係各方面ノ活動又ハ機運ヲ導ク様機会ヲ逸セズ施措スル必要アルハ勿論ナル處万ニモ本使ノ為ス處ト政府ノ期スル處トニ多大ノ懸隔ヲ生ズルガ如キ事アリテハ甚ダ遺憾ナル

一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一〇五

一一三

スル長官ノ態度闡明カ如何ニ我国ニ於テ歓迎セラレタルカノ一班ヲ窺フニ足ルヘク尤モ我カ政府ノ所感ニ付テハ本使ハ何等報道ヲ有シ居ラサルモ右長官ノ態度ヲ知リテ喜ヒタルヘキハ想像ニ余リアリ本使ハ深ク長官努力ノ成功ヲ期待スル者ナリト云ヒ更ニ語ヲ繼キ自分ハ未タ自分ノ努力カ成功スヘシト確言シ得サルモ非公式ニ腹藏ナク云ヘハ自分ニハ目下一身上ノ政治的意図 (personal political intention) ナク從テ堂々自分ノ所信ヲ主張スルニ有利ナル立場ニアルカ幸ニシテ本件ニ付テハ大統領モ自分ト所見ヲニシ自分ノ努力ヲ支持シ居ルカ故ニ相当ノ効果ヲ挙ケ得ヘキ望ミハアルモ何分ニモ大統領選挙ヲ前ニスル目下ノ政局ナレハ安心スル能ハス但シ斯ル一見排日の法案ノ現出如何ニ拘ハラス米國民ノ大多数ハ日本ニ対シ眞実ナル友情ヲ有スルモノナルコトハ諒解アリタシト云ヘルニ付本使ハ飽迄長官努力ノ成功ヲ祈ルト共ニ不幸万ニモ右様ノ法案議会ヲ通過センカ如何ニ米國民大多数カ我國ニ友情アリト云フモ我カ国民ノ大多数ハ之ヲ諒解シ得サルヘシ蓋シ日本ニハ米國ノ好マサル移民ヲ米国ニ強ヒントスル意思ナク唯日本國民トシ

二付為念此際改メテ請訓スル次第ナリ

一〇六 三月十四日(着) 在米国埴原大臣宛(電報)

排日問題緩和対策トシテ渋沢栄一又ハ金子堅太郎派遣ニ関スル真偽問合セノ件

第一七〇号

本月六日東京(不明)及桑港邦字新聞著電ニ依レバ我政府ニ於テハ排日問題緩和ノ為メ近ク渋沢子又ハ金子子ヲ渡米セシムルコトニ内定セリト伝ヘラル然ニ御承知ノ通り大統領選挙ヲ控ヘ政争近年ニナク劇甚ヲ極メ居ル此際右様ノ視察來米ハ徒ラニ事態ヲ紛糾悪化セシムルノ大ナル危険コソアレ之ニ依リ排日緩和ノ実際的効果ヲ挙ゲ得ル望ミハ先づ絶無ト申スモ過言ナラサルヘシ又是非トモ斯ル使節ヲ派遣セントナラハ大統領選挙戦終了後ニ於テ適當ノ時機ヲ選ブコト必要ト思考セラル處果シテ右様ノ御内議アル次第ナルヤ真相折返シ御回電アリタシ

一〇七 三月十五日 松井外務大臣ヨリ  
在米国埴原大使宛(電報)

渋沢等派米ノ件ハ未確定ナル旨回答ノ件

惹起スベキヲ恐レ目下總理並ニ本大臣ニ於テモ篤ト考慮中ナリ

尚申ス迄モ無キ儀ナガラ本案ニ関スル形勢ノ推移ニ就テハ今後トモ一層御注意相成其経過ハ隨時詳細御報告相成度殊ニ「ヒューズ」トハ常ニ接触ヲ保持セラレ同氏ノ観測乃至意見時々御報告相成様致度シ

一〇八 三月二十一日(着) 在米国埴原大使ヨリ  
松井外務大臣宛(電報)

移民法案ノ差別条項ニ対スル國務長官ノ態度

不变ノ件

第一九六号

三月二十日國務長官ニ面会ノ節本使ハ「ジョンソン」新移民法案(往電第一九〇号参照)ニ言及シ新聞紙ノ伝フル所ニ依レハ第三条移民ノ定義除外例中ニ新タニ現行条約上入國ノ権利アル外国人云々ノ一項ヲ追加シタル事ニ依リ第一条(b)項帰化不能ノ外国人排斥ノ規定ニ対スル國務長官ノ異議ハ或ハ緩和セラル可キヤニ諒解スルモノアルカ如クナル處自分ハ其ノ万々アリ得ヘカラサル事ナルヲ信スルモ為念一応確メ置キタキ旨述ヘタルニ長官ハ自分ノ態度ハ二月

一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一〇八

第一一一号 極秘

貴電第一七〇号ニ関シ

渋沢子又ハ金子子派遺ノコトハ目下ノ所何等確定シ居ル次

情勢ニ対シ憂慮ヲ禁ゼズ總理大臣並ニ本大臣ニ対シ数年来政府ノ採り来レル態度ヲ非難シ今後ノ方針ニ対シ相当強硬ナル意見ヲ披瀝シ是非此際民間ヨリ有力者ヲ簡派シ貴官ト策応シテ排日法案ノ通過防止方ニ努力スルノ緊要ナルコトヲ力説スル者アル所當方ニ於テハ前頭貴電御来示ノ通目下ノ情勢ニ顧ミ本邦民間ヨリ人ヲ特派シ何等運動ガマシキ行動ヲ為スハ却テ問題ノ紛糾ヲ招致シ貴官折角ノ御尽瘁ノ障害トナルコトナキヤヲ懸念セラルニ付然ルベクスカル措置ヲ「デスカレーブ」スルニ努メ已ムヲ得ザレハ選挙後ニ派遺スルコト致度シト考ヘ居ル次第ナルモ翻テ惟フニ不幸ニシテ事態再転悪化シ万々一同案ニシテ下院ヲ通過シ更ニ上院ノ同意ヲ経ルガ如キ情勢ニ立至ルニ於テハ勃發スル輿論ノ憤激ハ本邦昨今ノ情勢ニ徴シ之ヲ想察スルニ難カラザルノミナラズ民間有力者ニ於テ政府ノ無為無策ヲ難ズルノ声愈旺トナリ遂ニ対内關係ニ於テ大ニ憂慮スベキ事態ヲ

八日付「ジョンソン」宛書翰(二月十六日公第一七八号)ニ發表セル通ニテ爾來何等変更ナク右三条ノ追加ニ拘ハラス第一二条(b)項存続ニハ反対ナリト明言シ更ニ右ノ事實ハ下院移民委員ノ篤ト承知セル所ナリト付言シタルニ付本使ハ元ヨリスケアル可シト信シタルモ親シク長官ノ言明ヲ聽キ一層安心セリ尚申ス迄モナク自分ハ専ラ長官ノ努力ニ信頼シ其ノ成功ヲ期待スルモノナリトノ意思ヲ述ヘテ該案今後ノ成効ニ対スル長官ノ見込ヲ語ラシメント試ミタルモ長官ハ堅クロヲ瞭ミテ此点ニ関スル應答ヲ避ケタリ各方面ヨリノ情報及從来ノ國務長官トノ会談ニ依リ本使ノ得タル感想トヲ総合シテ考フルニ議会ハ目下大統領選挙戦ヲ見越シ極度ノ政争ニ熱中シ居リ両院何レモ共和党ノ多數(脱)極メテ僅少ナル為メ大統領ノ希望カ議会ニ容レラル事容易ナラス現ニ下院ハ国民ノ重要視セル減税案及兵士「ボーナス」案ニ対シ大統領ノ熱誠ナル希望勧告スラ無視セル態度ニ出テタル程ナルヲ以テ移民法案ニ付テモ下院カ果シテ如何ナル行動ニ出ツヘキヤ國務長官トシテモ観測困難ナルヘク尤モ共和党院内領袖等ヲ通シ画策努メツツアル模様ナルモ下院ニ於テ我関係条項ノ削除又ハ修正ニ成功シ得ルヤ否

モ下院ニ於テ我関係条項ノ削除又ハ修正ニ成功シ得ルヤ否

## 一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一〇九

一二六

ヤニ付テハ未タ何等確タル見込ヲ立テ得サルニ非サルカ果シテ下院ニ於テ目的ヲ達スル能ハサル場合ハ長官ノ所言ニ比較的賛成者多キ上院ニ於テ喰止策ヲ講セントスルモノナルヘク之ニハ相應望ヲ嘱シ居ルモノノ如ク案セラル何レニシテモ此際我方トシテハ長官ノ努力ニ対シ不信任又ハ不安ノ意ヲ仄メカシ其ノ折角ノ意氣込ヲ些カニテモ鈍ラシムル如キ仕打ハ一切之ヲ避ケ飽迄其ノ誠意ニ信頼シ其ノ努力ノ成功ヲ期待ストノ態度ニ出スルヲ最モ得策ト思考シ本使ハ此方針ニ依リ長官ヲシテ我方ノ関スル限り愉快ニ其ノ努力ヲ継続セシムル様努メ居レリ

桑港ニ転電シ布畦ヲ含ム沿岸領事ニ転送セシム

一〇九 三月二十八日(着) 在米國埴原大使(ヨリ)  
松井外務大臣宛(電報)

排日移民法案ノ下院ニ於ケル形勢ニ闇シヒュ

一ズ國務長官ト会見及ビ紳士協約ノ要旨公表

準備方ニ闇スル件

第二一八号 極秘

三月二十七日國務長官ニ面会シ往電第二一〇号下院移民委員会報告ニ言及シ本使ハ長官ガ絶ヘズ必要ノ措置ニ出デツ

利益ヲ供スル危険大ナルガ故ニ断ジテ不可ナリトスヘク依テ自分ノ密カ(考カ)ニ憂慮シツツアルハ此際貴官(本使)ヨリ例

ヘバ『下院移民委員会報告ニ依レバ所謂紳士協約ノ内容ニ就キ種々ノ誤解又ハ疑惑存スルモノノ如クナル處日本政府ノ諒解シ実行セル該協約ノ骨子ハ斯々ノモノナルニ付立法者ニ於テ誤解又ハ疑惑ナカラシコトヲ希望ス』ト云フ意味ノ公文(右公文ハ予メ貴我双方ノ間ニ内密打合セ作製スルヲ便宜トスベク而已ナラズ内ニ摘記スペキ協約内容ノ骨子ハ極メテ簡明ナルラ利トスベシ)ヲ自分ニ宛テラレ自分ヨリ之ヲ適宜両院ニ開示スルコトヲ得バ政府ノ立場ヲ弁護スル議員ニ有力ノ利器ヲ供スルヲ得ヘキカト云フ一案ナリ併シ右ハ未ダ成案トシテ貴官ニ提示スル迄ニ熟シ居ル次第アラズ從ヒテ東京ヘハ何等申送ラルコトナク只万一二処スル準備ノ為貴官限り予メ考慮シ置カレンコトヲ希望スト

述べ要スルニ自分トシテハ若シ下院ニ於テ本案ヲ阻止スル能ハズバ上院ニ於テ更ニ最善ノ努力ヲ試ムベシトノ意味ヲ言外ニ仄カセリ依テ本使ハ自分一個ノ所見ニ依レバ紳士協約ノ骨子丈ケハ數行ニシテ之ヲ尽シ得ベキニ付若シ果シテ必要ナリトセバスル公文ヲ發スルコトモ必ズシモ難事ナラ

ツアルヲ承知スルガ故ニ右報告ヲ読ミテ徒ラニ激スルモノ

ニアラザルモ本案進行ノ経過ヲ注意シ報告ヲ誤ラザルハ自分ノ義務ナルガ故ニ長官ガ此際公然ノ資格ニ於テ該案ノ下院ニ於ケル運命如何ニ付キ何等言及スルノ難キハ自分ノ諒解ニ苦シマザル處ナルモ切メテ純然タル一個人トシテ想ニテモ内示ヲ得バ幸ナリト述ベタルニ長官ハ下院ノ関スル限り目下何トモ見込ミノ付ケ様ナク從テ全然個人トシテルヲ恐ル殊ニ該委員会報告中自分ニ不安ヲ抱カシムルモノ

貴官限リニ吐露スレバ下院ニ於テハ結局本案通過ノ危険アリトモ何等言明スルノ権利ナキモ單純ナル自分ノ信条ヲ

ニ至ル迄在米日本人ノ数ガ著シク增加シタル結果ヨリ見テ該協約ヲ不成功ナリトスル二点ニアリ此点ニ闇シ議員ノ多數ヲ納得セシムルニ足ル有力ノ弁明資料ヲ提供スルニアラ

ザレバ音ニ下院ニ於テ而已ナラズ上院ニ於テモ本案反対ノ討議上或ハ大ナル不利ノ地位ニ陥ルコトナキヤラ憂慮シツ

ツアリ然リトテ該協約ハ日本政府ノ同意ナシニ之ヲ発表スル能ハザルハ勿論又仮リニ同意ヲ得タルトスルモ該協約關係ノ浩瀚ナル往復文ヲ公表スルハ該協約反対論者ニ種々ノ

議案申ス迄モナクスルコトハ機ヲ失シテハ取返シノ付カヌコトナルニ付キ手遅レニナラヌ様予メ御配慮ヲ乞フ

尚紳士協約ノ骨子トシテ摘記スペキ本使差当リノ私案ハ別電第二一九号ノ通ナリ御参考迄

第一四八号

一一〇 四月一日 在米國埴原大使(ヨリ)  
松井外務大臣宛(電報)

リード法案ノ差別条項ニ闇シ米国政府ノ注意

喚起方訓電ノ件

ザルヘキカト思考スルモ猶篤ト考慮シ置クベシト答ヘ置ケリ  
就テハ若シ國務長官ヨリ愈々確実ニ右ノ如キ申出アル場合我方トシテハ直ニ応ズルヲ得策トスベク其場合紳士協約ノ骨子トシテ摘記スペキ廉々至急御攻究ノ上予メ御内申置キアリタシ申ス迄モナクスルコトハ機ヲ失シテハ取返シノ付カヌコトナルニ付キ手遅レニナラヌ様予メ御配慮ヲ乞フ(續註)尚紳士協約ノ骨子トシテ摘記スペキ本使差当リノ私案ハ別電第二一九号ノ通ナリ御参考迄

編註 別電二一九号省略

# 一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一一

一二八

ノト推測セラル所「リード」案中ニ於テモ第三条(8)ニ帰化能力ノ有無ニ依ル差別規定アリ又第八条中布畦ノ人口ヲ計算セサルハ明カニ本邦人ニ対スル不公平待遇ナルニ付此等ノ諸点ニ付テモ当局ノ注意ヲ喚起シ適當ニ訂正セシムル様御配慮アリタシ

一一 四月二日 松井外務大臣ヨリ  
在米國埴原大使宛（電報）

排日立法阻止ノ為メ紳士協約ノ要旨及ビ其ノ

実行状況ノ発表方法ニ關シ訓令ノ件

別 電一 四月二日松井外務大臣堀在米國埴原大使宛電  
報第一五一号

二 右同電報第一五二号

紳士協約實行ニ關スル日本政府ノ立場並ニ了  
解点（別電乙号）

第一五〇号 極秘

貴電第二一八号及同別電ニ關シ

紳士協約ハ其ノ性質上發表ヲ避クヘキモノニシテ同協約締結當時ノ目的ノ一半ハ之カ發表ニ依リテ失ハル次第ナレトモ今日ニ於テハ同協約ノ存在ハ殆ント周知ノ事実ナルノミナラス最近下院移民委員会報告等ニ見ユルカ如ク同協

本邦ノ對内關係ニ於テ多少考量ヲ要スルモノアルニ付貴官ヨリ直接公表スル形式ヲ避ケ國務長官ニ於テ排日立法阻止ノ為必要上同協約ノ要旨又ハ貴官ノ書面ヲ立法部ニ開示シタル如キ形式ヲ採ラレタシ

（別 電一）

四月二日松井外務大臣堀在米國埴原大使宛電報第一五一号  
発表スベキ紳士協約ノ内容要旨（別電甲号）

第一五一号（極秘）

（別電甲号）

（一）紳士協約ノ内容ノ要領ハ大体本省印刷ノ幣原・モ里斯協議英文議事録第七頁下段乃至第十頁所載ノ程度ノ項目ニ就キ適宜取捨選択セラレタシ

（二）労働者ノ定義ハ貴電第二一九号所載ノ形式ニ拠ラス一九〇七年大統領令ニ定ムル定義ヲ採用セルコトヲ記シ且可成其内容ヲ引照スルコトセラレタシ

（三）紳士協約ノ下ニ於ケル制限的措置トシテ前記議事録第十一页及至十五頁所載ノ趣旨ヲ簡単ニ摘記シ且ツ写真結婚ニ対スル取締ヲ付加シ置カレタシ

四 養子ノ渡航取締ニ關シテ言及ヲ避ケタシ

一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一一

約ニ対スル誤解又ハ疑惑ノ伝ハルニ於テハ此上之ヲ秘密ニシ置クコトハ却テ排日派ニ攻撃ノ武器ヲ供シ我方ニ不利ナル結果ヲ來スヘキヲ以テ今日之力内容ノ要点ヲ適當ノ方法ニ依リテ米国人ニ知ラシメ一切ノ誤解疑惑ヲ一掃スルハ寧ロ機宜ニ適スト思考セラルニ付國務長官ト打合セノ上別電甲号所掲ノ程度ニ於テ同協約ノ要領及之ニ基ク政府ノ制限的措置ノ要旨ヲ貴官ヨリ書面ヲ以テ同長官ニ通知シ同長官ヲシテ該書面ヲ適當ニ利用セシムルコトト致度尚ホ之ト同時ニ別電乙号所掲事項ハ此際紳士協約ノ實行ニ關スル帝國政府ノ立場並ニ領解ヲ明カニスルト共ニ同協約ニ対スル下院委員会ノ非難ヲ排除シ移民法案通過ヲ阻止スルニ効果アルヘシテ思考セラルニ付協約内容ヲ立法部等ニ通知スル場合ハ併セテ之ヲ通知スルコトト致度シ貴電中ニアル「立法者ニ於テ誤解又ハ疑惑ナカラソコトヲ希望ス」ト云フ如キ文句ハ國務長官ヨリ立法者宛書翰中ニ記載スルコトハ適當ナランモ貴官ヨリ國務長官宛書翰中ニ記載スルコトハ立法ニ干涉云々ノ非難ヲ誘起スル虞アルヘキニ付用語ニ付テハ更ニ御考量アリタシ  
尙ホ此際紳士協約ヲ本邦側ヨリ公表スル形式ヲ採ルコトハ

（別 電二）  
右同電報第一五二号  
紳士協約實行ニ關スル日本政府ノ立場並ニ了解点（別電乙号）

第一五二号（極秘）

（別電乙号）

（一）紳士協約ハ労働者ノ渡米阻止ニ關スル日本政府ノ行政的措置ヲ定メタルモノニシテ米國ノ移民制限ニ關スル主權ニ対シ制限ヲ加フルモノニアラサルハ勿論ニシテ一九一七年ニ制定セラレタル現行米國移民法カ紳士協約ニ係ラス一般外国人ト共ニ日本人ニモ適用アルハ此事実ヲ裏書スルモノナリ

（二）然レトモ同協約ハ労働者ノ渡航制限ニ關スル差別的米國立法カ日本ノ自尊心ヲ傷クルコト大ナルヲ顧念シ斯ノ如キ差別的立法ヲ不必要ナラシムル手段トシテ実行セラルニ至レルモノニシテ日本政府ハ爾來同協約ノ目的ヲ達成センカ為メ其定ムル自制的制限ヲ誠実ニ実行スルモノナルト共ニ米國ニ於テモ其当初ノ立場ヲ維持シ日本ノ自尊心ヲ傷ツクルカ如キ立法手段ニ訴ヘサルコトヲ確信シテ疑ハサルモノナリ

一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一一二

一三〇

(三) 紳士協約ハ或種ノ例外ヲ除キ一切ノ労働者ノ米国渡航ヲ阻止セントスルヲ目的トスルモノニシテ此措置ハ日本政府ノ「アナウンスド、ポリシー」ニシテ将来ニ於テモ之ヲ継続セントスルノ覺悟アルト共ニ同協約ハ又其目的ヲ貫徹シツツアルモノナリト信ス

一一二 四月十日 松井外務大臣ヨリ  
在米国埴原大使宛 (電報)

リード移民法案入国条項ニ対スル問題提起ノ

可否二付キ意見回示方訓電ノ件

別 電 四月十日松井外務大臣発在米国埴原大使宛電報  
第一五八号  
リード移民法案入国条項ニ対スル疑義

第一五七号

貴電第二四四号ニ関シ

委員会ヨリ報告セラレタル「リード」法案ニハ条約又ハ協約ニヨリ入國ノ権利アル者ハ移民ト見做ササル旨ノ条項ヲ包含シ現行比例制限法ト同シク本邦人ヲ該法ノ適用外ニ置クコトトナリ居ル趣ナル處同条項ニ対シテハ別電第一五八号所掲ノ如ク各種ノ反対乃至疑問アリ帝国政府トシテハ之

ヲ削除シ各国ト平等ノ待遇ヲ受クルコトヲ希望スルモ此際此問題ヲ提起スルトキハ交渉ヲ複雑困難ナラシムル虞アルニ付之ヲ提起スヘキヤ否ヤ三付テハ尚考量ヲ要スル次第ナル處右ニ対スル貴官御意見承知致度ニ付何分ノ儀至急回電アリタク尚必要ニ応シ右削除方可然御尽力アリタシ

(別電)

四月十日松井外務大臣発在米国埴原大使宛電報第一五八号

別電第一五八号

(一) 紳士協約ハ労働者渡航制限ニ關スル帝国政府ノ行政的措置ニシテ國際間ノ協約ニ非ス帝国政府ハ内外ニ対シ從來此説明ヲ以テ一貫シ来リシモノニシテ米国ノ立法ヲ以テ之ヲ國際協約ノ如ク取扱ハルハ事實ニ反スルノミナラス帝國政府ノ甚々迷惑トスル所ニシテ此点ニ關シテハ現行比例制限法ニ対シテモ同一ノ感想ヲ懷クモノナリ

(二) 紳士協約ヲ國際協約タルコトヲ認メ之アルカ為ニ本邦人ヲ移民法ノ適用ヨリ除外セサルヘカラサルモノトセハ同協約ハ日本ニ対シ不当ノ特典ヲ与フルモノニシテ又移民立法ニ関スル米国ノ主權ヲ制限スルモノナリトノ排日論者ノ議論ハ正当トナリ益々紳士協約廢棄論ヲ有力ナラシ

難ノ窮境ニ陥ルコトナキヲ保シ難シ

(国) 理論ハ免モ角トシ日本人ヲ比例制限法ノ適用ヨリ除外スルコトハ日本人ノ地位ヲ曖昧ニスルモノニシテ日本人ニ対シ斯ノ如キ特殊ノ地位ヲ与ヘタル原因又ハ其ノ結果等ニ付排日論者ハ勝手ノ理屈ヲ付ケ今後排日ノ一材料トナルヤモ計リ難キニ付此際多少ノ面倒ヲ忍ヒテ米国移民法ト日本人トノ関係ヲ明瞭ニ為シ置ク方得策ナルヤニ思考セラル

テ之ニ対シテモ其實際上ノ結果如何ヲ別トシ主義ノ問題

トシテ反対セサルヲ得ス帝國政府ハ比例制限ニ付テモ歐州諸國民ト同様ノ待遇ヲ受ケント欲スルモノナリ

リード移民法案ニ關スル問題提起ハ不可ナル

旨回電ノ件

第二六七号 至急

(四月十一日接受)

貴電第一五七号及第一五八号ニ関シ

タ有利ナルカ如クナルモ排日論者カ更ニ該法案ニ帰化無能力者排斥条項ヲ插入スルノ修正案ヲ提出スルコトアランカ同法ハ日本人ニ適用ナキヲ以テ之ニ抗議ヲ為サントスルモ帝國政府ノ立場著シク薄弱トナルヘシ而シテ斯ノ如キ修正案ノ成立シタル後ニ至リ國際協約タル紳士協約ノ改訂又ハ廢棄ヲ申込マレタル場合ハ帝國政府ハ進退両

# 一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一一四

一一一

至リタル処謀報者カ委員長「コルト」ニ就キ親シク聴取セ  
ル所ニ依ルモ上院ニ於ケル該修正案支持者相当多數アル見  
込ニテ同委員長モ委員会原案ノ運命ヲ危フミ始メタル趣ニ

テ上院ノ形勢モ決シテ樂觀ヲ許サス旁目下排日条項削除ト  
謂フ本来ノ大方針ノ下ニ何トカ目的達成ノ方法ヲ講シタク  
折角往電第二一八号ニ依ル國務省トノ打合セヲ急速進行セ  
シメ居ル次第ニテ今十日モ國務長官ニ面会懇談ノ末本使ヨ  
リ至急長文ノ公文（写郵送ス）ヲ長官ニ送ルコトニ内密協  
議ヲ遂ケタルカ長官モ決シテ樂觀シ居ラス能フ限り努力ヲ  
継続スヘシト謂ヒ居レリ右様ノ險惡ナル情勢ナルニ付貴電  
御來示ノ如キ新ナル併カモ極メテ「テクニカル」ノ議論ニ  
亘タル問題ハ其ノ當否ハ姑ラク之ヲ別トシ此際之ヲ提議ス  
ルトモ何等良果ヲ収ムヘキ見込絶無ナルノミナラス却テ當  
面ノ大目的タル排日条項阻止ノ運動ニ重大ノ支障ヲ生スル  
危險大ナリト存セラル右不取敢電報ス（四月十日午後四  
時）

一一四 四月十三日（着） 在米國埴原大使（ヨリ）  
松井外務大臣宛（電報）

## 紳士協約ノ要領及ビ其ノ実行状況ヲ説明セル對

約ノ要領ノ部分ハ為念別電第二七八号ヲ以テ郵送ス

一一五 四月十三日（着） 在米國埴原大使（ヨリ）  
松井外務大臣宛（電報）

## 上院ニ於テ曰米紳士協約ニ閣スル在米國埴原 大使國務長官間ノ往復文書全文発表ノ件

第二七九号

上院ハ四月十日移民法ニ閣シ審議スルトコロ無ク十一日開

会劈頭國務省ヨリ移民委員長「コルト」ニ宛転達セラレタ

ル紳士協約ニ閣スル本使國務長官間四月十日ノ往復文書全  
文「コルト」ノ求ニ依リ朗讀セラレタリ本使書翰ノ朗讀終  
ルヤ「シヨートリッヂ」直ニ發言シテコハ誠シヤカニシテ  
冗弁ナル書面ナリ余ハ改メテ正確ノ事実ヲ擧ケテ之ニ答フ  
ルトコロアルヘシト留保シツツ簡単ナル批評ヲ加ヘ「ハイ  
ラム・ジョンソン」モ又此 astonishing communication ！  
対シ國務長官ハ何ト答ヘタリヤト質問スルトコロアリ結果  
此書面ハ重要ナルモノナルニ依リ「シヨートリッヂ」等ノ

弁駁討論行ハルル以前ニ各議員ニ於テ充分研究シ置ク要ア  
リトノ「キング」ノ發議ニ依リ早速印刷配布セラルコト  
トナリ最後ニ「リード」ヨリ十一日ニハ本法案ノ票決ヲ完

米抗議覺書ヲ國務長官ニ送達、同覺書及ビ同  
長官ノ答翰公表方ニ閣スル件

第一七七号 至急

往電第二六七号ニ閲シ十日午後六時國務長官宛公文ヲ送達  
シタルカ國務省ニテハ直ニ之ニ對スル國務長官ノ答翰（書  
簡受領ノ旨並ニ書簡中記載ノ紳士協約ノ要領ハ國務長官ノ  
了解スル處ト一致ス貴信写シ及此ノ當館写シハ上下両院移  
民委員長ニ送付スヘキ旨ヲ記シアリ）ヲ當館ニ送致スルト  
共ニ前記彼我ノ往復文書写ヲ委員長ニ送付シタル趣ニテ十  
一日ニ至リ上院委員長ヨリハ右往復文書ヲ同日午後ノ議場  
ニテ披露スルコト下院委員長ヨリハ議事録ニ登載スルコト  
ヲ夫々承認方同省ニ求メ来リ同省ニテハ予メ当方トノ打合  
セニ依リ何レモ之ヲ承知スルト共ニ十一日正午出所ヲ明カ  
ニセサル様ノ注意ヲ付シテ往復文書写シヲ新聞社、通信社  
へ發表シタリ

尙前記本使ノ國務長官宛公文ハ紳士協約ノ要領ノ外数字ヲ  
擧ケテ該協約ノ有効ニ行ハレ居ル事ヲ説明シ更ニ大体一月  
十五日付同長官宛覚書（一月二十一日付機密第五号往信參  
照）後段ノ趣旨ヲ繰返シタルモノナルカ該公文中ノ紳士協  
へ發表シタリ

了セラレタシト發議シ当日ハ其儘他ノ問題ニ移レリ  
転電先往電第二七六号ノ通

一一六 四月十三日（着） 在米國埴原大使（ヨリ）  
松井外務大臣宛（電報）

## 日本移民排斥ニ対スル國務長官トノ往復文ニ 關スル新聞論調等報告ノ件

第二八五号

十二日新聞報

一、日米移民排斥条項ニ閣スル本使及國務長官トノ往復文  
移民法案排斥条項ニ付テハ今日迄議會討議ノ論評ノ種ト  
ナリ居ラサリシカ議會ニテ読上ヶラレタル結果一齊ニ諸  
新聞ノ甚大ナル注意ヲ惹キ何レモ右抗議文及「ヒューバー  
ズ」ノ回答全文乃至其主要部分ヲ掲載シ一樣ニ抗議中排  
斥条項ノ通過ヲ見ハ事態重大ノ結果ヲ惹起セントノ点並  
本件カ國家的名譽ノ問題タリトノ点紳士協約内容及其励  
行ノ実情ヲ具体的ニ述ヘタル点ヲ詳説シ抗議ハ外交上從  
來ニ無キ單刀直入 extraordinary frank 又ハ remark-  
ably candid ノモノナリト報シ居レリ其上院其他ニ於ケ  
ル結果ニ付テハ確実ナル報道ノ權威アラサルモ強キ印象

一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一一五 一一六

一一一

# 一、米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一一六

ヲ与ヘタリトハ諸新聞華府通信ノ一致スル報道ナリ殊ニ grave consequences 云々ニ付テ各新聞トモ之ヲ重大視シ「ベースト」系ノ新聞ハ一種ノ威脅ト解シ他ノ新聞ハ移民案最後ノ週間ニ於ケル警告 (warning) ナリト称シ居レリ

紐育「タイムズ」ハ更ニ本件文書ノ往復カ目下議会ニ於ケル法案ノ運命ニ如何ナル影響ヲ与フヘキヤヲ予測スルハ時期尚早ナルカ「ヒューズ」カ無難作ニ下院ノ既定案ヲ否認セル点ハ看過セラレサルベク上下両院ニ於テ必スヤ贊否ノ論戦ヲ見ント報シ Baltimore Sun へ此ノ抗議ニ依リ移民法案カ重大ナル外交問題トナリトナシ且抗議ノ辞令強硬ナルヲ報シ「パブリック・レッジヤー」通信ハ非常ニ率直ナル抗議ニシテ日米関係ヲ緊張セシムトナシ且從来外交上ノ溫和ナル辭令ニ慣レタル上院ハ日本大使ノ抗議ノ直截ナルニ驚ケリ尤モ下院首領ハ數週前「ヒューズ」カ書翰ヲ送レル時ト異ナラス今次ノ抗議ニ依リテモ何等「ディスター」セラレス「ジョンソン」ハ十二日排斥条項カ下院ヲ通過スヘキコトヲ確信シ居レリ報シ「ベースト」紙掲載ノ universal service ハ排

斥条項ハ大多數ヲ以テ下院ヲ通過スヘシト観測シ尚本件抗議ニ閑スル「ジョンソン」条項賛成論者ノ批評ヲ掲ケ上院議員「モセス」ハ嘗テ外交上斯ノ如キ辭令ヲ耳ニシタルコトナシト述ヘタリト伝ヘ又 Hiram Johnson ハ大体ノ書翰ハ仰天ノ文書ナリ云々ト声明シ「ショートリップ」モ同様右抗議ハ人ヲ驚カシムルモノナリト語レリト伝フ Pheland 又直ニ「ステートメント」ヲ發表シ米國ハ自己ノ主權ヲ他國ニ委ヌヘキモノニ非ス吾人ハ紳士協約ヲ廢棄シ自己自身ノ法律ニ依ラサルヘカラス而シテ他國ノ助力ヲ俟タス之ヲ施行スヘシ云々トテ上院法案ヲ攻撃シ日本大使ノ抗議ニ付テハ主義上妥協ノ余地ナキモノナリトナス

本件ニ關スル新聞論説ハ或ハ明日現ハルルヤモ知レサルカ唯今ノ所僅ニアルノミ

「パブリック・レッジヤー」ハ所謂重大ナル結果トハ外交的辭令上屢々戰爭ヲ意味セリ尤モ日本ハ今後当分戰争ヲナシ難カルヘキニ付其解説ハ之ヲ緩フスルヲ要ス然レトモ日本ノ國民的及人種的誇リヲ毀損スルカ如キ法律ハ軒テ現存ノ日米関係ヲ不満足ノモノトナシ為ニ日本政府

決定ヲ見タル旨發表サル

一一七 四月十四日 在米国埴原大使ヨリ  
書簡写

一 同右ヒューズ國務長官ヨリ埴原大使宛返簡写  
(五月八日接受)

公第三九二号  
大正十三年四月十四日  
在米  
特命全權大使 埼原 正直 (印)  
外務大臣男爵 松井 慶四郎殿

紳士協約ニ閑スル往復文書ニ閑スル件  
本使ト國務長官トノ間ニ往復シタル四月十日付書翰上院ニ於テ印刷配付ノ儀ニ閑シテハ往電第二七九号ヲ以テ及報告候處右印刷物二部茲ニ差進候間御查閱相成度此段申進候也  
(付屬書一)

三、軍艦改造問題、石油燃料採用ノ為ノ戦艦改造ハ海軍競争再開ノ結果ヲ招ク虞アリトノコト三十一日閣議ニ於テ

一、米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一一七

Japanese Embassy,

*Washington, April 10, 1924.*

Sir: In view of certain statements in the report of the House Committee on Immigration—"Report No. 350, March 24, 1924"—regarding the so-called "Gentlemen's Agreement," some of which appear to be misleading, I may be allowed to state to you the purpose and substance of that agreement as it is understood and performed by my Government, which understanding and practice are, I believe, in accord with those of your Government on this subject.

The Gentlemen's Agreement is an understanding with the United States Government by which the Japanese Government voluntarily undertook to adopt and enforce certain administrative measures designed to check the emigration to the United States of Japanese laborers. It is in no way intended as a restriction on the sovereign right of the United

confidently trust that the United States Government will recommend, if necessary, to the Congress to refrain from resorting to a measure that would seriously wound the proper susceptibilities of the Japanese nation.

One object of the Gentlemen's Agreement is, as is pointed out above, to stop the emigration to the United States of all Japanese laborers other than those excepted in the Agreement, which is embodied in a series of long and detailed correspondence between the two Governments, publication of which is not believed to serve any good purpose, but the essential terms and practice of which may be summed up as follows:

- (1) The Japanese Government will not issue passports good for the Continental United States to laborers, skilled or unskilled, except those previously domiciled in the United States, or parents, wives or children under twenty years of age of such persons.

States to regulate its immigration. This is shown by the fact that the existing Immigration Act of 1917, for instance, is applied to Japanese as to other aliens.

It was because of the fact that discriminatory immigration legislation on the part of the United States would naturally wound the national susceptibilities of the Japanese people that, after thorough but most friendly and frank discussions between the two Governments, the Gentlemen's Agreement was made for the purpose of relieving the United States from the possible unfortunate necessity of offending the natural pride of a friendly nation.

The Japanese Government have most scrupulously and faithfully carried out the terms of the agreement, as a self-imposed restriction, and are fully prepared to continue to do so, as officially announced at the time of the conclusion of the present Treaty of Commerce and Navigation between Japan and the United States. In return the Japanese Government

The form of the passport is so designed as to omit no safeguard against forgery, and its issuance is governed by various rules of detail in order to prevent fraud.

The Japanese Government accepted the definition of "laborer" as given in the United States Executive Order of April 8, 1907.

(2) Passports are to be issued by a limited number of specially authorized officials only, under close supervision of the Foreign Office, which has the supreme control of the matter and is equipped with the necessary staff for the administration of it. These officials shall make thorough investigation when application for passports is made by students, merchants, tourists, or the like, to ascertain whether the applicant is likely to become a laborer, and shall enforce the requirement that such person shall either be supplied with adequate means to insure the permanence of his status as such or that surely be

given therefor. In case of any doubt as to whether such applicant is or is not entitled to a passport, the matter shall be referred to the Foreign Office for decision.

Passports to laborers previously domiciled in the United States will be issued only upon production of certificate from Japanese Consular officers in the United States, and passports to the parents, wives, and children of such laborers will be issued only upon production of such consular certificate and of duly certified copy of official registry of members of such laborer's family in Japan. Utmost circumspection is exercised to guard against fraud.

(3) Issuance of passports to so-called "picture brides" has been stopped by the Japanese Government since March 1, 1920, although it had not been prohibited under the terms of the Gentlemen's Agreement.

(4) Monthly statistics covering incoming and

outgoing Japanese are exchanged between the American and Japanese Governments.

(5) Although the Gentlemen's Agreement is not applicable to the Hawaiian Islands, measures restricting issuance of passports for the Islands are being enforced in substantially the same manner as those for the Continental United States.

(6) The Japanese Government are further exercising strict control over emigration of Japanese laborers to foreign territories contiguous to the United States in order to prevent their surreptitious entry into the United States.

A more condensed substance of these terms is published in the Annual Report of the United States Commissioner-General of Immigration for 1908, 1909, and 1910, on pages 125-126, 121, and 124-125, respectively.

As I stated above, the Japanese Government have been most faithfully observing the Gentlemen's Agreement.

ment in every detail of its terms, which fact is, I believe, well-known to the United States Government. I may be permitted, in this connection, to call your attention to the official figures published in the Annual Reports of the United States Commissioner-General of Immigration, showing the increase or decrease of Japanese population in the Continental United States by immigration and emigration. According to these reports in the years 1908-1923 the total numbers of Japanese admitted to and departed from the Continental United States were respectively 120,317 and 111,636. In other words the excess of those admitted over those departed was in fifteen years only 8,681, that is to say, the annual average of 578. It is important to note that in these 8,681 are included not only those who are covered by the terms of the Gentlemen's Agreement, but all other classes of Japanese such as merchants, students, tourists, Government officials, etc. These figures

collected by the United States immigration authorities seem to me to show conclusively the successful operation of the Gentlemen's Agreement. Besides this there is, of course, the increase through birth of the Japanese population in the United States. This has nothing to do with either the Gentlemen's Agreement or the immigration laws.

I may add in this connection that if the proposition were whether it would not be desirable to amend or modify some of the terms of the Agreement, the question would be different, and I personally believe that my Government would not be unwilling to discuss the matter with your Government, if such were its wishes.

Further, if I may speak frankly, at the risk of repeating what, under instructions from my Government, I have represented to you on former occasions, the mere fact that a certain clause, obviously aimed against Japanese as a nation, is introduced

in the proposed immigration bill, in apparent disregard of the most sincere and friendly endeavors on the part of the Japanese Government to meet the needs and wishes of the American Government and people, is mortifying enough to the Government and people of Japan. They are, however, exercising the utmost forbearance at this moment, and in so doing they confidently rely upon the high sense of justice and fair play of the American Government and people, which, when properly approached, will readily understand why no such discriminatory provision as above referred to should be allowed to become a part of the law of the land.

It is needless to add that it is not the intention of the Japanese Government to question the sovereign right of any country to regulate immigration to its own territories. Nor is it their desire to send their nationals to the countries where they are not wanted. On the contrary the Japanese Government showed

basis of amicable international intercourse throughout the civilized world.

It is indeed impossible for my Government and people, and I believe it would be impossible also for your Government and for those of your people who had made a careful study of the subject, to understand why it should be necessary for your country to enact as the law of the land, such a clause as Section 12 (b) of the House Immigration Bill.

As is justly pointed out in your letter of February 8, 1924, to the Chairman of the House Committee on Immigration, it is idle to insist that the provision is not aimed at the Japanese, for the proposed measure (Section 25) continues in force your existing legislation regulating Chinese immigration and the barred-zone provisions of your immigration laws which prohibit immigration from certain other portions of Asia—to say nothing about the public statements of the sponsors and supporters of that par-

ticular provision as to its aim. In other words, the manifest object of the said Section 12 (b) is to single out Japanese as a nation, stigmatizing them as unworthy and undesirable in the eyes of the American people. And yet the actual result of that particular provision, if the proposed bill becomes the law as intended, would be to exclude only 146 Japanese per year. On the other hand, the Gentlemen's Agreement is, in fact, accomplishing all that can be accomplished by the proposed Japanese exclusion clause except for those 146. It is indeed difficult to believe that it can be the intention of the people of your great country, who always stand for high principles of justice and fair play in the intercourse of nations, to resort—in order to secure the annual exclusion of 146 Japanese—to a measure which would not only seriously offend the just pride of a friendly nation, that has been always earnest and diligent in its efforts to preserve the friendship of your people, but

# 一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一一四

would also seem to involve the question of the good faith and therefore of the honor of their Government, or at least of its executive branch.

Relying upon the confidence you have been good enough to show me at all times, I have stated or rather repeated all this to you very candidly and in a most friendly spirit, for I realize, as I believe you do, the grave consequences which the enactment of the measure retaining that particular provision would inevitably bring upon the otherwise happy and mutually advantageous relations between our two countries.

Accept, Sir, the renewed assurances of my highest consideration.

(Signed) M. Hanihara

Hon. Charles E. Hughes,  
*Secretary of State.*

(右和訳文) 仮訳文ナラ

大正十三年四月十六日

外務省

大正十三年四月十日在米埴原大使カラ米国國務卿ヘ宛テ  
タ移民問題ニ関スル公文ノ訳文ハ左ノ通リテアル  
千九百二十四年三月二十四日下院移民委員会第三百五十号  
報告中ニハ所謂紳士協約ニ關シ誤解ヲ招キ易キ事項ノ記載  
アルヲ以テ本使ハ日本政府カ了解シ履行シ居レル該協約ノ  
目的及要領ヲ陳述セムト欲ス而シテ右ハ米国政府ノ了解ト  
一致スルモノナルヲ信ス

抑モ紳士協約ハ日本労働者ノ米国ニ移住スルヲ防止スル為  
日本政府カ自ラ進ンテ一定ノ行政手段ヲ採用実行スルコト  
ニ関スル日米両国政府間ノ了解ナリ右ハ決シテ移民取締ニ  
關スル米国ノ主權ヲ拘束スルモノニアラスコレ千九百十七  
年制定ノ現行移民法規カ他外国人同様日本人ニモ適用セラ  
ルル事實ニ徵スルモ明白ナリ

米国ニ於テ差別的移民法ヲ制定スルトキハ自然日本国民ノ  
国民的感情ヲ損傷スル虞アルヲ以テ両国政府間ニ於テ最モ  
友好的ニ且胸襟ヲ披キテ討議シタル結果紳士協約ノ案出ヲ  
見タル次第ニテ右ハ不幸ニシテ友邦ノ国民的自尊心ヲ傷ク  
ルノ虞アル場合ヲ防止スルヲ目的トスルモノナリ

日本政府ハ自ラ設ケタル制限トシテ同協約ノ条項ヲ最モ厳

密且忠実ニ實行シ來リ現行日米通商航海條約締結ノ際公表  
シタル如ク今後モ引続キ右協約ヲ實行スルノ用意ヲ有スル  
モノナリ而シテ日本政府ハ若シ米国議會ニ於テ日本國民ノ  
感情ヲ多大ニ損傷スルカ如キ法案ヲ制定セムトスル場合米  
國政府ハ必要ニ応シ之カ阻止方ヲ議會ニ勧告スルモノト確  
信ス

紳士協約ノ目的ハ上述ノ如ク同協約中ニ除外例ヲ設ケタ  
ルモノノ除キ總テノ日本労働者ノ米国入國ヲ阻止セムトス  
ルモノナリ該協約ハ両国政府間ニ屢々交換セラレタル長文  
且詳細ナル文書ニシテ一々之ヲ公表スルハ何等裨益スル所  
ナシト信ス然レトモ其ノ主要ナル条項及實行狀況ヲ概括ス  
レハ左ノ如シ

一、日本政府ハ熟練及不熟練労働者ニ對シ合衆国大陸ニ通  
用スベキ旅券ヲ發給セサルヘシ、但シ以前ニ合衆国ニ定  
住セル者又ハ此等ノ者ノ両親、妻、若ハ二十歳以下ノ子  
供ハ此ノ限ニアラス、旅券ノ形式ハ偽造ヲ防止スルヤウ  
工夫セラレ其ノ發給ハ詐偽ヲ防遏セムカ為ニ各種ノ探査  
規則ニ基キ之ヲ行フ、日本政府ハ千九百七年四月八日ノ  
合衆國行政命令ニ示サレタル労働者ノ定義ヲ是認セリ

二、旅券ハ外務省ノ監督ノ下ニ特ニ権限アル官吏ニ依リテ  
ノミ發給セラルヘシ外務省ハ本件ニ關スル最高ノ監督權  
ヲ有シ右行政事務ヲ處理スル為ニ必要ナル職員ヲ有ス、  
此等職員ハ學生、商人、旅行者、其ノ他ノ者カ旅券下付  
ヲ申請セシ場合右申請者カ労働者トナル虞アリヤ否ヤニ  
関シ十分ナル調査ヲ遂ケ且申請者ハ現在ノ身分ヲ維持ス  
ルニ必要ナル資力又ハ其ノ保証ヲ有スルコトヲ要ス

申請者カ旅券ノ發給ヲ受クル資格アリヤ否ヤニ付キ疑ア  
ル場合ニハ當該事件ハ其ノ決定ヲ得ル為ニ外務省ニ照会  
セラルヘシ、合衆国ニ定住シタルコトアル労働者ニ対ス  
ル旅券ハ合衆国ニ於ケル日本領事官ノ證明書ノ提出アル  
場合始メテ發給セラレ當該労働者ノ両親妻子ニ対スル旅  
券ハ日本領事官ノ證明書ノ提出及日本ニ於ケル労働者ノ  
家族ノ戸籍謄本ノ提出アリテ始メテ發給セラルヘシ、日  
本政府ハ詐偽ヲ防遏スル為ニ慎重ナル最善ノ手段ヲ講ス  
三、所謂写眞花嫁ニ対スル旅券ノ發給ハ紳士協約ノ条項ニ  
依リ禁止セラレ居ラスト雖モ日本政府ハ千九百二十年三  
月一日以来之ヲ停止セリ

四、日米両国政府ハ米国ニ入國シ及米国ヨリ出国スル日本

# 一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一一七

一四四

人ニ閑スル月別統計表ヲ交換ス

五、紳士協約ハ「ハワイ」諸島ニハ適用ナシト雖モ該諸島ニ対スル旅券ノ發給ヲ制限スルノ方策ハ合衆國大陸ニ対スルト実質上同様ニ強行セラレツツアリ

六、日本政府ハ日本労働者カ合衆國ニ密入国スルヲ防遏スル為ニ合衆國ニ隣接セル外國領土ニ赴カムトスル此等労働者ノ監督ヲ一層厳密ナラシメツツアリ

此等ノ箇条ヲ一層要約シタルモノハ千九百八年、千九百九年及千九百十年ニ於ケル米國移民長官ノ年報中第一二五、

六頁、第一二一頁及第一二四、五頁ニ發表セラレ居レリ

上述ノ如ク日本政府カ最モ忠実ニ紳士協約ヲ厳守シ来レルハ米國政府ノ熟知スル所ト信ス本使ハ之ニ関連シ米國移民長官ノ年報中ニ發表セラレタル日本人ノ出入国ニ依ル米本国ニ於ケル日本人人口増減ノ数字ニ就キ貴官ノ注意ヲ喚起セムト欲ス右報告ニ依レハ（年報中ノB表参照）千九百八年ヨリ千九百二十三年ニ亘リテ米本国ニ入国ヲ許可セラレタル日本人總數ハ十二万三百十七名同國ヨリ出国シタル日本本人總數ハ十一万三千六百三十六名ナリ換言スレハ出国シタル者ニ比シ入国許可ヲ受ケタル者ノ增加ハ十五年間ニ僅ニ

八千六百八十一一名即チ一年平均五百七十八名ナリ茲ニ重要ナル点トシテ指摘スヘキハ此ノ八千六百八十一名中ニハ啻ニ紳士協約ノ条項ニ網羅セラレ居ル者ノミナラズ商人、学生、旅行者、官吏等ノ如キ他ノスヘテノ種類ノ者ヲモ包含スルノ事實是レナリ米國移民當局ノ調製セル右數字ハ紳士協約ノ遺憾ナク施行セラレ居ルノ事實ヲ明確ニ表示スルモノナリ尚此ノ外ニ米國內ニ於ケル出生ニ基ク日本人口ノ增加アルモ右ハ紳士協約若ハ移民法ニ更ニ關係ナキモノナリ

茲ニ付言セントスルハ若シ提案カ紳士協約中ノ或ル箇条ヲ改修スルヲ可トスルヤ否ヤノ問題ナリトセハ是レ自ラ別問題ナリ而シテ米國政府カ本件ヲ討議スルノ希望アルニ於テハ日本政府ハ之ヲ辭セルモノナルコト本使ノ窃カニ信スル所ナリ

更ニ予ハ若シ日本政府ノ訓令ニ基キ曩ニ貴官ニ表明シタルコトヲ敢テ反覆シ之ヲ率直ニ述フレハ米國政府及國民ノ希求ニ副ハムカ為日本政府ノ執リタル最モ慎重ニシテ友好的ノ努力ヲ明ニ無視シ移民法案中ニ日本人ノミヲ目的トスル条項ヲ挿入セルノ事實ハ日本政府及國民ノ感情ヲ激セシム

千九百二十四年二月八日付下院移民委員會長宛貴翰中ニ指

摘要セラレタル如ク右条項カ日本人ヲ対象トスルモノニアラ

ストノ主張ハ当ラス即チ本条項ノ目的ニ關スル主唱者及支

持者ノ公表文ハ云フニ及ハス、本条項（第二十五条）カ支那

移民ニ對スル現行法規及支那移民ニ對スル現行法規及支那

以外一定地域ノ亞細亞ヨリ來ル移民ノ入國ヲ禁止スル移民法規中ノ排斥区域規定ヲ引続キ有効ナリトナシ居ルノ事實ニ徵シ明白ナリ換言スレハ第十二条b項ノ目的ハ明ニ特ニ日本國民ヲ目シテ米國國民ヨリ見テ価値ナク且好マシカラ

日本國民ナリトノ汚名ヲ印スルモノナリ而モ之カ法律トナ

リタルノ曉ニ於ケル實際ノ結果タルヤ唯僅ニ一年百四十六

名ノ日本人入國ヲ許ス以外ノ点ニ於テハ排日条項ニ依

リ達セラルヘキ所有目的ヲ達成シ居ルモノナリ一年百四十

ルニ足ルモノナリ、然レトモ日本政府及國民ハ此ノ際極度ニ忍耐シ以テ適當ナル交渉ヲ試ムルトキハ米國政府及國民ハ前述ノ如キ差別的規定ヲ採用スヘカラサル理由ヲ容易ニ了解スヘキヲ惟ヒ米國政府及國民ノ公明正大ナル態度ニ信頼シツツアリ日本政府ハ凡ソ外國移民取締ニ關シ有スル他國ノ主權ニ對シ云為セントスル意志ナキヤ云フマテモナシ又日本人ヲ歓迎セサル國々ニ移民ヲ送ル意思ナキヤ勿論ナリ却テ日本政府ハ本問題ノ当初ヨリ米國ノ希望セサル日本人ノ入國ヲ有効ニ阻止セムカ為ニハ貴國政府ト協力シテ所有名譽アル手段ヲ講スル意志ヲ表示シ十分之力確証ヲ与ヘタリ而シテ此ノ事タル米國政府ノ熟知スル所ナリ本問題ハ日本ニ取り便宜ノ問題ニアラス主義ノ問題ナリ國民感情ノ問題ヲ惹起セサル限り単ニ数百名数千名ノ日本人カ他國ノ領域ニ入國ヲ許サルルヤ否ヤノ事實ハ何等重要ナル問題ニアラス重要ナル問題ハ日本カ一國トシテ他國ヨリ正当ノ尊敬及考慮ヲ受ケル資格アリヤ否ヤノ點ニアリ換言スレハ日本政府カ米國政府ニ対シテ要求スルモノハ畢竟文明諸國ヲ通シテ友誼的國交ノ根抵トシテ一國民カ普通他國民ノ自尊心ニ対シテ与フル所ノ正当ナル考慮ナリ

# 一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一一七

一四六

六名ノ日本人ヲ排斥セムカ為ニ從來國際關係ニ於ケル正義ト公正ノ高尚ナル主義ニ立脚シ來リタル貴國民カ其ノ友情維持ニ從來熱心ト貽勉トヲ以テ努力シ來リシ友邦國民ノ自尊心ヲ著シク傷クルノミナラス米國民ニ對スル信賴ニ疑ヲ挾マシメ惹イテハ米國政府少クトモ其ノ行政部ノ名譽ヲ毀損スルカ如キ手段ニ訴フルノ意思ヲ有セムトヘ信シ難キ所ナリ貴官カ予ニ從來示サレタル信義ニ頼リ本使ハ茲ニ最モ率直且友誼的精神ヲ以テ以上ヲ反覆陳述シタル次第ナリ若シ此ノ特殊条項ヲ含ム法案ニシテ成立ヲ見ムカ両國間ノ幸福ニシテ相互ニ有利ナル関係ニ対シ重大ナル結果ヲ誘致スベキハ本使ノ感知セサルヲ得サル所ニシテ貴官亦同感ナルヲ信スルモノナリ

## (付屬書II)

四月十日セラーズ國務長官ヨリ埴原大使宛返簡写

Excellency: I have the honor to acknowledge the receipt of the note of April 10, in which, referring to the recent report of the Committee on Immigration and Naturalization of the House of Representa-

taking occasion to communicate copies of it, as also of my present reply, to the chairmen of the appropriate committees of the two Houses of Congress.

Accept, Excellency, the renewed assurance of my highest consideration.

Charles E. Hughes

~~~~~

在日本埴原大使ヨリ  
松井外務大臣宛(電報)

排日條項ト院通過等ヲ報ズル新聞報道報告

件

第一八九節

十三日新聞報

諸新聞ハ何ノモ排日條項カ何等ノ論議ナク單ニ「オハイオ」選出共和党ノ「ペーネー」ノ簡単ナル「リマーク」アリタルノハ十一日ト院ヲ通過シタルコトヲ報シ國務省側ノ反対日本大使ノ抗議モ遂ニ大勢ヲ阻止シ難カリシト評

tives (Report No. 350, March 24, 1924), you took occasion to state your Government's understanding of the purport of the so-called "Gentlemen's Agreement," and your Government's practice and purposes with respect to emigration from Japan to this country.

I am happy to take note of your statement concerning the substance of the so-called "Gentlemen's Agreement" resulting from the correspondence which took place between our two Governments in 1907-8, as modified by the additional undertaking of the Japanese Government with regard to the so-called "picture brides," which became effective four years ago. Your statement of the essential points constituting the Gentlemen's Agreement corresponds with my own understanding of that arrangement. Inasmuch as your note is directed toward clearing away any possible misapprehension as to the nature and purpose of the Gentlemen's Agreement, I am

シ居リ華盛頓「ホーム」ハ政府当局者ノ談レシト排日立法ノ結果重大ナル國際間ノ紛議生スベシ上院ニ於ケル「ハムームラッヂ」修正案モ成立ノ模様アルヤ日本ノ抗議ハ上院ハ形勢ヲ多少緩和スル効果トリトシト日本政府ハ此ノ排日立法ヲ侮辱ト認メ日米友好關係ノ繼續ヲ不可能ナシムト日本國民ハ人種ニ対スル屈辱トシテ其自負心ヲ害セラルベクヨ所謂紳士協約ハ廢棄セハシタルヤノト看做サルベシト説明ヲ加ク New York Herald Tribune ハ下院案カ大多數ニト通過シタル事実及上院ノ修正案ニ付テモ不利ノ形勢アル為國務省ハ憂慮シ居ソリト為シ行政部内ノ意見ニテヘ紳士協約ノ繼續ハ排日立法ニ依ル日本移民ノ取締ヨリモ有效ナルニ排日條項ニ依リテ友邦ノ感情ヲ害シ國境ヨリノ密入国防止ノ途ナキリ至ルハ下院トシテ愚ナルコトヲ為シタルヨ報シ居ソリバ Public Ledger ハ若シ上院ニ於ケル排日立法ヲ阻止シ得ストセハ大統領ハ移民法ヲ「ディート」シ排日條項ノ削除ヲ議会ニ求ムルニ躊躇セサルベシト報シ居ルモ他新聞ニハ未タ「ディート」ハ々ノトヲ掲ケ居テス尚新聞中論説ヲ掲ケタルヤハ Public Ledger アルノハナルカ同紙ハ何故ニ日本ヲ侮辱スルヤト題シ排日條項ハ

## 一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一一九

一四八

日本国民ニ重大ナル侮辱ヲ与フルモノニシテ日米友好關係ヲ危殆ナラシムトナシ日本國民ノ感情ハ大使ノ書翰ニ明示セラレタリ米国西部ノ排日者流ハ米國ノ national good faith 及 honour ヲ思ハス其行動力如何ニ國際關係ニ影響スルカヲ解セサルモノナリ排日条項ニ賛成スル議員ハ國際間ニ米国政府ヲ代表スル行政部ノ責任如何ヲ知ラサルモノナリ実ニ排日条項ノ削除ハ議會ノ義務ナラスヤ云々ト力説シ居レリ

一一九 四月十五日(着) 在米國埴原大使ヨリ  
松井外務大臣宛(電報)

### 新移民制限法案ニ対スル大統領ノ否認問題二

#### 関シ所見開陳ノ件

第二九七号 至急極秘

四月十四日午後三時半國務長官ニ面会自分ハ長官カ排日条項阻止ノ為最善ノ努力ヲナシツツアルコトヲ善ク承知シ居リ深ク之ヲ多トルト共ニ専ラ其ノ成功ヲ祈リツツアルモノナルガ不幸ニシテ下院ハ非常ノ大多数ニテ通過シ上院ノ形勢モ益々非ナラントスル情報ニ接シ深憂措ク能ハザル次第ナルガ長官ノ見込如何ト尋ネタルニ頗ル憂慮ノ面持ニテ

遺憾ナガラ形勢切迫セリト云フ外差当リ何等ノ見込モ付ケ難シトノコトニ付本使ハ万ニモ上院ニテモ排日条項ヲ通過スル如キコトアラバ実ニ容易ナラヌ不幸ノ事態ヲ日米關係上ニ生ズ可キハ長官ニ於テ熟知セラル通ナルニ付此上共阻止方配慮ヲ希望セザルヲ得ズト述ベタルニ長官ハ自分モ其ノ点ヲ深ク顧念スルガ故ニ与フ限リノ努力ヲナシツツアル次第ナルモ其ノ成否ニ閑スル見込ハ何共付ケ難シト前言ヲ繰返シタルニ付本使ハ(貴電第一六五号極秘御電訓ハ右会見前既ニ接到シ居リタルモ)右ノ事実ニハ全然言及スルコトナク自分ノ私カニ憂フル処ヲ非公式ニ腹藏ナク開陳スルノ自由ヲ得タシトノ前置ニテ自分ハ長官ノ努力ニ拘ラズ万ニモ排日条項通過スル如キコトアラバ日本政府ハ大統領ノ否認方考慮ヲ求ム可ク本使ニ訓令スルコトヲ余儀ナクセラル可キヲ憂慮スルモノナルガ斯ノ如キコトモナラバ事態ハ益々重大ノ度ヲ増スベキニ付何トカスカル必要ノ生ゼザルコトヲ祈リテ已マザル旨ヲ述ベテ長官ノ挨拶ヲ促ガシタルモ長官ハ黙シテ答ヘザリキ依テ本使ハ何レノ途長官努力ノ成效ヲ重ネ重ネ希望スル旨ヲ述べ長官ヨリモ同様ナリトノ挨拶アリテ一先ヅ辞去シ帰館シタルガ其ノ後ノ報

道ハ別電第二九六号ノ通り上院ノ形勢刻々悪化ヲ伝フルノミ遺憾ナガラ排日条項阻止ハ最早絶望ト觀測スル外ナシ果シテ然リトセバ前記往電第一六五号ノ御電訓ニ付最モ慎重ノ考慮ヲ要スル儀ト思考スル處卑見ニ依レバ若シ大統領ニ於テ否認ノ決意アラバ我政府ノ申入ヲ俟タズトモ否認スベク然ルニ若シ我政府ヨリ早マリテ申入ヲナス時ハ為ニ却テ反対ノ結果ヲ余儀ナクスルノ危険鮮カラズ又若シ大統領ニ否認ノ決意ナクハ如何ニ我政府ヨリ申入レタリトテ之ニ応ズル見込ハ先ヅ皆無ナル可シト觀測スルガ正当ナル可ク果シテ然リトセバ聊ニテモ要求ケマシク誤解セラルル虞アル我政府ノ申入ハ徒ラニ險惡ノ事態ヲ更ニ險惡ナラシムル重大ノ危險ナキヤ憂慮ニ堪エズ本使ハ該案ニシテ愈々両院通過ノ曉ハ不取敢右ニ對スル日本政府ノ失望ト不満足ノ意味ヲ簡明ニ表明スルト共ニ何レ本件ニ付テハ追テ何分ノ「レプレゼンテーション」ヲナスノ権利ヲ保留スル旨適當ノ言

辞ヲ以テ米国政府ニ申入レ置キ徐々ニ善後策ヲ講ズルヲ第一策トシ若シ万一已ムヲ得ズ大統領ニ於テ否認方申入ルルトシテハ最モ友好ノ精神ニ基ク単純ナル我政府ノ希望トシテ極秘ニ且懇談的ニ之ヲ簡明スル程度ニ止ムルヲ第二策ト

## 一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一一〇

一五〇

ヲ以テ律スベカラザルモノ多ク局外ノ米人中ニハ議会特ニ上院昨今ノ混戦ヲ目シテ狂人ノ沙汰ナリト評シ居ルモノスラ鮮カラザル情勢ナルコト等ヲ綜合シテ考フルトキハ如何ニ勇断果決ノ令名アル現大統領ト雖果シテ好ク上下両院ノ大多数ヲ以テ通過シ而モ唯一ノ帰化不能外人排斥ノ条項ヲ除キテハ大体ニ於テ全国民大多数ガ緊急ノ必要アリトシテ要望セル移民法案ヲ否認シ得ベキヤ否ヤ頗ル覺束ナク感ゼザルヲ得ズ若シ斯カル事態

ヲ篤ト考量スルコトナク強イテ難キヲ大統領ニ求ムルガ如キハ最モ冷静慎重ノ考量ヲ要スベキト存ス以上ハ事態ノ実ニ重大ナルヲ痛感スルガ故ニ僭越ノ儀ヲ顧ミルニ暇ナク御参考迄腹蔵ナク所見ヲ開陳シタル次第二付辞令ノ足ラザルハ御寛容ノ上篤ト御考慮ヲ加ヘラレ大至急時期極メテ切迫ノ際ニ付為念右稟請致置ク次第ナリ

何分ノ御電訓ヲ仰ギ度ク若シ万一御電訓間ニ合ハザル場合前記貴電第一六五号末段ノ御訓令執行方ニ付テハ前陳ノ趣旨ニ依リ四困ノ情勢ヲ考慮シ本使ノ裁量ニ依リ最善ト認ムル程度及方法ニ於テ取計フベキニ付予メ御承認有度ク議案兩院通過ノ上ハ裁可ヲ得ル為直ニ大統領ニ移牒セラルベク

ミルニ暇ナク所見ヲ開陳シタル次第二付辞令ノ足ラザルハ御寛容ノ上篤ト御考慮ヲ加ヘラレ大至急時期極メテ切迫ノ際ニ付為念右稟請致置ク次第ナリ

尚本件ニ付テハ本使ハ隨時報告ノ通始終國務長官ト隔意無キ協調ヲ保チ微力ノ最善ヲ尽シタルモ不幸ニシテスル成行トナリタルニ付テハ深ク恐縮且遺憾ノ意ヲ表スルモノナリ將又本件今後ノ發展如何ニ依リテハ急遽本使ニ帰朝御命令ノ必要生スベク又御命令無クトモ本使ヨリ帰朝御発令方御願致スノ余儀無キ次第モ生ズベク斯カル場合ニ處スル人練リ等ニ付テモ万一ノ困難不都合ヲ生ゼザル様予メ必要ノ御手配ヲ仰ギ置度シ

一一〇 四月十六日(着) 在米國埴原大使ヨリ  
松井外務大臣宛(電報)

上院ニ於ケル排日討議ノ形勢急転ニ付キ極東  
部長ト懇談及ビ大統領ノ法案拒否ノ可能性ニ

### 関スル件

第三〇〇号 至急極秘

四月十五日國務長官ニ會見セントシタルモ朝ノ閣議ヲ了ヘ次第紐育共和党大会司宰ノ為メ出發十六日帰華スヘシトノコトニテ会談ノ機會ヲ得ス極東部長ニ面会シ全然個人間ノ懇談ナル諒解ニテ十四日ノ上院ニ於ケル排斥条項討議ノ成行ニ付キ交談シタルニ同官ハ上院ノ形勢力昨日ニ至リ右ノ

如ク急劇ニ悪化シタル理由ハ了解ニ苦シム特ニ「ロッジ」「リード」ノ如キ人々カ先頭トナリ本使ノ書翰ヲ以テ veiled threat ヲ含ムモノナリ等ト解スルニ至リテハ沙汰ノ限りナリ國務長官モ同様ニ感シ居ルハ本件ニ關シ「ウーズ」大使ニ発送シタル電信ニテモ察セラル尚國務省側トシテハ全然本使立場ニ同情シ居レリト謂ヒ其他ハ多ク語ラズ又十

五日ノ上院形勢急転ニ闕シテハ何等上院「レ」党領袖間ニ於ケル内政上ノ考慮力原因ナルヘシトノ意味ヲ仄メカシタルモ深ク語ラズ又本使ガ二、三ノ通信員ヨリ内聞シタル所ヲ綜合スレバ上院「レ」党領袖ハ加州側代表運動ノ猛烈ナルヲ見テ十四日朝「コーカス」ニ於テ本件ニ對スル政府側トシテ態度ヲ確保セントシタルモ太平洋岸議員ノ同意ヲ得ス「ショートリップ」修正案否決ノ見込ミハ絶無ナルニ至リ而カモ議場ニ於テ「レ」党議員ノ多數ガ該修正案ニ反対アリ去リトテ相当民衆ニ訴フル理由ナシニ賛成投票ヲ為セハ東部諸州ノ投票ヲ減スル虞アル而已ナラス夫レ迄ハ大体好感ヲ以テ迎ヘラレタル本使ノ書翰ニ付キ「ジョンソン」等カ極力攻撃シツツアルヲ利用シ辟ヲ右書翰ニ藉リ逮ニ態

度ヲ一変シタルモノニシテ政争上彼等ノ濫用ヲ憚カラサル手段ノ一例ニ外ナラスト謂フニ在リ其果シテ幾何迄真実ナルヤハ知ラサルモ十四日ノ議場ニ於テ「アラバマ」州選出「デ」党議員「ヘフリン」(余リ評判好カラサル人物)カ略々同様ノコトヲ述ヘテ「レ」党ヲ攻撃シ居ルニ微スルハ根拠ナキ情報トハ看做シ難シ

本使ハ目下ノ形勢ニ鑑ミ新聞紙上等ニハ全然沈黙ヲ守リ居ルモ昨日ノ上院ニ於ケル議事ノ經過ニ付テハ十六日國務長官ト懇談ノ上右書翰ノ趣旨ニ付何等公表スヘキヤ否ヤヲ決定スル積リナリ尚此際我國民ニ於テ冷静ニシテ威厳アル態度ヲ示サルルコトハ素ヨリ最願ハシキ儀ナルモ我言論界其他各方面ニ於テ米國議会ノ本件ニ對スル態度ヲ不可ナリトスル堂々タル議論ハ在本邦外國通信員ニ依リ此際成ルヘク迅速正確ニ当地諸新聞ニ伝ヘラル様御配慮ヲ希望ス此際若シ本問題ニ對スル我カ國論カ一致シ居ラサルカ如キ感想ヲ當国民ニ与フルハ我方本来ノ正当ナル立場ニ對シ永遠ノ不利ヲ來スコトナキヤ恐怖但煽動又ハ排米的言論ノ此際最謹ムヘキハ申ス迄モナシ為念

# 一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一一一 一一一

一五二

民法ニ対シ大統領カvetoスルヤ否ヤニ付キ両様ノ観察アルト同時ニ仮リ「vetoアリタリトシ之ニ対スル議会ノ態度ニ付キテモ議会カ直ニ三分ノニ二以上ノ多數ニテveto「overrideスベシト云フモノト一度vetoセラレタル以上overrideハ困難ナル事情アリト云フニ様ノ観測行ハレ居レリ

右ハ何等重キヲ置ク情報ニアラサルモ御参考申添フ

一一一 四月十八日 松井外務大臣ヨリ  
在米國埴原大使宛（電報）

**grave consequences**ニ対スル弁明考慮方電  
訓ノ件

第一七六号 極秘

三月十日付國務長官宛貴官書面末段ニ所謂「グレーブ・コンセクエンス」ノ意義ニ關シ物議ヲ起シタルモノノ如キ處右ハ決シテ戦争又ハ脅迫ヲ意味スルモノニアラス排日立法ハ帝国ノ面目ヲ疎謞スルモノニシテ日本国民ノ脳裏ニ永久拭フ可カラサル怨嗟ノ印象ヲ与ヘ其結果本邦政府カ多年苦辛ニ苦辛ヲ重ネ日米間親善關係維持ノ為メ努力シ来レル効果ヲ水泡ニ帰セシメ又昨年大震災ニ際シ両国々民間ニ期セスシテ湧キ出テタル友情ヲ冷却セシメ今後両国民間ノ完

。

全ナル協調ト友情トヲ阻害スベク此ノ如キハ世界人類ノ融和ヲ理想トシ日米親善關係ニ重キヲ置ク帝国政府ニ取ツテハ誠ニ重大ナル結果ナリト信スル意味ニ於テ前記文句ヲ使用セラレタルモノト思考セラルルニ付若シ貴官ニ於テモ同意ナルニ於テハ國務卿トモ懇談ノ上右發表方テ断行セシムル上ニモ又拒否權実行ノ場合上院議員ノ態度ヲ變セシムル上ニモ都合ヨキカト思考セラルルニ付若シ貴官ニ於テモ同意ナルニ於テハ國務卿トモ懇談ノ上右發表方テ然ル可ク措置セラレタシ右ハ已ニ御考量中ノコトト存スルモ為念申進ス

一一一 四月十九日（着） 在米國埴原大使ヨリ  
松井外務大臣宛（電報）

**grave consequences**解釈問題ニ關シヒューブ  
別電一 在米國埴原大使發松井外務大臣宛四月十九日  
着電報第三一二三号

四月十日付抗議覺書ノ用語ニ關スル四月十七日付ヒューブ宛埴原書翰

二 四月十九日着右同電報第三一四号

四月十八日付ヒューブヨリ埴原宛答翰  
第三一二号 至急極秘

往電第三〇〇号中段ニ關シ十五日極東部長ト会見ノ際國務長官帰華次第至急面会方申入レ尚右ハ十四日ノ上院ニ於ケル本使書翰ニ対スル討論ノ經緯ニ徵シ本使一己ノ感情問題ハ全然別トシ帝国代表者トシテ之ヲ不問ニ付シ置クトキハ不幸ナル誤解ヲ永ク将来ニ貽スノ憂ナキヤヲ虞ルルニ付或上院議員等ノ下セルカ如キ解釈ハ本使ノ意思ト全然相違スルモノナルコトヲ最有効ナルト同時ニ議会方面ニ於ケル心理作用ノ甚シク常軌ヲ逸シツツアル此際何等無用ノ刺激ヲ与フルコトナキ最安全ナル方法ニ於テ表明スルノ途ナキヤニ付長官ト腹蔵ナキ内密ノ懇談ヲ遂ケタキカ為ナリト付言シ置キタルニ長官ハ十六日午後帰華後極東部長ヲ内密本使ノ許ニ遣ハシ前記本使ノ考慮シ居ル点ハ長官モ同様考慮致居ル處ニテ特ニ名案ハナキモ若シ本使ニ於テ何等申訳ケ間敷キ口調ハ注意シテ（脱）アルト同時ニ友好的言ヲ以テ大要右上院議員ノ解釈ハ全然本使ノ意思ト相違スルノミナラス問題ノgrave consequencesナル辞句ヲ含ム一節ヲ通読スルトキハ如何ニシテ斯ル解釈ヲ下シ得ルヤ全然了解ニ苦

東部長ヲシテ別電第三一四号ノ通ナル書面（四月十八日付）

一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一一一

一五三

テ持參セシメタリ右往復文ハ口頭朝手リ掲載ヤハムル田の  
ニテ十九日午後四時國務省ヨリ新聞記者ニ交付シ上レハ既述  
ノ移民委員長ニハ十九日ノ午後中適當ノ時ヨ見計リヒテ其ノ上  
ミリ送付スル予定ナリ右發表迄ハ申辯セナク秘密ニシヤハ  
レタク愈發表確定ノ上ハ其ノ直至急電報スクキリ其ノ上  
ニテ貴方ニテモ速ニ御發表アリタシ由本件ニ關スル前記本  
使ニ國務長官ト私的懇談ノ事実ハ如何ナル場合ニ於テモ極  
秘リ付セラル様致シタシ急令

## (別 電)

在米国埴原大使案松井外務大臣宛四月十九日着電報案1111  
四月十七日付ニ一ツ國務長官宛埴原大使書翰

Japanese Embassy,

Washington, April 17, 1924.

My dear Secretary,

In reading the Congressional record of April 14, 1924, I find that the letter I addressed to you on April 10, a copy of which you sent to the Chairman of the Senate Committee on Immigration, was made a subject of discussion in the Senate.

In the record it is reported that some of the

how the two words, read in their context, could be construed as meaning anything like a threat. I

simply tried to emphasize the most unfortunate and deplorable effect upon our traditional friendship which might result from the adoption of a particular clause in the proposed measure. It would seriously impair the good and mutually helpful relationship and disturb the spirit of mutual regard and confidence, which characterizes our intercourse of the last three quarters of a century and which was considerably strengthened by the Washington Conference as well as by the most magnanimous sympathy shown by your people in the recent calamity in my country.

Whereas there is otherwise every promise of hearty co-operation between Japan and the United States of America, which is believed to be essential to the welfare not only of themselves, but of the rest of the world, it would create, or at least tend to create, an unhappy atmosphere of illfeeling and misgiving

over the relations between our two countries.

As the Representative of my country, whose supreme duty is to maintain and if possible to draw still closer the bond of friendship so happily existing between our two peoples, I honestly believe such effects, as I have described, to be "grave consequences." In using these words, which I did quite ingenuously, I had no thought of being in any way disagreeable or discourteous, and still less of conveying "a veiled threat." On the contrary, it was in a spirit of the most sincere respect, confidence, and candor that I used these words, which spirit I hope is manifest throughout my entire letter, for it was in that spirit that I wrote you. I never suspected that these words, used as I used them, would ever afford an occasion for such comment or interpretation as have been given them.

You know, I am sure, that nothing could be farther from my thought than to give cause for offence to

senators expressed the opinion, which was apparently accepted by many other members of that body, that my letter contained "a veiled threat." As it appears from the record that it is the phrase "grave consequences," which I used in the concluding part of my letter that some of the senators construed as "a veiled threat," I may be permitted to quote here full text of the sentence which contained the words in question.

"Relying upon the confidence you have been good enough to show me at all times, I have stated or rather repeated all this to you very candidly and in a most friendly spirit, for I realize, as I believe

you do, the grave consequences which the enactment of the measure retaining that particular provision would inevitably bring upon the otherwise happy and mutually advantageous relations between our two countries."

Frankly, I must say I am unable to understand

your people or their Government, and I have not the slightest doubt that you have no such misunderstanding as to either the spirit in which I wrote the letter in question to you or the meaning I intended for the phrase that I used.

In view, however, of what has transpired in the course of the public discussion in the Senate, I feel constrained to write you, as a matter of record, that I did not use the phrase in question in such a sense as has been attributed to it.

I am, my dear Mr. Secretary,

Yours very truly,

(Signed) M. Haninara

Honorable Charles E. Hughes,

Secretary of State.

(参考)

四月十一日外務省公表第五号

右和訳文

公表第五号

大正十三年四月十七日在米埴原大使ヨリ米国國務長官

く宛テタ移民問題ニ関スル公文ノ訳文ハ左ノ通リテア

ル

本使ハ千九百二十四年四月十四日付議会議事録ヲ閲読スルニ回付セラレ同書輸ハ上院ニ於テ論議ノ目的トナリシカ如シ右議事録ニ拠レハ一部ノ上院議員ハ本使ノ書輸カ「覆面ノ威嚇」ヲ包含スルモノナリトノ意見ヲ表明シ且同意見ハ上院多数ノ承認ヲ見ルニ至レリ

一部上院議員カ「覆面ノ威嚇」ナリトシテ解釈セラレタルハ本使カ其ノ書輸ノ末節ニ使用シタル「重大ナル結果」ナル字句ノ存スルカ如キヲ以テ本使ハ茲ニ問題トナリタル字句ヲ包含セル文章ノ全部ヲ引用スベシ

「貴官カ予ニ示サレタル信義ニ頼リ本使ハ茲ニ最モ率直且友誼的精神ヲ以テ以上ヲ反覆陳述シタル次第ナリ若シ此ノ特殊条項ヲ含ム法案ニシテ成立ヲ見ムカ両國間ノ幸福ニシテ相互ニ有利ナル關係ニ対シ重大ナル結果ヲ誘致スベキハ本使ノ感知セサルヲ得サル所ニシテ貴官亦同感ナルヲ信スルモノナリ」

之ヲ率直ニ述フレハ此ノ二語カ文脈上威嚇ヲ意味スルカ如

ク解釈セラレ得ヘキヤハ本使ノ了解スル能ハサル所ナリ唯本使ハ提出中ノ法案ニ一特殊条項ヲ採用スルニ依リ両国ノ伝統的友情ニ対シ最モ不幸ニシテ憂慮スヘキ影響ヲ及ホスヘキヲ力説セムト試ミタルニ過キス右特殊条項ノ採用ハ両国ノ善良且共助的關係ヲ甚シク毀傷スルノミナラス過去七十五年間ノ両国国交ノ特徴ヲ表明シ且華盛頓會議ニ依リ并我国今次ノ灾害ニ於テ貴國民カ表示シタル最モ深甚ナル同情ニ依リ一層深厚ノ度ヲ増加シタル相互尊敬及信任ノ精神ヲ破壊スルニ至ルヘン

日本及北米合衆国ノミナラス爾余ノ世界列国ノ幸福ニ必要ナリト信セラルル両国間ノ真摯ナル協力ハ十分期シテ待チ得ヘキニ拘ラス若シ斯ノ如キ特殊条項採用セラレタリトセハ両国間ノ關係ニ惑惑ト不信トノ不幸ナル雰囲氣ヲ釀成シ又ハ少クトモ其ノ虧アルヘン

從来日米両国民ヲ連繫シ來リタル欣フヘキ友情ノ絆ヲ維持シ尚能フヘクンハ更ニ之ヲ緊密ナラシメムコトヲ最高義務トスル日本ノ代表者トシテ本使ハ真摯ニ如上ノ影響ハ「重大ナル結果」タルヘキヲ信スルモノナリ

本使ハ唯淡白ニ右字句ヲ用ヒ勿論毫モ不快若クハ非礼ノ念

本使カ米国民若ハ米国政府ノ感情ヲ傷害スルカ如キ意図ヲ有セサリシハ貴官ノ既ニ熟知セラルル所ニシテ本使カ貴官ニ宛テタル書翰ヲ草スルニ当リ抱懐シ居タル精神並本使ノ用ヒタル字句ニ依リ貴官ニ伝ヘムト欲シタル字義ニ付キ誤解セラルルコトナカルヘキハ本使ノ確ク信シテ疑ハサル所ナリ然ルニ上院ニ於ケル公開討議中現レタル事実ニ顧ミ本使ハ右ノ字句ハ決シテ今回云為セラルルカ如キ意義ニ用ヒラレタルニアラサルコトヲ記録ニ留メムカ為貴官ニ通告スルノ要アリト感スルモノナリ

(別電一)

在米國埴原大使宛松井外務大臣宛四月十九日着電報第三一四号  
四月十八日付埴原大使宛ヒューズ国務長官答報

Department of State,  
Washington, April 18, 1924.

His Excellency Mr. Masanao Hanihara,  
Ambassador of Japan.

My dear Mr. Ambassador:

I am gratified to receive your letter of the 17th instant with your frank and friendly explanation of the intent of your recent note in relation to the pending Immigration Bill.

It gives me pleasure to be able to assure you that reading the words "grave consequences" in the light of their context, and knowing the spirit of friendship and understanding you have always manifested in our long association, I had no doubt that these words were to be taken in the sense you have stated, and I was quite sure that it was far from your thought to express or imply any threat. I am happy to add that I have deeply appreciated your constant desire to promote the most cordial relations between the peoples of the two countries.

(Signed) Charles E. Hughes

ニ多トスルモノナルコトヲ茲ニ付言スルノ光榮ヲ有ス

~~~~~  
四月十九日(着) 在米國埴原大使ヨリ  
松井外務大臣宛(電報)

排日移民法緊要走後ニ於ケル米國並局ノ態度

II 関スル件

第三 17 号 極秘

往電第三 11 号会見ノ際國務長官ハ十四日ノ上院ニ於ケル本使書翰ニ閑スル討議ハ本使ニ対シ injustice ト為スモノニシテ実ニ遺憾ナリト述べタルニ付本使ハ言ヲ多トスルト共ニ若シ右ノ如キ討議カ日米國交ニ及ホス惡影響ヲ幾分ニテモ減シ得ルコト叶ハハ自分一己ノ犠牲ノ如キハ謂フニ足ラス自分ノ焦慮シ居ルハ今後形勢ノ發(脱)ヲ述ヘ本件法案ノ愈確定シタル場合米國行政部トシテハ如何ナル態度ニ出ツくキヤニ付夫レトナク意向ヲ探ランシタルモ長官ハ何等「コノマット」スルコトナク唯何レ追テ前記往電長官ト本使トノ往復文発表ノ場合ハ相當良好ノ結果アルベキヲ

予期ス蓋シ東部各地ニ於ケル有力新聞ノ多數ハ吾人ノ立場ヲ後援シツツアレハナリト謂ヘルノミ察スルニ國務長官ハ

大統領ト協議ノ上右往復文発表後ニ於ケル輿論ノ趨向ヲ見

(参考)

大正十三年四月十八日米國國務卿ヨリ在米埴原大使ニ  
宛テタル移民問題ニ關スル公文ノ訳文ハ左ノ通テアル  
右和訳文

公表第六号

大正十三年四月十八日米國國務卿ヨリ在米埴原大使ニ  
宛テタル移民問題ニ關スル公文ノ訳文ハ左ノ通テアル  
本官ハ且下審議中ノ移民法案ニ關スル貴大使ノ最近公文ノ  
趣旨ニ付キ率直且友誼的ニ説明スル所アリタル本月十七日  
付ノ貴翰ヲ接受セルヲ欣幸トス本官ハ「重大ナル結果」ナ  
ル文字ヲ読ムニ當リ文脈上及貴大使カ本官トノ久シキ交誼  
中常ニ表示セラレタル友情ト了解トノ精神ニ鑑ミ本官ハ右  
ノ字句ハ當然貴大使カ陳述セラレタル意義ニ於テ解セラル  
而シテ又貴大使カ何等威嚇ノ意ヲ寓シ又ハ言明セムトスル  
ノ意思ヲ毫モ有セラレサリシモノト確信シ居リタリシコト  
ヲ茲ニ貴大使ニ確言シ得ルヲ欣幸トス本官ハ貴大使カ常ニ  
日米兩国民ノ最モ親善ナル關係ノ増進ヲ念トセラルルヲ大

1114 四月十九日 松井外務大臣ヨリ

在米國埴原大使宛(電報)

排日移民法案問題ニ關シ駐日米國大使ウツヅ

ト意見交換ノ件

# 一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一一五

第一七九号 極秘

四月十九日本大臣ハ前日京都ヨリ帰京シタル在邦米國大使ヲ招請シ移民問題ニ關シ非公式ニ腹藏ナキ意見ノ交換ヲ為シタル處「ウッヅ」大使ハ自分ハ目下ノ状態ニ對シ憂慮措ク能ハス grave consequences ナル字句並ニ大体ノ語氣ニ關シテハ一部米人ノ反感ヲ招キタルモノノ如クナルカ自分モ嘗テ西班牙在勤中慣レナル外国语ヲ使用スル場合苦心シタルコトアリテ埴原大使ニ對シテハ衷心同情ノ念ニ堪エサル處自分ハ此際若シ同大使ヨリ「ヒューズ」氏ニ對シ所謂 grave consequences ナル語ハ毫モ威脅ヲ意味シタルモノニアラサルコトヲ明ニシ之ヲ上院議員等ニ了解セシムルコトセラルニ於テハ局面ヲ展開セシムル為極メテ有益ナリト思考スル旨ヲ述ヘタルニ付本大臣ハ自分モ全然同様ノ感想ヲ懷キ実ハ同様ノ趣旨ニテ已ニ在米大使ヘ電報ヲ發シタル次第ナリト答ヘタルニ「ウッヅ」大使ハ自分ハ之ヲ聞キテ大ニ安堵セリ閣下ニ於テ既ニ右措置ニ出テラレタルハ欣喜ノ念ニ堪エスト述ヘタリ

仍テ本大臣ハ日米親交維持ノ為メニハ御互ニ全力ヲ注クコトヲ要ス本年ハ米国ニ於ケルト同様日本ニ於テモ總選挙ア

一六〇

リ内政上ニモ影響スル處多ク益々紛糾スル傾向アリ來週ノ枢密院會議ニ於テモ本件ニ關スル報告ヲ為スベキ筈ニテ種種六ヶ敷質問モ出ツヘキニ付一刻モ早く此緊張シタル時局ヲ緩和スルコト緊要ニ付同大使ニ於テモ極力尽力アリタキ旨ヲ述ヘタルニ「ウッヅ」大使ハ貴見ハ至極御尤モナリ日本刻下ノ情勢ハ自分ヨリ本国政府ニ詳細電報シ迅速解決ノ方法ヲ講スル様強ク政府ニ上申スヘシト語リタリ

一一五 四月二十二日(着) 在米国埴原大使ヨリ  
松井外務大臣宛(電報)

日本大使ト國務長官間ノ往復文書公表ノ反響

報告ノ件

第三二一九号

二十一日新聞報

國務卿日本大使往復文發表ハ各新聞ニ良好ナル反影ヲ起シ当方主ナル新聞ハ一齊ニ論說ヲ掲ケ緊張セル形勢ヲ緩和シ議会ノ反省ヲ促スニ好機会ヲ与ヘタル様論評シ居レリ主ナル新聞中共和党ノ「トリビューン」ハ論說ヲ掲ケサリシモ其華府通信ハ右公文ハ最近議会内ニ起リシ緊張ヲ緩和スルニ効アリ唯之カ為直ニ議会ノ排日法ニ對スル行動ニ変

化アルヘシトハ思ハレス両院ノ領袖連ハ日本大使ノ率直ナル説明ニ満足ノ意ヲ表シ居ルカ議会ノ今日迄ノ形勢ニ顧ミ排日法支持論者大多数ニテ之カ変更ヲ提議スル人無キ事態ナリト伝ヘ両院協議ノ結果法案大統領ニ提出セラルル場合之ヲ「ヴィートウ」スルヤ否ニ就テハ何等捕捉スヘキ徵候モ見ヘス但シ右発表前一般ノ観測ハ不調印ノ儘法律トナルベシト言フニアリシカ大統領ノ顧問中ニハ大使ノ今回ノ説明ハ大統領ヲシテ太平洋岸ノ政治上ノ影響ニ顧慮無ク「ヴィートウ」ヲ考フル方ニ導クヤモ知レスト考フルモノアルヤニ報道シ他ノ新聞モ大体同様ノ観測ヲ伝ヘ居レリ

大統領ノ行動ニ就テハ何等ノ確報ヲナサス Federal Council of Church ハ此機ニ両院議員ニ訴ヘ其反省再考ヲ促ス文書ヲ配付發表シ National Foreign Trade Council ハ上院ノ措置ニ反対シ其日米通商ニ悪影響ヲ及ホスコトヲ警告セリ而シテ各新聞ニ上院ノ行動反対ノ寄書日々掲載セラレ居レリ主ナル新聞論調左ノ通特ニ「ハースト」系ノ新聞ガ議会ノ反影ニ就キ憂慮セルニヤ再ヒ論説ヲ掲ケ出シタルハ注目ニ値ス

「ヒューリーク・タイムズ」ハ這回ノ日本大使書翰ニ依リ

注目ニ値ス

一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一二五

一六一

リ内政上ニモ影響スル處多ク益々紛糾スル傾向アリ來週ノ枢密院會議ニ於テモ本件ニ關スル報告ヲ為スベキ筈ニテ種種六ヶ敷質問モ出ツヘキニ付一刻モ早く此緊張シタル時局ヲ緩和スルコト緊要ニ付同大使ニ於テモ極力尽力アリタキ旨ヲ述ヘタルニ「ウッヅ」大使ハ貴見ハ至極御尤モナリ日本刻下ノ情勢ハ自分ヨリ本国政府ニ詳細電報シ迅速解決ノ方法ヲ講スル様強ク政府ニ上申スヘシト語リタリ

一一五 四月二十二日(着) 在米国埴原大使ヨリ  
松井外務大臣宛(電報)

日本大使ト國務長官間ノ往復文書公表ノ反響

報告ノ件

第三二一九号

二十一日新聞報

國務卿日本大使往復文發表ハ各新聞ニ良好ナル反影ヲ起シ当方主ナル新聞ハ一齊ニ論說ヲ掲ケ緊張セル形勢ヲ緩和シ議会ノ反省ヲ促スニ好機会ヲ与ヘタル様論評シ居レリ主ナル新聞中共和党ノ「トリビューン」ハ論說ヲ掲ケサリシモ其華府通信ハ右公文ハ最近議会内ニ起リシ緊張ヲ緩和スルニ効アリ唯之カ為直ニ議会ノ排日法ニ對スル行動ニ変

紳士ラシク説明シテ疑惑ノ原因ヲ一掃セリ紳士間ノ言葉ノ争ナラハ問題ハ之ニテ結了シタル筈ナリ議会ハ宜シク全ク誤解ナリ大使ハ事態ヲ明ニセリ吾人モ争ヲ之ニテ打切り元ニ帰ラント答ヘテコソ紳士ノ態度ナリ若シ上院ノ真意他ニ存シ單ニ之ヲ口実ニセシモノナリトセハ遲々トシテ困難ナル排日条項ノ可決セラレタル以上如何トモスヘカラストノ理論ヲ捏ネ廻シ或ハ既ニ協議会ノ議ニ付セラレタリト遁ケンモ紳士的精神ニ依ル外交ニ出ツルモノトセハ釈明ヲ受ケ容ルルニハ時機未タ遅カラサルナリ大統領ハ本問題ノ共和黨政策ニ及ホス結果ノ重大ナルヲ指摘シ依テ以テ再考ヲ促シ得ヘク更ニ止ヲ得スンハ大統領ハ移民法案ヲ「ヴィートウ」シ堅実ナル再考ヲ必要ナラシメ得ヘシト論シ「ヒューリーク・ウォールド」ハ例ニ依リ「ヒューズ」ノ態度ヲ難シ日本大使ノ書翰ノ發表ノ前ニハ早過キ後ニハ遲過キタリ皮肉リ尤モ議会カ其過失ヲ回復スルニハ其時機遅シトナサス之重大ナル点ナルカ本来日本ノ從来確守シ來タレハ紳士協約ノ下ニ於テモ將又「クオーター」法内ニ於テモ日本移民ヲ目的トスルニアラスシテ太平洋岸諸州政治家ノ感

# 一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一一六

一六二

情ヲ窺フモノナリ両院協議会ニテ重大ナル過誤ヲ改ムルノ  
機会アリ日本大使ノ書翰ハ議会ノ敵対ヲ撤廃セシムルニ充  
分ナリ若シ議会カ依然排斥ヲ継続スルモノトセハ「ヴィー  
トウ」ヲ為スヘキハ「クーリッヂ」ノ明ナル義務ナリト論  
ジ「バルチモア・サン」ハ上院外ニ於テハ誰シモ日本大使  
ノ最初ノ書翰ハ「ヴェイルド・スレット」ヲ含ムモノト解  
セサルヘシトテ字義ヲ講義シタル後今次大使カ此ノ如キ意  
志毫末モ無カリシコトヲ証明スルノ機会ヲ捉ヘタルハ吾人  
ノ欣幸トスル処ナリ「グレイヴ・コンシクエンセス」トハ  
単ニ友好的ナル警告ナルト共ニ本件ノ如キ問題ガ常識ヲ逸  
セル場合ニ警告ヲ發スルノ当然ナルハ万人ノ一致スル処ナ  
リトナシ議会ハ果シテ再考ヲ為スヤ若シ然ラストセハ大統  
領ハ「ヒューズ」ヲ支持シ再ヒ議会ヲシテ僻見ヲ抱クコト  
ナク本問題ヲ考量セシムル為右議会ノ政治的再考ヲ促スヤ  
ト反問ス

「パブリック・レンジャー」ハ埴原大使ハ米国議会ヲシテ  
目下ノ難局ヲ更ニ親切且寬厚ノ態度ヲ以テ考究スル道ヲ容  
易ナラシメタリト冒頭シ用辞ニ注意ヲ欠キタル為常規ヲ逸  
セル上院ヲ激セシメタル嫌アルモ大使ノ率直ナル説明ハ日

一一六 四月二十四日 松井外務大臣ヨリ  
在米國埴原大使宛（電報）

## 枢密院本會議ニ於テ grave consequences II

### 閑シ質疑ノ件

#### 第一八五号 極秘

四月二十三日枢密院本會議ニ於テ本大臣ハ其ノ要求ニヨリ  
日米問題ノ経過概要ヲ報告セリ

同席上 「grave consequences ナル字句ハ政府ノ訓令ニヨ

リ使用シタルモノナリヤ」トノ伊東顧問官ノ質問ニ對シ本

大臣ヨリ「埴原大使ハ本大臣ノ訓令ノ範囲内ニ於テ行動シ

タルモノナレトモ字句ニ就テハ一々指図シタルモノニアラ  
ス」ト答弁セリ又同顧問官及其他二三ノ顧問官ヨリ右ノ字  
句ニ就キ後ニ証明ヲナシタルコトニ対シ非難アリタルカ之  
ニ対シテハ埴原大使ノ意思ト全然異ナリタル勝手ノ解釈ヲ  
為ス者アリタルニ付弁明ヲ為スコトハ此際機宜ノ処置ト思  
考シ當方ヨリモ弁明方電訓スル所アリタルカ之ト行違ニ大  
使ニ於テモ説明ヲ必要ト考へ自發的ニ右書面ヲ國務長官ニ  
送リタルモノナリト答ヘタリ尚久保田顧問官ヨリ政府今後  
ノ方策ニ付質問アリタレトモ将来ノコトハ事態ノ重大ナル  
ニ鑑ミ尚慎重考量ヲ要スルヲ以テ茲ニ言明スルコトヲ得ス  
ト答ヘ置ケリ

同日午後研究会常務委員数名本官ヲ來訪シ将来ノ対策ニツ  
キ質問アリタレトモ之ニ対シテモ前記同様ノ回答ヲナシ置  
ケリ

一一七 四月二十五日（着） 在米國埴原大使ヨリ  
松井外務大臣宛（電報）

## 日本通商航海條約第一條ノ解釈ニ關シ調査方

一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一一七

本外相ノ証明ト相俟テ紳士協約ノ復活乃至ハ他國ト同様ノ

「クオータ」適用將又移民法案ノ「ヴィートウ」ヲ招来  
スルナラン大使ノ証明ハ上院ノ面目ヲ立テ同院ヲシテ鎮靜  
モ議会ハ移民法案ヲ新ニ取扱フニ充分ナル時日ヲ有スヘク  
日本移民問題ヲ現在ノ如ク不安且不快ナル狀態ニ止ムルヨ  
ナラシムルノ機會ヲ与ヘタリ愈々「ヴィートウ」トナルト  
リハ議会ニ多少ノ面倒ヲ与フルヲ良策ナリト論ス

「ニヨーヨーク・アメリカン」（「ハースト」紙）排日問題  
ハ日本大使又ハ國務卿ノ言明シ又ハ思考スル處トハ異レリ  
異人種ヲ如何ニ取扱フヤハ米國民ノ幸福ノ問題ナリトテ從  
来ノ排日論ノ主張ヲ繰返シ議会ニ警戒ヲ与ヘ居レリ

「ニヨーヨーク・アメリカン」（「ハースト」紙）排日問題  
ハ日本大使又ハ國務卿ノ言明シ又ハ思考スル處トハ異レリ  
異人種ヲ如何ニ取扱フヤハ米國民ノ幸福ノ問題ナリトテ從  
来ノ排日論ノ主張ヲ繰返シ議会ニ警戒ヲ与ヘ居レリ

一一六 四月二十四日 松井外務大臣ヨリ  
在米國埴原大使宛（電報）

## 枢密院本會議ニ於テ grave consequences II

### 閑シ質疑ノ件

#### 第一八五号 極秘

四月二十三日枢密院本會議ニ於テ本大臣ハ其ノ要求ニヨリ  
日米問題ノ経過概要ヲ報告セリ

同席上 「grave consequences ナル字句ハ政府ノ訓令ニヨ

リ使用シタルモノナリヤ」トノ伊東顧問官ノ質問ニ對シ本

大臣ヨリ「埴原大使ハ本大臣ノ訓令ノ範囲内ニ於テ行動シ

タルモノナレトモ字句ニ就テハ一々指図シタルモノニアラ  
ス」ト答弁セリ又同顧問官及其他二三ノ顧問官ヨリ右ノ字  
句ニ就キ後ニ証明ヲナシタルコトニ対シ非難アリタルカ之  
ニ対シテハ埴原大使ノ意思ト全然異ナリタル勝手ノ解釈ヲ  
為ス者アリタルニ付弁明ヲ為スコトハ此際機宜ノ処置ト思  
考シ當方ヨリモ弁明方電訓スル所アリタルカ之ト行違ニ大  
使ニ於テモ説明ヲ必要ト考へ自發的ニ右書面ヲ國務長官ニ  
送リタルモノナリト答ヘタリ尚久保田顧問官ヨリ政府今後  
ノ方策ニ付質問アリタレトモ将来ノコトハ事態ノ重大ナル  
ニ鑑ミ尚慎重考量ヲ要スルヲ以テ茲ニ言明スルコトヲ得ス  
ト答ヘ置ケリ

同日午後研究会常務委員数名本官ヲ來訪シ将来ノ対策ニツ  
キ質問アリタレトモ之ニ対シテモ前記同様ノ回答ヲナシ置  
ケリ

一一七 四月二十五日（着） 在米國埴原大使ヨリ  
松井外務大臣宛（電報）

## 日本通商航海條約第一條ノ解釈ニ關シ調査方

一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一一七

一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一二八 一二九

一六四

一二八 四月二十六日 松井外務大臣ヨリ  
在米國埴原大使宛（電報）

排日移民法成立引延シヲ目的トセル日米連合  
高等委員会設置案ニ關シ國務長官ノ意向問合

七方訓令ノ件

第一八七号 極秘

移民法案ハ既ニ不幸ニシテ上下両院ヲ通過シ今ヤ内外ノ注意ハ大統領ノ裁否如何ニ集中シ居ル狀態ナル處帝國政府トシテハ此際徒ラニ拱手傍観スル能ハス米国當局ニ於テモ善後処置ニ付相当焦慮シツツアルコトト思考セラル就テハ此際何等カノ方法ニヨリ本問題最終ノ決定ヲ免モ角引延ハスコトヲ得ハ好都合ニテ夫レニハ予テ問題トナリ居ル連合高委員会ヲ設置スルモ一案カト存セラルル處目下大統領ノ選挙ヲ控ヘ果シテ其時期ヲ得タルヤ否又正式ノ委員ヲ任命セントセハ任命手続、委員ノ権限、審議スヘキ事項ノ範囲等ニ付種々ノ面倒ナル問題アルヘキニ付追テ高等委員設置ノ目的ヲ以テ先ツ不取敢非公式ニ双方ヨリ一、二名ノ委員ヲ任命シ予備的ニ本問題ニ關スル各種事項ヲ研究討議セシムルコトトシテハ如何哉ト思考セラル高等委員任命ノ儀ハ

尚右ニ付四月二十六日「ウッジ」大使來訪シタルニ付右ノ意見ヲ述ヘタル所同大使モ同感ニテ同様ノ意見ヲ國務長官ニ電報スヘシト答ヘタリ

ラバ國務長官ノ意向ヲ内々確メラレ何分ノ儀至急回電アリタシ

一二九 四月二十八日 松井外務大臣ヨリ  
在米國埴原大使宛（電報）

日米通商航海條約第一條ノ解釈ニ對スル日本  
政府ノ見解申入レ方訓令ノ件

第一八八号

(一)貴電第三三九号ニ關シ「ジョンソン」法案ニ對スル下院移民委員会報告ニヨレハ同委員会ハ日米條約第一條第一項ハ商業ノ為ニスル入國滯在ニ付シテノミ保障ヲ与ヘ居ルニ過キサルモノト解釈シ又嚮ニ「ヒューズ」ヨリ「ジョンソン」ニ送リタル書翰モ同様ノ趣旨ニ解セラルヤニ察セラルル處帝國政府ニ於テハ條約締結當時本邦ニ於テ作

成ハ批准ノ上公布済ミノ該条項ノ訳文ニ拠リテモ明白ナルカ如ク單ニ商人ニ止マラス労働者ヲ包含スル一般締約国民ノ往来居住自由ノ原則ヲ定メタルモノト解釈シ来レルハ既ニ御承知ノ通ニシテ(イ)該条項ノ文理解釈ニヨルモ入國旅行滯在ノ自由ト商業遂行ノ自由等トヲ対立セシムルコト正当ナルノミナラス（別電第一八九号英文意見書参照）(ロ)若シ現行條約ニシテ締約國民ニ對シ通商ノ為ニスル入國ノミヲ「カバー」スルモノトセハ何故ニ同条約締結ノ際移民ノ入國ニ關シ法制ノ自由ヲ認メタル旧条約第二条末段ヲ削除シ其ノ代リニ帝國政府ニ於テ移民制限ニ關スル宣言ヲ為シタルヤノ經緯ヲモ説明シ得サル次第有之(ハ)更ニ又帝國ニ於テハ小村條約改正以後通商條約中ニハ一般帝國臣民ノ入國、居住、旅行ノ権利ニ關シ少クトモ最惠國待遇ヲ保障スルノ規定ナキ限り一切之ヲ締結セサルノ方針ヲ採用シ現ニ右方針維持上濠州南阿波斯「ウルグアイ」等トハ未ダ條約關係ヲ設定シ得サル次第ナリ

(二)現行日米條約締結ノ際日英條約ノ如キ形式ノ本邦原提案ヲ米國ニ於テ採用シ得サリシ理由ハ米國ト列國トノ間ニ

一 米國ニ於ケル排日移民法成立問題 一二九

一六五

解釈問題ニ付論議ヲ試ミントスルモノニアラサレトモ排日条項カ明カニ條約違反ナルニ不拘之ヲ不問ニ付スルコトハ對内關係ニ於テモ對外關係ニ於テモ到底出來難キコ

# 一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一三〇

一六六

トナルノミナラス大統領ニ於テ移民法案ヲ否認スル際条約違反ヲ理由トスルヲ便利トスルコトアルヘキニ付本電及別電英文意見書ニ依リ可然覺書ヲ作成シ条約ノ解釈ニ

対スル帝國政府ノ意見トシテ適當ノ時期及方法ニ於テ國務省ニ申入方可然御措置相成度シ

一三〇 四月二十九日(着) 在米國埴原大使ヨリ  
松井外務大臣宛(電報)

## 排日移民法問題ニ関スルクーリッヂ大統領言

### 明ニ対スル諸方面ノ観測報告及ビ日米高等委員会設置案ニ関シ意見上申ノ件

#### 第三五三号 極秘

貴電第一八七号敬承右熟考ノ結果左ニ卑見開陳ニ先立チ本問題ニ關スル議会内外目下ノ情勢ニ就キ本使ノ今日迄入手セル情報大要ヲ述ヘンニ大統領ハ四月二十五日新聞記者定例會見ノ際初メテ本問題ニ關シロヲ開キ「余ハ結果ニ於テ日本移民排斥ノ実ヲ擧ケテ而モ日本ノ感情ヲ害フコトナキ何等カノ弁法ヲ發見セント企図シツツアリ」トノ意味ヲ語リタル外何等ノ言明ヲ避ケタル趣ナルカ右ハ如何ナルコトヲ意味シタルモノナリヤ不明ニシテ是レニ対スル新聞記者

其他各方面ノ観測モ甚タ区々タリ

(イ)或者ハ曰ク右ハ目下進行中ナル両院協議会ニ於テ日本移民ヲ「クオーダ」中ニ包含セシムル様妥協セシメ右協議会案カ両院ノ議ニ上ルヲ俟チ帰化不能外国人排斥条項ノ削除又ハ之ニ対スル何等カノ修正ヲ考慮セシメントノ意向ナルヘキモ斯ノ如キハ議会現下ノ情勢ニ照シ不可能事ナルヘク換言セハ仮ニ両院協議会カ如何ナル報告ヲ為スコトアルモ問題ノ条項カ其儘存続セラルヘキハ疑ナク而

モ既ニ右ノ如ク大々多數ヲ以テ両院ヲ通過シ且問題ノ条項以外ニハ大体ニ於テ国民大多数ノ要望ニ叶フノミナラス該条項反対論者ト雖当國伝來ノ國法カ認メテ以テ帰化不能ナリトスル外国人ノ定住的入國ヲ制限又ハ禁止スヘシトノ主義ニ反対スルモノハ極メテ鮮ク唯日本人ノ場合ニ限り是カ制限又ハ禁止ハ現実ノ必要ニ迫ラレサル限り排斥的立法ニ依ルヨリモ外交手段ニ求ムル方カ穩當ナルヘシト云フニ過キサル実情ニ鑑ミ大統領トシテモ是ヲ拒否スルハ困難ナルヘク結局該条項ニ反対ノ意見ヲ表明スル為單ニ該法案ニ署名スルコトヲ拒ムコトカ大統領ノ為シ得ル「マキシマム」ナルヘク其場合法定ノ十日間ヲ

経過セハ法案ハ大統領ノ署名ナシニ自動的ニ確定法律トナルヘシ

(ロ)又或者ハ曰ク大統領ハ議会ノ最早動カスヘカラサルヲ熟知セルモ尚有ラユル方法ニ依リ説得ヲ試ミントスルハ是結局拒否ノ止ムヘカラサルヲ覺悟シ議会外ニ國民ニ成ル可ク是レヲ徹底セシムルノ必要ヲ感スルカ為ニ外ナラサルヘシ

(ハ)更ニ他ノ者ハ曰ク何人ヨリモ克ク議会ノ情勢ニ通シ居ルヘキ大統領ハ最早本問題ニ關シ自党ノ「コントローリング・マジヨリチー」ヲ有シ居ラサル議会ノ決定ヲ翻サンムルノ不可能ナルコトヲ知ラサル筈ナク從テ前記大統領ノ談話ハ結局拒否ノ止ムナキヲ覺悟シ居ルコトヲ暗示シタルモノト解スヘク蓋シ「ヒューズ」埴原第二次往復ノ公表ハ愈大統領カ拒否ノ場合其理由ヲ明白ナラシムルカ為ニ為サレタルモノト見ルカ穿チタル観察ナルヘシ但シ大統領カ拒否シタリテ大統領選挙戦ヲ前に控ヘ殆ト前例ナキ迄ニ政争熱ニ昂奮シツツアル議会昨今ノ情勢ニテハ既ニ一旦右ノ如キ大多数ヲ以テ通過シタル法案ヲ再考スルノ冷静ナル雅量ハ極メテ乏シカルヘク寧ロ同様ノ多

## 一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一三〇

一六八

ルニ拘ハラス猶右ノ引延シ方ヲ交渉又ハ「サジエスト」セントスルカ如キハ徒ラニ難キヲ強フルノ嫌アル而已ナラス純然タル民間有志側ヨリナラハ未タシモ（夫レサヘ日本側ヨリニテハ面白カラズ）苟モ我政府筋ヨリ進テ連合高等委員会設置案ヲ仄メカシテ右引延ハシ方考慮ノ資ニ供セントスルカ如キハ到底何等有効ノ効果ヲ招来シ得ヘキ見込ナキ而已ナラス却テ在來ノ当國議會ノ最モ神經過敏ナル難点ニ触ルルコトトナリ全然予期ニ反シ而カモ極メテ危険ナル事態ヲ醸成スルノ惧大ナリト思考セラルニ付乍遺憾本使トシテハ極力御再考ヲ煩ハササルヲ得ス左ニ事由ヲ略陳スヘシ

抑モ移民問題ハ純然タル国内問題ニシテ如何ナル移民ヲ優（脱）シ又ハ排斥スヘキカラ決定スルハ国家固有ノ主権（脱）ノ容喙ヲ許サストノ議會トシテハ其當否ハ別トシテ米國確定ノ輿論ト見ルヘク而シテ米國議會又ハ國論カ其認メテ以テ純然タル国内事項トスル問題ニ付キ飽ク迄其專管権ヲ保持シテ議ラサラントスル次第ハ最近四國條約付屬宣言書第二項ニ徵スルモ明カナリ從テ移民法制定ノ當否ヲ國務委員会ノ調査研究ニ求メントスルモノナルカ如キ嫌アル

何等「サジエスト」スル事ヲ避ケ専ラ國務長官及大統領ノ誠意技倅ニ信頼スルノ態度ヲ持シ冷静ニ移民法案ノ成行ヲ見届ケ若シ大統領カ拒否権ヲ行使シ其結果幸ニ問題ノ条項カ不成立ニ終リタル場合ニ於テ〔一〕大統領カ拒否権ヲ行使セルモ尚議會カ三分ノ二ノ多數ヲ以テ之ヲ override セル場合、〔二〕大統領カ拒否権ヲ行使セス提案ニ不同意ノ意思ヲ表白シ又ハ議會ノ再考ヲ促シタル迄ニテ法案結局確定法律トナリタル場合、〔三〕又ハ大統領ノ尽力ニ依リ議會ニ於テ何等カ妥協的修正ヲ施シ而モ其修正ハ未タ我方ノ満足シ難キモノナルモ尚大統領トシテハ現事態ノ下ニ可能ナル最善ト認メ之ヲ默認又ハ裁可シタル場合、〔四〕<sup>(脱)</sup>各場合ニ処シ如何ナル措置ニ出スヘキヤヲ予メ考究準備シ置クコト肝要ナルヘク

卑見ニ依レハ右〔一〕ノ場合ニハ不敢我政府ノ名ニ於テ大統領ノ措置ニ対シ可然謝意ヲ表スル事尤此場合ニ於テモ問題ハ單ニ差当リ喜ハシキ一段落ヲ告ケタルノミニテ決シテ解決セラレタルモノナラサルカ故ニ如何ニ将来ニ処スヘキヤハ今ヨリ篤ト考究シ置クヲ要ス

卑見ニテハ此ノ場合米国政府トシテハ早晚紳士協約ノ改訂

一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一三〇

一六九

又ハ廢棄若ハ何等カ新條約商議ノ案ヲ提出スベク而シテ其ノ案ノ形式カ如何ナルモノナルニヨ目的ハ少クトモ結果ニ於テ日本移民排斥論者ノ要求ヲ相當満足セシメントスルモノ換言セハ現在紳士協約以上ノ制限ヲ我カ移民ニ加ヘントスルモノナルヘキハ予測ニ難カラサルニ付我方トシテハ幣原「モ里斯」内協議當時ヨリハ更ニ進ミテ大々的讓歩ヲ為スノ覺悟ナクハ問題ハ結着セサルヘク從テ來議會後ハ又又今回同様ノ難關ニ遭遇スル無キヲ保セス果シテ然リトセハ其ノ結果ハ推測ニ難カラサルヘキカト思考ス〔二〕ノ場合ニハ大統領ノ措置ハ多トスルモ議會カ之ニ聽從セサルハ我カ政府ノ深ク失望スル處ナリ尚前後ノ措置ニ付テハ追テ何分ノ申入レヲ為スノ自由ヲ留保スル旨不取敢申入レ置ク事〔三〕、〔四〕ノ場合ニハ我政府ノ失望ヲ表白スルト共ニ〔二〕ノ場合同様善後措置ニ付我方申入レノ自由ヲ留保シ置キ徐ニ対策ヲ講究スルヨリ外ニ名案無カルヘキヤニ考ヘラル

何レニシテモ別電第三五二号ノ通國務長官及大統領ニ於テ事態ノ重大ナルヲ熟知シ目下折角本問題ニ付苦心画策ニ努メ居ル際御訓電ノ如キ案ヲ「サジエスト」スルコトハテ宜ニ適スルモノト思考致シ難ク寧ロ差当リ前陳ノ通慎重誠

## 一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一三一

一七〇

黙冷靜ニ米国当局ノ施措ヲ注視シ一切ノ責任ヲ之ニ担当セシムルノ態度力最モ賢明ニシテ又米国当局ノ諒トスル処ナルヘキカト思考ス但シ在本邦米国大使カ自己ノ意見トシテモナシ右言辞ノ足ラサルハ御咎メ無ク篤ト御考量ノ上折返シ何分ノ御回訓ヲ請フ

一三一 五月三日(着) 在米国埴原大使ヨリ  
松井外務大臣宛(電報)

日本通商航海條約解釈問題ニ關スル國務長官

トノ懇談結果報告ノ件

第三六五号 極秘

貴電第一八八号及同別電第一八九号ニ關シ

五月一日國務長官ニ面会口頭ヲ以テ我政府ニ於テハ此際條約の解釈問題ニ付論議ヲ試ミントスル意思ナキモ三月二十四日下院移民委員長「ジョンソン」ノ報告ニ依レハ日米条約第一項ハ商業ノ為ニスル入國ニ對シテノミ保障ヲ与ヘ居ルニ過キスト解釈シ居ルモノノ如ク見ユル處我政府ノ見解ハ之ニ反シ右ハ單ニ商人ニ止マラス一般締約国民ノ往来自由ノ原則ヲ定メタルモノト認メ此点ニ關シ長官ノ注意ヲ喚

モノナルカ右除外例カ前述ノ永遠的移民ヲ除ク他ノ移民ニシテ條約上入國ヲ許可セラレ居ル一切ノ移民ヲ包含セサルヤ換言セハ該条項ハ條約ト抵触スルコトナキヤ否ヤヲ決センニハ單ニ「現行條約上商業ノ為ニ入國ノ権利アル外国人」云々ノ一節ノミナラス(以下ハニ至ル他ノ總テノ除外例ヲ考慮ニ加ヘタル上ナラサルヘカラス

何レニシテモ以上ハ條約解釈ニ關スル問題ナルカ該移民法案中日本人排斥ニ關スル条項ニハ自分(長官)ハ政策トシテ反対シ居ル次第ニテ今後該法案ノ運命如何ナルヘキヤハ予測シ難キモ自分ハ依然トシテ右政策上ノ見地ヨリスル反対ヲ持続シ居ル次第ナレハ現行日米條約第一条ノ解釈問題ニ付両政府間ニ論議ノ發生セサランコトヲ自分トシテハ私カニ深ク希望スルモノナリトノ懇話アリシニ付本使ハ長官内話ノ次第ハ篤ト諒解セリ我政府ト雖右條約第一条カ長官ノ所謂永遠的移民取締ニ關スル權利迄モ制限シタルモノナリトノ論議ヲ此際強テ試ミントスルモノニアラサルヘシト思考スト述ヘタルニ長官ハ併シ君ノ前述ノ議論ヲ押詰メレハ右ノ根本問題ニ触ルコトナラスヤト輕ク反問セルニ付本使ハ此上右ノ点ニ付深入リスルハ面白カラスト存シ右

一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一三一

一七一

起シ置キタキ希望ナルカ本使ハ公然ト此事ヲ申入ルハ暫ク差控ヘ不敢試ミニ我政府ノ所見ナリト自分ノ諒解スル要点ヲ述ヘテ長官ノ一考ヲ煩ハシタシ前置シテ前記貴電ニ關シ政策ノ問題トハ全ク別個ニ考へ居レリ條約解釈ニ付テハ自分ハ一個ノ「デサイデッド、ブユウ」ヲ有シ居ルモ是ハ精細ノ論述ヲ要スルコトニテ仮令非公式ニナリトモ誤解ヲ生易キ方法ニ於テ之ニ触ルルコトヲ好マス唯聊モ自分(本使)限リノ含ミ迄ニ自分ノ考ノ根本的道筋ヲ示セハ凡ソ一國民ノ永遠的構成分子ヲ為スヘキ外國移民ヲ「レギュレーート」スルコトハ國家固有ノ主權ニ属シ條約上明確特定ノ規定ナキ限り此固有ノ権利ハ制限セラレタルモノト解スヘカラス米國ト各國トノ通商條約ニ於テ締約國民ノ往来居住ニ關スル規定ヲ存スルハ普通ノ國際交通「インターコース」ニ必要ナル往来居住ノ自由ニ關シ規定スル迄ニテ之力為ニ前述ノ永遠的移民ヲ制限若ハ禁止スルノ権利迄モ譲リタルモノト解スヘカラス而シテ「ジョンソン」移民法案第三条ハ勝手ニ移民ノ定義ヲ下シ之ニ除外例ヲ設ケントスル

反問ニハ何等応答スルヲ避ケ話題ヲ転シ前記下院移民委員会多數報告第九頁「日本ハ支那人朝鮮人ニ對シ種別的排斥ヲ實行シツツアリ」云々ノ一節ニ言及シ為念明治三十二年勅令第三五二号ノ趣旨ヲ説明シ右陳述ノ事實ニ相違スル次第ヲ指摘シ会談ヲ畢ヘタリ  
察スル所國務長官ハ政策上ノ見地ヨリ飽迄日本人排斥条項ニ反対セントスル決意ヲ有スルモノノ如ク其ノ決意カ如何ナル結果トナリテ現ハルヘキヤ當國ノ政情堪シク紛糾セル此際予断ノ限りニアラサルモ本使トシテハ從来ノ経緯ニモ鑑ミ飽迄長官ノ誠意努力ニ信頼シテ動カサルノ態度ヲ持スルコトカ賢明ノ策ナリト信シ該法案今後ノ成行如何ニ付テモ殊更ニ何等質問ヲ差控ヘタル次第ナリ旁貴電第一八八号末段御訓令ノ次第ハ此際前述ノ程度ニ止メ置キ此上深入リセサルコトヲ得策ナリト思考ス若シ此上深入リスルトキ(脱)カ為ニ極メテ難渋ナル新論議ヲ惹起シ何等問題ノ解決ニ利スル見込ナキノミナラス却テ悪影響ヲ生スル虞大ナルハ疑ナキニ付何卒本電篤ト御閲覽ノ上何分ノ儀折返シ御回訓ヲ仰ク

一三一 五月五日 松井外務大臣（ヨリ）  
在米國埴原大使宛（電報）

本邦輿論対策上善後策ヲ必要トスルニ付干國  
務長官ノ意向打診方訓令ノ件

第一九八号 極秘

貴電第三五三号ニ閲シ貴見御尤ノ次第トハ思考スルモノ本件成行ニ付本邦朝野挙ツテ痛心シ居リ殊ニ過般大統領ニ於テ貴電ノ如キ声明ヲナシタルニ対シ官民孰レモ之ヲ重大視シ大統領及長官從来ノ好意ニ倚頼スル次第ナルモ本件決定迄慢然其処置ヲ傍観スルコトハ本邦対内関係ニ於テモ困難ナル事情アリ從ツテ此際多少ニテモ効果アリト思料セラル手段ハ之ヲ尽シ輿論ヲ緩和シタキニ付貴官ハ國務長官ニ面会セラレ右帝国政府ノ意ノアル所ニ付篤ト諒解ヲ求ムルト共ニ本件善後策トシテ同長官ノ採ラレムトスル処置ニ付大体ノ意向ニテモ承知致シ度帝国政府トシテハ此際苟モ國務長官ノ行動ヲ援助シ又ハ之ヲ有利ニ導ク手段方法アラハ考究シタク例へハ往電第一八七号所載ノ如ク両國間ニ連合高等委員ヲ設クルコト困難ナラハ不取敢非公式準備委員ヲ設置スルカ如キ又ハ幣原・モリス協議案ヲ基礎トシ普通ノ外

交手段ニ依リ協議ヲ続行スルカ如キコトニ依リ排斥条項ノ不成立又ハ其実施延期等ヲ策スル上ニ何等カノ援助トモナラハ日本政府ニ於テ右ノ方法ニ協力スル覺悟ナル旨ヲ告ケ之ニ対スル同長官ノ意向ヲ確メラレ貴見ト共ニ電報アリタシ

一三三 五月七日（着） 在米國埴原大使（ヨリ）  
松井外務大臣（電報）

重シテ米國政府ノ措置振リヲ俟ツ方最善ナル

旨具申ノ件

第三八三号 極秘

貴電第一九八号敬承、慎重熟慮スルニ今ヤ問題ハ日米両政府間ト謂フヨリモ寧ロ米國政府対米國議會ノ關係ニ於テ難関ニ逢着セルモノト謂フヘク此對議會關係ヲ如何ニ処理スルカハ全然米國政府ノ責任ニ属シ我方ヨリ容喙ノ途ナク又容喙スヘカラザル筋合ナリト思考ス而シテ米國政府トシテハ我政府ノ申出ニ道理アルヲ認メ大統領國務長官共ニ目下折角議會方面トノ交渉ニ腐心努力中ナルニ依リ我方トシテハ此際黙シテ米國政府當局ノ誠意努力ニ全幅ノ信賴ヲ置ク

ノ態度ヲ持続スルコトガ筋道トシテ正当且威嚴ヲ保ツ所以ナルヘク又策略上ノ考慮ヨリスルモ此際我方ヨリ何等「サジェスト」スルコトハ半面ニ於テ我政府ガ米國政府當局ノ措置ニ全幅ノ信望ヲ置カサル証左ト解セラルヘク換言セバ米國政府當局ヲシテ日本政府ハ米國政府ガ議會ヲ動カシ得ルコトニモ又議會ヲ動カシ得サル場合大統領ガ拒否權ヲ行使スルコトニモ今ヤ余リ望ミヲ囁シ居ラズト感ゼシムルノ機会ヲ提供スルモノト謂フヘク果シテ然リトセバ左ナキダニ大統領選挙戦ノ場合所謂 political expediency ノ為ニハ殆ド何事ヲモ一時犠牲ニ供スルヲ辞セザラントスル米國政界ノ実情ニ照シ已ニ日本政府ニ於テモ余リ望ミヲ囁シ居ラサルコトナレバ當面政戦ノ勝敗ニ重大ノ影響ヲ及ボス危険アル「ヴィトー」ノ如キヲ敢テスルニモ及バザルヘシトノ空氣ヲ醸成スルノ惧ナキヤ

勿論此際我方ニ於テ緘默自重ノ態度ヲ持シ居リタリトテ為メニ大統領ガ最後ノ場合拒否權ヲ行使スルニ至ルヘシト予期スル能ハサルモ少ナクトモ我方ニ於テ最早米國政府當局者ノ誠意努力ニ余リ望ヲ囁シ居ラザルコトヲ予メ明示若クハ暗示シタル場合ヨリモ更ニ深ク大統領又ハ國務長官ヲシ

テ其道義的責務ヲ感ゼシムル見込多カルヘシト思考セラル特ニ國務長官ガ内密非公式ナリトハ謂ヘ本使ニ対シ政策トシテ排日条項ニ反対スル自分ノ意見ハ依然トシテ変更セズ云々ト明言（往電第三六五号）セルニ鑑ミルモ本使ノ観測ニシテ大過ナキ限り長官トシテハ已ムヲ得サル場合ハ進退ヲ賭シテモ其主張ヲ固持セントスル覺悟有ルモノト推測セラル果シテ然リトセバ長官ノ此覺悟ニ聊カニテモ弛ミヲ生ゼシムル危険アル「ステップ」ヲ我方トシテハ此際特ニ注意シテ避クヘキモノニアラズヤ

翻テ又此際御訓令ノ如キ「サジェスシヨン」ヲ為スコトニ依リ如何ナル効果ヲ贏チ得ヘキ見込アルヤヲ考フルニ前陳ノ通り今日ノ問題ハ日本政府対米國政府ヨリモ寧ロ米國政府対議會ナルガ故ニ右「サジェスシヨン」ノ幾分ニテモ有効ナランニハ其議會方面ヲ動カスノ可能性アルモノナラサルヘカラズ然ルニ卑見ニ依レバ國際高等委員會設置案ノ如キハ巴里平和條約否認當時並ニ其後ニ於ケル米國上院ノ空氣ニ微シ又最近排日条項ニ対スル上下両院ニ於ケル討論ノ趨勢ニ照シ右ノ可能性絶無ナル而已ナラズ却テ往電第三五三号ノ通り無用ノ而カモ有力有害ナル反対論ヲ誘起スヘキ

# 一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一三三

一七四

ハ疑ナク又幣原「モリス」協議案ヲ基礎トシ普通ノ外交手段ニ依リ協議ヲ続行スヘシト云フ案モ将来ハ姑ク措キ今日ノ事態ニハ適合スルモノト思考シ難キ而已ナラズ此際我方ヨリ進デ斯ノ如キ案ヲ提示スルハ将来或ハ起リ得ヘキ彼我交渉ノ場合ニ處スル策戦上ノ第一歩ヲ予メ先方ニ譲ルノ結果トナラサルヤ今左ニ其理由ヲ略陳センニ

目下米国政府当局ト議会側トノ折衝ノ結果トシテ有リ得ヘキ各場合如何ヲ想像スルニ大体左ノ孰カ一二出デザルベシ(一) 国務長官当初ノ勅告ノ通り排日条項ヲ削除シ紳士協約ヲ存続シ「クオタ」ヲ日本ニ適用スルコト

(二) 排日条項ヲ削除シ其代リ一定期間内ニ外交手段ニ依リ同一ノ目的ヲ達スベキ交渉権限ヲ行政部ニ付与スルコト

(三) 排日条項ハ其儘存続シ其実行ノ期日ヲ延期シ其間ニ同一目的ヲ達スル為メ何等外交手段ニ出ズルノ余地ヲ存スルコト之ニハ左ノ各場合ヲ想像スルコトヲ得ヘシ

(4) 政府ヲシテ單ニ紳士協約而已ナラズ必要ノ場合ハ現行日米通商条約迄モ之ガ廢棄通告ヲ為サシムルノ決議ヲナスコト

(5) 政府ヲシテ排日条項ト同一ノ目的ヲ達スル正式条約締

四 現在ノ通り排日条項存続ノ儘又ハ結果ニ於テ格別異ル所ナキ多少字句上ノ修正ヲ経タル上通過確定スルコト

ハ改訂セシムルコト

所ナキ多少字句上ノ修正ヲ経タル上通過確定スルコト

以上ノ内〔一〕ハ我方ヨリ見テ最善ノ場合ナルガ目下ノ情勢ニテハ貫徹ノ見込ミ絶無ナリ万々一達成スルコトアリトスルモ其場合ハ極度ニ紳士協約改訂ノ要求アルヘキハ予期ニ難カラズ〔二〕ハ結果ニ於テ排日条項制定ト異ルナキモニ体面保持ノ外觀ヲ有セシムルノ利アリ併シ見込ミハ〔一〕ノ場合ト大差ナク絶無ニ近シ〔三〕ハ〔二〕ニ比シ更ニ不利ナル場合ニシテ

四ハ最悪ノ場合ナリ而カモ右〔三〕又ハ〔四〕ノ場合ガ今日ノ所最多ク実現ノ可能性ヲ有スルハ推測ニ難カラズ斯ル場合ニ我方ヨリ幣原「モリス」案ノ如キモノヲ提示シタリトテ何等大勢ヲ左右スルノ効ナキハ勿論却テ是日本側ニ於テモ排日条項ノ事實上已ムヘカラサル次第ヲ合点シ居ル証左ナラズヤトテ議会内ノ排日論者ニ逆用セラルルノ惧大ナル而已ナラズ該案ハ在米邦人ノ私權享有上ニ於ケル区別的待遇撤廃ヲ須要条項トスルモノナルガ故ニ排日論者ノ神經昂奮シ居ル

此際左ナキダニ極メテ困難ナル右ノ問題ニ関スル討議ヲ併セ誘発スルガ如キハ危險莫大ニシテ實益絶無ナリト称スルモ過言ニアラサルヘク旁々此際右ノ如キ「サッゼッショーン」ヲ為スコトハ更ニ篤ト御考慮ヲ加ヘラレンコトヲ切望ス卑見トシテハ筋道トシテモ今日ハ最早我方ヨリ「イニシアチブ」ヲ執ルヘキ時期ニアラズ寧ロ米国政府当局トシテ我方ニ相談アルヘキ筋合ト存ゼラルニ付此際ハ思ヒ切リテ隱忍自重シ米国政府ヨリ何等相談アルヲ俟チ威厳アル友好妥協ノ精神ヲ以テ之ニ考量ヲ加フルノ方針ニ出ツルコトガ最善ノ策ナルヘク若シ万ニモ米国政府当局ニシテ終局ノ場合何等道義的責務ヲ感ズルノ実ヲ示サズ單ニ議會ノ決定ナレバ致シ方ナシト謂フガ如キ態度ニ出デタル場合ハ我方トシテ徐ロニ之ニ處スルノ方策ヲ講ズルヨリ外ナカルヘシ

本邦対内關係其他ニ於テ我政府御苦心ノ存スル所ハ重々相察スルノ暇ナク問題ノ現場ニ於テ直感スル所ノ卑見ヲ率直ニ上申シ重ネテ貴大臣ノ御再考ヲ仰グハ當ニ本使ノ義務ナリト確信スル次第ニ有之申ス迄モナク此場合本使ニハ一身上ノ考慮等ハ毛頭無之又政府ノ御訓令ニ對シ寸毫タリトモ

敬意ヲ失セントスルガ如キ意思絶無ナルニ付何卒微衷夷諒察ノ上更ニ何分ノ御考量ヲ加ヘラレ結果折返シ御回訓ヲ仰グ

一三四 五月十四日

松井外務大臣ヨリ

在米國埴原大使宛(電報)

排日移民法問題解決ヘノ米国政府ノ考案大要  
問合セ方及ビ高等委員会設置等ノ提案ニ付キ  
再訓電ノ件

第二〇五号 極秘

貴電第三八三号ニ閲シ

我方トシテハ此際米国当局ノ誠意努力ニ全幅ノ信頼ヲ措クノ外ナキコトハ貴見ノ通ナル處當方ニ於テハ未タ本件ニ関シ米国当局ノ有スル具体案ハ勿論其採ラントスル大凡ノ方向ニ付テサヘモ新聞記事等ノ外何等情報ヲ有セス隨テ万一貴電ニ所謂最悪ノ場合ニ到着シタル際之ニ對スル準備ナキノミナラス若シ此儘ニ傍観シテ最悪ノ結果ニ達シタリトセバ外部ニ対シ唯當局ノ無策ヲ暴露スルノミニシテ殆ンド説明ノ致シ方サヘモ發見シ難キ次第ニ付其辯篤ト御諒知アリ度又米国當局ガ日本人ノ感情ヲ害セサル方法ニ依リ本問題

## 一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一三五

一七六

解決ノ為現ニ何等カノ考察ヲ有シ尽力ヲ為シツツアルコト  
ハ新聞等ニ依リ察知セラル處ナルニ付其ノ内容ヲ大体ニ

テモ帝国政府ノ含迄ニ内密承知致度旨ヲ申出ツルコトハ必

スシモ不穏当ニ非サルヘク又之ヲ以テ國務長官ヲ信頼セサ

ル意味ニ解セラル虞モナカルヘシト思考セラルルノミナ

ラス帝国政府ノ真意モ決シテ此際國務長官ノ口約ヲ求メ又

ハ其ノ言質ヲ捉ヘントスルモノニ非ザルニ付御承知ノ上貴

官ハ同長官ニ面会セラレ本件解決方ニ付同長官ノ有セラル

ル考案ノ大要ナリトモ問合セラレ御回電アリ度ク又往電

第一八七号及第一九八号ノ提案ハ決シテ帝国政府ノ確定案

トシテ此際先方ニ提議スルノ意味ニ非サリン処本邦側ニ於

テモ米國側ニ於テモ民間有志中ニ此種ノ提案ヲナスモノ尠

カラサル儀ニ付此ニ対シ米国当局ノ意見乃至感想ヲ求メン

トスル位ノ輕キ意味ニ於テ同案ニ言及スルコトハ何等差支

ナカルヘシト思考セラルニ付右國務長官ニ会談ノ際応答

ノ模様ニ微シ機會アラハ本件ニ付テモ同官ノ意向ヲ探ラレ

何分ノ儀併セテ回電アリ度シ

一三五

五月十六日(着)

在米國埴原大使ヨリ  
松井外務大臣宛(電報)

排日移民法問題ニ関スル極東部長ノ個人的見  
解報告及ビ我方ノ採ルベキ態度ニ付キ上申ノ件

## 第四二四号 極秘

貴電第二〇五号ニ閲シ

國務長官ハ十五日朝紐育ニ赴キ月曜頃ナラデハ帰華セサル

ヘシト謂ヒ「アンダーセクレタリー」ハ新任ニシテ未ダ本

問題ニ通ジ居ラズト察セラルニ付キ極東部長ニ面会シ本

使ハ極メテ個人的ニ且内密ニ長官ト懇談ヲ遂ゲムト希望シ

タルモ不在ナリトノコト故不取敢貴官ト同様ノ趣旨ニテ懇

談シタク尚以下自分ノ述べントスル所ハ之ニ依リ何等ノ

「サヂエスジョン」ヲ為サントスルモノニアラズ又何等ノ

言質ヲ得ントスル次第ニモアラザルニ付其点ハ誤解ナキ様

致シタシト冒頭シ自分ハ本問題ニ関シ從来長官ト屢次ノ会

見ニ依リ長官ガ克ク我政府ノ主張ヲ諒解サレ之ニ同情シ大

統領ト共ニ最善ノ努力ヲ試ミツツアルコトヲ信ズルガ故ニ

此上ハ姑ク默シテ忍耐シ居ルコトガ長官等ノ努力ニ最モ有

効ノ協力ヲ為ス所以ナルハシト思考シ居リ我政府ニ於テモ

大体同感ナルガ只我政府トシテハ自分ノ隨時報告シツツア

ル新聞報道等ニ依リ米国當局ニ於テ種々苦心努力シツツアルコトヲ想像シ得ルニ過ギズシテ米国當局ノ考案ガ果シテ如何ナルモノナルヤ又事態ハ果シテ如何ニ成り行クヤニ付見込ヲ付クルコト容易ナラズ而カモ國內ノ輿論ハ益々激昂セントスル形勢ナルニ顧ミ此際何等カ多少ナリトモ米国當局ノ努力ニ協力スヘキ手段アラバ之ヲ考慮シタシトノ希望切ナルモノアリ

而シテ例ヘバ彼ノ連合高等委員會設置案ノ如キハ如何アルヘキヤ等ト考量セラレツツアル次第ナリ之ヲ要スルニ我政府トシテハ此際米国當局ノ努力ニ全幅ノ信賴ヲ置カントスルト共ニ何等カ我方ニ於テ國務長官ノ行動ヲ援助スル等積極的協力ノ途アラバ之ヲ考慮シタク夫レニハ長官ノ有セラル考案ノ大要ナリトモ内密伺ヒ知ルコトヲ得バ幸ナリト謂フ次第ニテ米国當局ノ努力ニ対シ我方ヨリ進デ何等ノ「サヂエスジョン」ヲ為サントスル次第ニアラザル旨ヲ述べタルニ

部長ハ長官ナレバ右ニ対シ相当踏ミ込ミテノ話アルヘキモ自分トシテハ責任ヲ以テ何等応答シ難キハ勿論又自分限りニ述べ得ルコトニモ極メテ限リアル次第ナルガ唯貴大使一

# 一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一三六

一七八

早ク面会シタキニ付其儀可然取計ヒアリタキ旨ヲ依頼シテ別レタリ

尚重ネテ申進ムル迄モナキ儀ナガラ此際我方トシテハ能フ限リ隠忍自重ノ態度ヲ持シ先方ガ専ラ自家ノ責任ヲ以テ為スヘキ最後ノ決定ノ前ニ先方ヲシテ我方ニ困難ナル相談ヲ持チ掛け來ラシムル様ノ機会ヲ与ヘサル様注意スルコトハ極メテ肝要ノ儀ナリト思考ス而シテ往電第三八三号最惡ノ場合ニ處スル対策ハ万一一ノ為メ今ヨリ篤ト御攻究置キ相成ルコトハ最モ必要ナルヘシト思考ス

一三六 五月二十四日(着) 在米國埴原大使(ヨリ)  
松井外務大臣宛(電報)

ヒューズ國務長官ヨリ排日移民法案ハ署名裁  
可サルル旨内報及ビシャーマン博士ヲ新駐日

大使ニ内定方通報ノ件

第四四四号 至急極秘

五月二十三日國務長官ノ求メニ依リ往訪シタルニ長官内話ノ要領左ノ通

長官ハ先ズ非公式ニ予メ内報スル次第ナリト冒頭シ移民法案中ノ所謂排斥条項ニ反対セル自分(長官)ノ主張ハ貴官

ノニ非ズ従テ該法案ノ成立ヲ以テ米国政府又ハ国民ノ日本ニ對スル非友誼感情ノ發露ト見做サザラム事ヲ切望ス議会ノ大勢ハ大統領ト雖如何トモ為シ難ク又議会ガ該条項ノ制定ヲ極力主張スルハ議会ノ多數ガ日本ニ對シ非友誼的感情ヲ抱キテノ事ニ非ズ専ラ議会ノ立法権ヲ「アサート」セントスル一念ニ過ギズ

大統領及自分ハ本問題ニ對スル日本政府ノ自制的態度及協力的精神ノ存スル所ヲ反覆懇説シ議会側ノ反省ヲ求ムルコトニ百方努力シタルモ目下議会ノ空氣ハ右ノ一念ニ凝リテ動カズ大統領モ遂ニ該法案ヲ裁可スルヨリ外余地ナキニ立至レル次第ナリ就テハ予メ貴官ニ右ノ次第ヲ内報シ日本政府ニ於テ事ノ已ムヘカラサル次第ヲ諒解セラルル様尽力ヲ希望スル次第ナリ尚此機會ニ於テ同様内密ニ貴官ノ承知ニ入レ置キタキハ「ウツヅ」大使ノ後任トシテ現在支那公使「シャーマン」博士ヲ任命スルコトニ内定シ目下日本政府ノ「アグレマン」ヲ求ムル手続中ナルコトナリ大統領ハ自分ト同様其日本ニ對シテ有スル誠切ナル好意ヲ表彰スルニ足ル人物ヲ挙ケントスル趣旨ヨリ自分ノ推薦ニ基キ米国内地ニ於テ閱歴声望共ニ高ク且日本ニ對シ真実ノ好感情ヲ有

(本使)ノ熟知スル通ナルガ右ハ大統領ニ於テモ熱心ニ同意セラレ議会ノ反省ヲ求ムル為有ラユル尽力ヲ試ミタルモ

不幸ニシテ其ノ甲斐ナク大統領ハ遂ニ該法案ヲ裁可スルノ已ム無キ立場ニ至レリ右ハ決シテ大統領ノ日本ニ對スル友好ノ情切ナラザルガ為ニ非ラズシテ専ラ左ノ理由ニ依ルモノナリ即チ現行「クオータ」法ハ六月三十日ヲ以テ失効スルニ付国民ハ之ニ代ルベキ更ニ嚴重ナル移民制限法ノ制定ヲ要求シ居リ右緊急ノ必要ハ政府当局モ篤ト之ヲ認メ居ル

次第ナルガ不幸ニシテ該法案中ニ所謂排斥条項存在スルヲ以テ政府ハ右条項ニ極力反対シタルモ遂ニ議会ノ反省ヲ得ル能ハズ若シ之ガ排斥ノミヲ目的トル独立法案ナレバ大

統領ニ於テ之ヲ拒否スベキハ問題ニ非ザルモ一般的移民法案中ノ一条項ニ過ギザルガ故ニ右条項ヲ拒否セントセバ該

法案全部ヲ拒否スルヨリ外ニ途ナク而モ議会ノ情勢ヲ篤ト研究スルニ仮令拒否シタリトテ直ニ法定ノ多数ヲ以テ「ヲ

バーライド」セラルベキハ疑ヒ無キノミナラズ為ニ極メテ忌ハシキ激烈ノ論議ヲ議会内外ニ誘致シ彼我國民ノ感情ヲ益々刺戟スルノ危険大ナリ極端ナル少數者ヲ除キ米国民全

体トシテハ決シテ日本ニ對シ何等非友誼的感情ヲ有スルモ

シ又當面ノ排斥条項問題ニ付テモ自分ト全然所見ヲ一ニシ且極東方面ノ事情ニ通シ日本ノ朝野ニモ能ク知ラレ居リ併モ速ニ赴任シ得ル同博士ヲ任命スルコトニ内定セル次第ナリ「ウツヅ」大使ノ辞任ハ甚々遺憾ナルモ右ハ既ニ昨冬同大使帰國ノ折家事上ノ理由ニテ辞任ヲ申出テタルヲ目下大切ノ時期ナレハトテ暫ク留任ヲ勧説シ大使モ之ヲ諒トシ暫時ノ約束ニテ帰任シタル次第ナルカ最近老母両回迄モ発病シ此上勤続ヲ許シ難キ事情アリトノコトニテ切ニ辞意ヲ表シ来レルニ付目下ノ問題トハ全ク何等ノ關係ナシニ之ヲ聴許シタルモノニシテ其代ハリ速ニ適當ノ後任ヲ任命シ「ウツヅ」大使ノ辞任ニ閑シ何等カ當面ノ問題ニ關係アリト云フカ如キ誤解ヨリ生シ得ヘキ日米外交關係ニ扞格ヲ生シツツアリト云フカ如キ世間ノ疑惧ヲ一掃セムト努メタル次第ナリ尚「ウツヅ」大使ニ對シ表彰セラレタル日本朝野ノ熱心ナル好意ハ米国政府ノ深ク感謝スル所ナリ云々

依テ本使ハ長官ノ懇篤ナル内話振り及其内ニ表白セラレタル友好的精神ニ對シ不取敢謝意ヲ表シタル後右内話ノ次第ハ直ニ本国政府ニ電報シ能フ限り事態ヲ了解セシムル様尽カスベキモ暫ク自分ニ長官ト同様非公式ニ且腹藏ナク所感

# 一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一三七

一八〇

ヲ吐露スルノ自由ヲ与ヘラレ度シト冒頭シ長官及大統領ガ本問題ノ為ニ百方努力セラレタル次第ハ本使ノ自信シ且本国政府ノ多トスペキ処ナルハ疑ハザルモ右大統領ノ処決ガ愈々公表セラル場合日本国民ガ如何ニ深甚ノ失望ヲ以テ之ヲ迎ベキカハ想像ニ余リアリ其ノ結果我国民ノ感情ハ相当激烈ニ暴露セラルニ至ルベク両國々交ノ為実ニ遺憾ニ堪ヘズ自分ハ長官及大統領ニ於テ其最善ト認ムル処ヲ尽サレタルモノト信ズルガ故ニ此際何等他ニ申述ズベキ事ナキモ右遺憾ノ念ハ抑ヘ難シト述ベタルニ長官ハ日本政府ノ困難ナル立場ハ了解スルモ米国政府當局ノ本旨及其苦心ノ存スル處ハ日本政府ニ於テモ篤ト了解セラレン事ヲ希望ス又自分トシテハ本問題ニ付始終日本政府ノ極メテ友好的ナル態度及貴大使ノ熱心ニシテ理解アル協力ニ対シ深ク感謝スルモノナリト云ヘリ

尚本使ハ If I am not asking questions ト冒頭シ大統領ハ該法案ニ署名セラルベキヤ又ハ新聞紙上ニ伝ヘラルルガ如ク署名無シニ効力ヲ發生セシムルノ途ニ出ズベキヤ又何レニスルモ何等カ声明書ニテモ同時ニ発表セラルル考案ナリヤト問ヒタルニ長官ハ既ニ該法案ヲ成立セシムルノ已ム

ヲ得ザルヲ認メタル以上署名ヲ拒ムガ如キハ意味ヲ為サズルベク又署名ト同時ニ何等声明書ヲ發スルヤ否ヤハ自分ノ承知セザル処ナルモ声明書ヲ發スル事ニ依リ何等カ事態ヲ緩和シ得ベキ成算アラバ兎ニ角然ラザル限りハ發スル事無カルベキヤニ思考セラルト云ヘリ

本使ハ更ニ大統領ノ処決ハ何時頃發表セラルベキヤヲ問ヒタルニ長官ハ其ノ時日ハ確知セザルモ不日發表セラルベク或ハ明日中ニモ發表セラルルヤモ知レズ何レニシテモ自分トシテ予メ貴官ニ内報スルノ義務ヲ感ジタル次第ナリ尚申迄モ無キ儀ナガラ發表迄ハ極秘ニ付セラレ度シト云ヘリ右不取敢電報ス

一三七 五月二十六日 松井外務大臣ヨリ

在米国埴原大使宛(電報)

移民法案ニ大統領署名ノ場合、同法中ノ排日

条項ニ反対ナル趣旨ノ声明等ヲ求ムベク申入

レ方訓電ノ件

第二三一号 至急極秘

貴電第四四四号末段ニ関シ

日本ノ有識者及国民ニ於テハ大統領カ今日マテ採リタル公

正ナル態度ニ鑑ミ今尚大統領カ排斥条項ヲ含ム同法案ヲ否認スルコトアリ得ヘキヲ期待シ居ルモノニシテ随テ仮令否認權行使カ「オーバーライド」セラルル場合ニ於テモ我国

輿論ノ激發ヲ緩和スルノ効果アル次第ナリ右ノ点ハ暫ク別トシ此際若シ大統領ニ於テ四困ノ情勢上署名セラルルノ止ムナキニ至ル場合ニ於テモ之ト同時ニ排斥条項ニハ反対ナリトノ意味ヲ「メッセージ」又ハ「ステートメント」其ノ他相當嚴肅ナル形式ニテ声明セラルルコトハ我國民的感情ヲ緩和スルニ多大ノ効果アルヘキハ明瞭ナリ

就テハ貴官ハ直チニ國務長官ニ面会ヲ求メラレ右ノ趣ヲ然ルヘク申入レ署名ノ場合ニハ之ト共ニ前記ノ如キ方法ニ出テセシムコトニ最善ノ努力ヲ尽サレ度、將又帝國政府トシテハ不幸ニシテ同案愈成立ノ暁ハ帝國政府ニ対シ抗議ヲ提出スル筈ナルヲ以テ單ニ右緩和手段ニヨリ政府及國民力満足スルモノナリトノ印象ヲ与ヘラレサル様御注意相成度シ

尚貴官ハ右會見ノ際日本ハ排日條項ノ成立ニ対シテハ飽ク迄不満足ニシテ政府並民間有力者ニ於テ目下只管隱忍自重民論ノ鎮靜ニ努力シ居ルモ右ハ将来何等カノ方法ニヨリテ

ガ大統領ニ於テハ既ニ移民法案ニ署名シ同時ニ声明書公表済トノコトナル処果シテ然リトセバ自分ハ未ダ右声明書ヲ入手セザルモ最早右訓令ヲ執行スルモ要ナカルベキヲ惧ルル次第ナルガ大切ノ場合ナレバ兎ニ角内密且友好的精神ヲ

## 一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一三八

一八二

以テ之ヲ長官ノ承知ニ容レ置キタシト冒頭シ右貴電ノ御主旨ヲ適当ニ口述シタルニ長官ハ之ヲ默聽シタル後大統領声明書写ヲ示シ其一読ヲ本使ニ求メ更ニ語ヲ繼ギ大統領ノ日本ニ対スル友好尊敬ノ念ニハ何等變化無ク若シ所謂排斥条項ガ独立法案ナリセバ之ヲ拒否スルニ躊躇セザルベキハ勿論ナルモ先日貴官ニ内話シ又右声明書中ニモ述べアルガ如キ事情ニ依リ該法案ニ署名スルノ已ヲ得ザルニ立至リタルモノニシテ此間ノ苦心ヲ日本国民ニ於テ諒解センコトヲ希望スルガ故ニ恰モ日本政府ノ考ヘ付カレタルト同様ノ主旨ニテ右声明書ヲ公表シタル次第ニ付日本政府ノ諒解アラムコトヲ希望ストノ意味ヲ述べ終リタル上頗ル沈痛ノ辞色ニテ自分ハ今朝「ウッズ」大使ヨリ極メテ disturbing newsヲ受取レリ右ハ自分（長官）限りノ含ミ迄ナル極秘電報ナルガ如何ニモ了解シ兼憂慮ニ堪ヘザルニ付貴官（本使）ニ内話シ何等カ思ヒ当ル節ニテモアレバ内密ニ打明ラレンコトヲ希望スル次第ナリトテ要領左ノ通述ベタリ  
多分先週金曜日カ土曜日ノ晚「ウッズ」大使ハ松井外務大臣ノ招宴ニ赴ケル際「シャーマン」博士ノ「アグレマン」ヲ求ムヘキ電訓ニ接シタルニ付何レ明日公文ニテ照会スヘ

能ハストセハ駐日米国大使ノポストニ間隔ヲ生シ種々ノ不幸ナル疑惧臆測ヲ誘致シ兩国民ノ感情ヲ益々刺戟シ誤解ヲ繁カラシムル惧大ナルヲ思ヒ憂慮ニ堪ヘサル次第ナリ云々依テ本使ハ「シャーマン」博士任命ニ関シ過日長官ヨリ内話ノ次第ハ本国政府ニ電報シ置キタルモ右ニ関シ自分ハ本国政府ヨリ未タ何等訓令又ハ報道ニ接シ居ラサルニ付自分トシテハ何等推測ノ資料ヲ有セス又「シャーマン」博士ニ対シ日本政府ニ於テ何等異議アルヘキ理由モ思ヒ当ラサル次第ナルカ若シ御希望トアラハ前記長官内話ノ次第ハ重テ本國政府ニ電報シ右ニ閲シ我政府ノ意向ノ果シテ那辺ニ存スルヤヲ試ミニ問合スコトヲ辞セスト述ヘタルニ長官ハ右様取扱ハルレハ甚タ幸ナリ但シ其ノ場合米国政府ニ於テ聊カタリトモ日本政府ノ所見又ハ意向ニ対シ鄭重ナル敬意ヲ払フコトヲ吝マントスルモノナルカ如キ感想ヲ与ヘラレサル様特ニ注意ヲ煩シタシト述ヘタリ  
此際東京二十分米国政府当局ノ真意ヲ伝フルト共ニ我政府及国民ノ感情ヲ適切有効ニ報告シ得ルニ足ル米国大使ヲ欠クコトハ頗ル憂慮スヘキコトナラスヤ特ニ米国政府ニ於テハ場合ニ極メテ大切ナルヲ思ヒ速ニ適當ノ大使ヲ派遣シ大

統領ノ意ニ反スル米国議会ノ行動ニ対シ適當ノ説明ヲ加ヘ以テ我国民感情ノ緩和ニ努力セシメムトスル希望切ナルハ看取スルニ難カラサルモノアルニ當リ我方ニ於テ重大ナル理由存セサル限り其希望ニ協力ヲ吝マントスルカ如キ感覺ヲ与ヘ得ル態度ニ出テラルコトハ善後ノ交渉談判ニモ至大ノ不利ヲ生スヘキ懸念ナキヤ憂慮ニ堪ヘス兎ニ角御差支ナキ限リ國務長官ニ対スル回答振至急御電訓ヲ請フ

一三九 五月二十八日(着) 在米国埴原大使ヨリ  
対米抗議文ノ形式内容及ビ提出時期等ニ付キ  
稟申ノ件

第四五五号 至急極秘

貴電第二三一号中段「同案成立ノ暁ハ米国政府ニ抗議ヲ提出スル筈ナルヲ以テ」云々ノ点ニ關シ右抗議ノ形式内容ガ如何ナルモノナルヘキヤハ濫リニ本使ノ推測ヲ許ササルコト勿論ノ儀ナル所御承知ノ通り下大統領ト議会トハ諸種ノ重要問題ニ付意見ヲ異ニシ居リ特ニ選挙戦ヲ目前ニ控ヘ民主党ハ謂フニ及バズ共和党上下両院議員就中同党上院議員ノ領袖中ニスラ党略上ノ見地ヨリカ動モスレバ大統領ニ

一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一三九

一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一四〇

一八四

橋衝カントスルモノ多ク而シテ排日条項問題ニ付テハ議員中民主共和両派ヲ問ハズ目下意地ニナリ議会立法権独立ノ仮名ノ下ニ其早計的行動ノ非ヲ掩ハムトスル一念ニ因ハレ到底差当リ反省ノ雅量ヲ示サントスル氣配ナキニ付テハ此際我抗議ノ形式内容ノ如何ハ将来ノ両国交渉（其實際的進行ハ大統領選挙終了後ナラデハ到底期シ難カルベシ）ニ至大ノ影響ヲ及スヘキハ疑ナキニ付申ス迄モナキ儀ナガラ徒ニ事態ヲ更ニ悪化セシムルコトナキ様篤ト御攻究ヲ希望致シタク相成ルヘクバ大統領ノ移民法案署名及声明書ニ対スル當国輿論ノ反響ヲ見極ハメタル後又叶フコトナレバ傾聽ニ值スル各方面ノ意見ヲモ然ルヘク探聞シタル上不日上申セントスル本使ノ卑見ヲモ御参照アリタル上御決定アランコトヲ希望ス不取敢

一四〇 五月二十八日 在シアトル大橋領事ヨリ

廣田欧米局長宛

米国ノ排日立法ヲ機ニ我国外交ノ根本方針樹立方意見具申ノ件

五月二十八日

シャトル

領事 大橋 忠一

拝啓 今次排日立法ハ米国トシテハ重大ナル過誤タルト共ニ日本ニ取りテハ天与ノ好機会ト存候若シ日本ニシテ此機会ヲ取り逃サハ日本及日本民族ハ愈々滅乏ノ外道無之ト存候新聞所報ニ依レハ最近日露交渉モ意外ニ速力ニ進捗シ今分ニテハ近ク調印ヲ見ルヘク日支両國亦多数ノ懸案ニ付意見漸ク接近シ居ルヤニ候處右ニシテ幾分今次排日条項ニ影響セラレタル處アラムカ小生ハ日本ノ将来進ムヘキ道カ暗示サレタルカ如ク思ハレテ欣喜ノ至ニ御座候日本カ欧洲大戰以来次第ニ歩フ失ヒ米国排日家ヲシテ同封当地「ハースト」新聞論説ノ如ク考ヘシムル迄ニ衰ヘタルハ日露戦争終結ト共ニ死馬同様トナリタル日英同盟ニ取リスカリ所謂追従的外交ニ依リ成功セムトシタルカ為メ又極東ニ於ケル小利害ニ拘泥シテ虐ケラレタル亞細亞民族ニ対シ眞ノ人類愛ヲ灑キ得サリシカ為メト存候

此際吾民族ハ「アングロサクソン」ノ尻馬ニ乗リテ其ノ糟粕ヲ嘗ムル態度ヲ棄テ男ラシク亞細亞民族ノ解放者タル自覚ヲ起シ誠心誠意人道ノ立場ヨリ奮闘努力スヘキモノト存候腹ニ一物ヲ藏シツツ日支親善ヲ説クモ何ノ効果カ之アラ

ン何物ヲモナケ出シテ亞細亞ノ為メニ犠牲ニナル決心ヲスルコト必要ト存候夫レカ為メニハ露西亞トモ仏蘭西トモ結ハサルヘカラス独逸トモ握手セサルヘカラス要ハ米国ヲ正

面ノ敵トスルヲ避ケ英國ヲ世界ノ孤立トスルニアリ而シテ是カ唯一ノ岌々乎タル日本ノ國際的地位ヲ救フ乾坤一擲的方法タルニ於テ吾等ハ憤起セサラント欲スルモ得サル次第ニ候 vital interest ニ於テ多ク衝突スルコトナキ米国ヲ正面ノ敵トスルノ愚ハ明ナリト雖今次排日案ニ対シテハ極力抗議セサルヘカラス而カモ其ノ抗議ハ只單ニ條約違反トカ何トカ下ラヌ「テクニーカ」的根拠ニ基カス人種的侮辱ヲ高調セラレ度キモノニ御座候

何トナラハ右抗議ハ米国ニ対シテハ何等實質的意味ヲ有ス

ルモノニ非ス目當テトスルハ米国以外ノ諸國就中亞細亞民族ニシテ以テ亞細亞民族結合ノ「トニック」タラシメントスルモノナレハナリ

貴下等ノ御賢慮ニ依リ此機ニ於テ帝国外交ノ根本方針ヲ建テラレ度キモノニ候 敬具

一四一 五月二十八日 松井外務大臣ヨリ

在米国埴原大使宛（電報）

一 四一 一 四一 一 四一

広田欧米局長殿 机下

大正十三年五月二十八日右閣議決定ヲ撰政宮殿下へ松井

大臣ヨリ上奏ス

一八五

一四二 五月二十八日 閣議決定

編註 第二三七号ノ誤り。同別電抗議文ハ後掲一四七号文書參照。

一九二四年米国移民法第十三条C項（差別の  
条項）ニ対スル「嚴肅ナル抗議」持続ヲ閣議

決定ノ件

大正十三年五月二十八日右閣議決定ヲ撰政宮殿下へ松井

## 一、米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一四二

一八六

一、日本政府ハ米国ニ於テ「千九百二十四年移民法」ト称スル法律ノ制定セラレタルノ報ニ接シ憂慮ニ堪ヘス本法中ノ差別的条項即第十三条〇項ハ帰化不能外国人ニ付他ノ種類ノ外国人ト区別シテ入国ノ禁止ヲ規定シ其ノ適用ハ日本人ヲ目的トスルノ意図ニ出テタルコト明白ナルヲ以テ日本政府ハ曩ニ米国議会ニ於ケル本法案ノ討議中機ヲ失セス該差別的条項ニ對スル米国政府ノ注意ヲ喚起シタリ然ルニ右日本政府ノ申入並大統領及國務卿ノ勧告ハ共ニ米国議会ノ無視スル所トナリ遂ニ同条項ハ米国成文法ノ一部ヲ成スニ至レリ

二、凡ソ國際間ノ差別待遇カ其形式又ハ事項ノ如何ヲ問ハス仮令純然タル経済上ノ理由ニ基ツク場合ニ於テモ正義公平ノ原則ニ背反スルコトハ敢テ言説ヲ要セス思フニ正義公平ノ原則ハ列国親交ノ根柢ナリ現今一般ニ承認セラレ米国ノ終始支持セル機會均等主義亦実ニ此ノ原則ニ基礎ヲ有ス殊ニ二人種ニ因ル差別待遇ハ不快ノ影響一層深カラサルヲ得ス千九百十二年米国政府ハ露國ニ於テ特殊人種ノ外国人力不公平ナル待遇ヲ受クルヤ之ニ對スル抗議トシテ千九百十一年十二月三十一日ノ下院ノ決議ニ從ヒ

米露通商條約ヲ廢棄セリ是レ米国政府自ラ人種ニ因ル差別待遇ニ對シ強ク不満ノ意ヲ示セルモノナリ然ルニ今ヤ米国新移民法ハ之ト同様ナル差別待遇ノ規定ヲ設ケタリ帰化法ニ關スル米国最高法院ノ解釈ニ顧ミルニ右移民法ハ外国人ニ對スル米国入國ノ拒否ヲ以テ個人ノ具備スル資格ノ適否ニ依ルコトナク入國請求者ノ屬スル人種ノ如何ニ依リテ決定セムトスルノ法則ヲ樹立セルコト疑フ容レス殊ニ曩ニ公表セラレタル千九百二十四年二月八日付下院移民帰化委員長宛國務長官ノ書翰中ニモ指摘セラレタルカ如ク日本人以外ノ亞細亞人種ハ從来ノ諸法律ニ依リテ入國ヲ禁止セラルモノナルヲ以テ前顯新移民法中ノ人種的區別ハ其ノ實質ニ於テ日本人ノ入國禁止ヲ目的トセルモノト思惟セラル

三、日本人ハ到底米国ノ生活及理想ニ同化スルモノニ非ストノ説ハ從來米国ニ於テ此ノ種ノ差別的措置ヲ弁護セム力為ニ屢々唱ヘラレタル所ナルモノ第一ニ外國系移民ニ対シ單ニ人生一代ノ短期間に内ニ新ナル環境ニ同化セムコトヲ期待スルカ如キハ難キヲ求ムルモノト謂ハサルヘカラス顧ルニ日本人カ多少米国へ移住スルニ至レルハ十九世

紀ノ末期数年以来ノ事ニシテ此ノ際米国ニ於テ各人種ノ同化力ニ付日本人ト帰化權ヲ有スル外國移民トヲ比較シテ断定的判断ヲ下スハ早計ニ失スルモノト思考ス

四、將又同化ノ實現ハ公正平等ナル待遇ノ温情アル雰囲氣

中ニ於テノミ之ヲ期スルコトヲ得ヘク約二十年間米国ノ若干諸州ニ於テ日本人力法律上並事實上蒙リ來レルカ如キ冷酷ナル差別待遇ノ下ニ於テハ同化力ノ自然的發達ノ阻害セラルヘキハ當然ナリ一社会自ラ或外國系分子ヲ爾余ノ分子ヨリ隔離シナカラ其ノ外國系分子カ該社會組織中ニ融合セサルヲ批難スルカ如キハ公平ノ所見ニ非サルヘシ從テ日本人ニ對スル非同化性ノ論斷ハ根本的ニ不正確ナルカ然ラサレハ少クモ時期尚早タルヲ免レス

五、翻テ日米間ニ於ケル通商條約ヲ考察スルニ千八百九十四年ノ旧條約第二条中ニハ左記ノ但書存セリ「但シ本条及前条ノ規定ハ兩締盟國ノ各方ニ於テ商業、労働者ノ移住、警察及公安ニ關シ現ニ行ハレ又ハ将来制定セラルヘキ法律勅令及規則ニハ何等ノ影響ヲ及ホスコトナシ」

千九百十一年条約改訂ノ際日本政府ノ要求ニ依リ新条約

ニ於テハ右但書ヲ削除シ入國、旅行及居住ノ自由ヲ保障セル通則ハ依然之ヲ存スルコトトナリ之ト同時ニ日本政府ハ條約ノ付属文書トシテ千九百十一年二月二十一日付ヲ以テ左記ノ宣言ヲ為セリ  
「本日日米通商航海條約ニ調印セムトスルニ當リ華盛頓駐劄日本國特命全權大使タル下名ハ本国政府ノ委任ヲ受ケ左ノ通宣言スルノ光榮ヲ有ス  
日本帝国政府ハ労働者ノ合衆國移住ニ關シ過去三年間实行シ來リタル制限及取締ヲ從來ト均シク有効ニ維持スルノ覺悟ナリ」

六、新条約ノ批准ヲ交換スルニ當リ國務長官代理ハ千九百十一年二月二十五日日本大使ニ通知スルニ「米国上院ニ於テハ該條約ハ千九百七年二月二十日裁可セラレタル外國人ノ合衆國移住取締法ト称スル法律ノ何レノ条項ヲモ廃止又ハ変更スルモノト認ムヘカラストノ了解ノ下ニ條約批准ニ對スル協賛ヲ與ヘ且此ノ了解ハ批准書ノ一部ヲ成スヘキコトヲ決議セル旨」ヲ以テシ且左ノ如ク付言セリ

## 一、米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一四二

ルルモノニシテ何レノ國ノ利益ノ為ニモ差別待遇ヲ設定セルモノニ非サルヲ以テ貴國政府ニ於テモ右了解ヲ批准書中ニ記載スルニ付別段ニ異議ナキモノト思惟ス」

日本國政府ハスクノ如ク米國政府カ日本人ニ對スル何等差別的ノ法律規定ナキコトヲ保障セルニ信賴シ前記ノ了解ヲ批准書中ニ記載スルコトニ同意シタル次第ナリ

七、叙上ノ交渉ニ際シ終始日本政府ノ念頭ヲ離レサリシ一  
点ハ移民ニ關スル合衆國ノ差別的立法ニ對シ本邦人ヲ擁護スルニ在リタルコトハ前述ノ歴史ニ照シ自ラ明白ナリ  
右日本ノ立場ハ米國政府ノ十分理解シ諒悉シタル所ニシテ此ノ点ハ現行条約ノ調印及批准交換ニ方リ常ニ考量中ニ加ヘラレタリ事情斯クノ如クナルヲ以テ千九百二十四年移民法第十三条(○)項ノ規定ト千九百十一年条約ノ規定トノ抵触ノ範囲ニ關スル専門的法理問題ノ提起ハ他日ノ機會ニ留保スルモ新立法カ右条約締結ノ根底タル精神並経緯ヲ全然無視セルモノナルコトハ茲ニ日本政府ノ指摘セムトスル所ナリ

八、次ニ所謂紳士協約ナルモノヲ考查スルニ同協約ハ一方ニ於テ日本移民ニ關シ米國政府ノ認メタル現実事態ノ須

一八八

要ニ副ハムカ為又他ノ一方ニ於テハ合衆國カ日本人民ノ正当ナル感情ヲ害スヘキ排斥法制定ノ必要ヲ見ルコトア

ルヘキヲ予防セムカ為按出セラレタルモノニシテ千九百八八年ヨリ実施セラレタルカ爾來著々其ノ効果ヲ發揮セリ

合衆國移民長官年報中ニ掲載セラレタル統計ニ徴スルニ千九百八年ヨリ千九百二十三年ニ至ル十五年間ニ米本国ニ入國ヲ許可セラレタル日本人ハ同國ヨリ出国シタル日本人ニ比シ數ニ於テ僅々八千六百八十一人ノ增加ヲ見タルニ過キス而モ右数字中ニハ労働移民ノミナラス商人学生及其ノ他ノ非労働者及非移民ヲモ包含シ此等ノ資格ヲ有スル者ノ員數カ両國間ニ於ケル商業的學問的並社會的關係ノ發達ト共ニ増加スヘキハ自然ノ理ナリ加之若シ斯クノ如キ少數ノ者スラモ合衆國ニ取リテ好マシカラストスルニ於テハ日本政府ハ移民ヲ更ニ制限スルノ目的ヲ以テ現存取極ヲ改訂スルノ意向アルコトヲ既ニ表示セリ然ルニ不幸ニモ日本人ニ對シテ差別待遇ヲ設クル新法律ノ規定ハ竟ニ日本國ニ於テ紳士協約ニ因ル責務ノ繼續承認ヲ不可能ナラシムルニ至レリ日米両國政府間ニ於テ長時日ニ亘リ反覆討議ノ末成立セル友好的協調ノ了解ハ今ヤ

往電第四四七号大統領ノ「ステートメント」ハ新聞記者ニ交付シ一般的ニ公表シタルモノニシテ「メッセイジ」ニ非ス

ス

ス

一四四 五月二十九日 在米國埴原大臣宛（電報）

### 対米抗議文提出方再訓令ノ件

第二三九号 至急

貴電第四四五号ニ閑シ

ノ性質シテ固ヨリ外交的交渉及解決ニ訴フルコトヲ得  
サルヘカラス仍テ日本政府ハ茲ニ千九百二十四年ノ移民法第十三条(C)項ニ包含セラルル差別的条項ニ對シ嚴肅ナル抗議ヲ持続シ之ヲ記録ニ留メ且米國政府ニ對シ差別待遇除去ノ為一切ノ適當ナル措置ヲ採ラレムコトヲ要請スルヲ以テ其ノ當然ノ責務ナリト思考ス

一四三 五月二十九日（着）  
在米國埴原大臣ヨリ  
松井外務大臣宛（電報）

### 大統領ステートメントノ形式ニ關スル件

貴電第二三五号ニ閑シ

第四六〇号

尚貴電第四六二号ニ閑シ右「カバリング、ノート」モアルコトナレハ往電第二三七号抗議文ハ「バラフレーズ」セス  
其儘提出セラレ度シ

一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一四三 一四四

一八九

一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一四五 一四六 一四七

一九〇

一四五 五月三十日(着) 在米国埴原大使ヨリ

松井外務大臣宛(電報)

対米抗議文提出説二対スル國務省側ノ反応二

関シ報告ノ件

第四七二号

日本抗議提出ノ説ハ東京通信ニ依リ多大ノ注意ヲ喚起シ特

ニ政府筋ニ於テハ其内容如何ニ關シ大ニ憂慮シ居ル事態ハ新聞報ニ依リ御承知ノ通ナルカ特ニ國務卿ハ各新聞記者ニ對シ事前ニ内容ヲ想像シテ彼是論評スル事ハ事態ヲ益々紛糾セシムモノナリトテ大ニ警告ヲ与ヘ居レルカ右抗議力

約違反論ヲ骨子トセルヤノ説東京ヨリ伝ハルヤ國務卿ハ

新聞記者ニ対シ此際若シ日本ニ於テ條約違反論ヲ根拠トシ

テ抗議ヲ提出セラルルカ如キ事アラハ遺憾ナカラ國務卿トシテハ同様條約上ノ法律的見地ヨリ米國ノ権利ヲ飽ク迄弁護スルノ立場ニ於テ抗争スルノ余儀ナキニ至ルヘキモ政策

上ノ見地ヨリノ抗議ナレハ大ニ考量ノ余地アリトノ意味ヲ暗示シ又特ニ國務省ノ「ウイルソン」(前駐日參事官)ハ

APヲ招キテ昨日新聞報ノ如キ日米條約解釈論及移民法ト

条約第一条トノ関係ヲ説明シ之ヲ各新聞ニ報道トシテ配布  
A Pヲ招キテ昨日新聞報ノ如キ日米條約解釈論及移民法ト

条約第一条トノ関係ヲ説明シ之ヲ各新聞ニ報道トシテ配布

第二五七号 至急

貴電第四七二号ニ閲シ

抗議書中條約ニ關スル部分ハ當方ニ於テ特ニ慎重熟慮ノ上決定シタルモノニシテ我方ニ於テハ主トシテ條約締結當時ノ處行ヲ明カニスルニ止メ此際條約ノ正文ニ關スル法律論ヲ為スコトハ特ニ之ヲ避ケタル次第ナリ

右御含迄

一四五 六月一日(着) 在米国埴原大使ヨリ

松井外務大臣宛(電報)

ヒューズ國務長官ニ手交ノ件

付記一 五月三十一日付日本政府抗議公文

二 右和訳文

第四八二号

往電第四八一號ニ閲シ五月三十一日國務長官ニ面会シ本使

ハ本国政府ノ訓令ニ依リ本件公文ヲ貴官ニ手交スル次第ナルカ右ハ貴官ノ友好的考慮ヲ得ン事ヲ希望ス同時ニ予ハ我政府ニ於テハ大統領及國務長官ノ本件ニ關スル多大ノ尽力ヲ充分「アップリシェート」シ居ル旨ヲ貴官ニ申入ルヘキ訓令ヲ有シ居レリ又本件覺書ノ本文ハ之ヲ貴官ニ手交シタル旨本使ヨリノ電報ニ接シ次第東京ニ於テ之ヲ公表スル筈ナル旨ヲ述ヘタルニ長官ハ首肯シツツ右公文ヲ一読シタル上大要左ノ通述ベタリ

自分ハ右公文ニ閲シ今直ニ何等「コメント」スル事ハ避

クヘキモ間思付キタル一、二ノ点ヲ極メテ非公式ニ

内話スレハ右覺書中現行日米條約締結ノ由来ニ言及シ居ル

民ノ制限取締リニ關スル許可固有ノ権利ハ完全ニ留保シ置

ケ了解ノ下ニ右商議ニ応ジタル次第ナルカ此点ニ關シテハ抗議書ハ數日(脱)東京ヨリノ新聞電報ニ伝ヘラレタル処

(条約違反論ノ事ヲ指セルナラン)トハ異ナルモノアルカ如シトテ稍安心シタルモノノ如キ面持チヲ示シ更ニ語ヲ継

ギ「ジスクリミネーション」ノ問題ハ其ノ原ヲ尋ヌレハ米國伝來ニ帰化ニ存スルコトニテ移民法ハ寧ロ其ノ結果ナリ

一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一四五

セシメタルモノノ由伝聞ス何等御参考迄

一四六 五月三十一日 在米国埴原大使ヨリ

松井外務大臣宛(電報)

対米抗議文中ノ條約ニ關スル部分ノ件

# 1 米國ニ於ケル排日移民法成立問題 一四七

一九二一

日本異ナルナキ熱誠ヲ以テ之ニ注カルグキハ自分ノ確信スル處ナリ右ノ次第ハ日本政府及國民ノ了解アラム事ヲ希望ス依テ本使ハ右ノ次第ハ我政府及國民ニ於テモ充分諒トスル處ナリト信ス我政府ヲ始メ各政党ノ領袖等カ排斥条項制定ニ依リ惹起セラレタル難局ニ当面シナカラ尚好ク協力一

致國民ニ対シ自制自重ヲ慾憑シツツアルハ之彼等ガ米国民ノ真意我ニ快カラサラントスルニ非ザルヲ知リ他日健全ナル反動ニ依リ此ノ不幸ナル事態ノ改善セラルベキ事ニ望ム

ヲ嘱スルカ故ナリ尤モ此際我國民ノ一部ニハ或ヘ何等激越ノ言動ニ出スルモノ無キヲ保セスト雖我國民ノ失望如何ニ深甚ナルカラ思ヘハ寧ロ自然ノ感情ノ發露ト見做スベキモノナリト思考ストノ意味ヲ述ヘタルニ長官ハ頻ニ首肯シ居リタリ尚右公文ニ対シテハ何レ其内米國政府ヨリ何分ノ回答アル事ト思考スルモ両党トモ大統領予選会ノ日前ニ控く朝野ノ注意政争ニ集中シ殆ニ他ヲ顧ミルノ余裕無キ此際我方ヨリ督促ベルコトハ之ヲ避ケ先方ニ充分考慮ノ時ヲ与ヘル事得策ナリト思考ス将又往電第四八一号ノ通長官ヘ本件抗議覺書本文ヲ東京ニテ公表ストノ事ナレバ当地リトヤ回時ニ公表セサレバ自分カ殊更ニ保留シ居リタルカ如キ感覺

(七 記一)  
一四七 日本政府抗議公文

Japanese Embassy,  
Washington, May 31, 1924.

Sir,

In pursuance of instructions from my Government, I have the honor to present to you herewith a memorandum enunciating the position of Japan on the subject of the discriminatory provisions against Japanese which are embodied in Section 13 (c) of the Immigration Act of 1924, approved May 26, 1924.

I am instructed further to express the confidence that this communication will be received by the American Government in the same spirit of friendliness and candor in which it is made.

Accept, Sir, the renewed assurances of my highest consideration.

(Signed) Masanao Hanihara

Honorable Charles E. Hughes,  
Secretary of State.

## MEMORANDUM

The Japanese Government are deeply concerned by the enactment in the United States of an act entitled the "Immigration Act of 1924." While the measure was under discussion in Congress they took the earliest opportunity to invite the attention of the American Government to a discriminatory clause embodied in the Act, namely Section 13 (c), which provides for the exclusion of aliens ineligible to citizenship, in contradistinction to other classes of aliens, and which is manifestly intended to apply to Japanese. Neither the representations of the Japanese Government, nor the recommendations of the President and of the Secretary of State were heeded by Congress, and the clause in question has now been

written into the statutes of the United States.

It is, perhaps, needless to state that international discriminations in any form and on any subject, even if based on purely economic reasons, are opposed to the principles of justice and fairness upon which the friendly intercourse between nations must, in its final analysis, depend. To these very principles the doctrine of equal opportunity now widely recognized, with the unfailing support of the United States, owes its being. Still more unwelcome are discriminations based on race. The strong condemnation of such practice evidently inspired the American Government in 1912 in denouncing the commercial treaty between the United States and Russia, pursuant to the resolution of the House of Representatives of December 13, 1911, as a protest against the unfair and unequal treatment of aliens of a particular race in Russia. Yet discrimination of a similar character is expressed by the new statute of the

ア与ヘ此際面白カラサルニ付貴官ヨリ東京へ電報ニ要スル時間ヲ見越シ明日曜ノ朝刊ニ当地ニトモ公表方同意アリタシトノ事ニ付別ニ差支く無キ儀ト思考シ同意シ置ケリ

United States. The Immigration Act of 1924, considered in the light of the Supreme Court's interpretation of the naturalization laws, clearly establishes the rule that the admissibility of aliens to the United States rests, not upon individual merits or qualifications, but upon the division of race to which applicants belong. In particular, it appears that such racial distinction in the Act is directed essentially against Japanese, since persons of other Asiatic races are excluded under separate enactments of prior dates, as was pointed out in the published letter of the Secretary of State of February 8, 1924, to the Chairman of the Committee on Immigration and Naturalization of the House of Representatives.

It has been repeatedly asserted in defence of these discriminatory measures in the United States that persons of the Japanese race are not assimilable to American life and ideals. It will, however, be observed, in the first place, that few immigrants of

munity, while that community chooses to keep them apart from the rest of its membership. For these reasons the assertion of Japanese non-assimilability seems at least premature, if not fundamentally unjust.

Turning to the survey of commercial treaties between Japan and the United States, Article II of the Treaty of 1894 contained a clause to the following effect:—

"It is, however, understood that the stipulations contained in this and the preceding Article do not in any way affect the laws, ordinances and regulations with regard to trade, the immigration of laborers, police and public security, which are in force or may hereafter be enacted in either of the two countries."

When the Treaty was revised in 1911, this provisory clause was deleted from the new Treaty at the request of the Japanese Government, retaining

a foreign stock may well be expected to assimilate themselves to their new surroundings within a single generation. The history of Japanese immigration to the United States in any appreciable number dated but from the last few years of the Nineteenth Century. The period of time is too short to permit of any conclusive judgment being passed upon the racial capabilities of those immigrants in the matter of assimilation, as compared with alien settlers of the races classed as eligible to American citizenship.

It should further be remarked that the process of assimilation can thrive only in a genial atmosphere of just and equitable treatment. Its natural growth is bound to be hampered under such a pressure of invidious discriminations as that to which Japanese residents in some States of the American Union have been subjected, both at law and in practice, for nearly twenty years. It seems hardly fair to complain of the failure of foreign elements to merge in a com-

the general rule which assures the liberty of entry, travel, and residence; and, at the same time, the Japanese Government made the following declaration, dated February 21, 1911, which is attached to the Treaty:—

"In proceeding this day to the signature of the Treaty of Commerce and Navigation between Japan and the United States, the undersigned, Japanese Ambassador in Washington, duly authorized by his Government, has the honor to declare that the Imperial Japanese Government are fully prepared to maintain with equal effectiveness the limitation and control which they have for the past three years exercised in regulation of the emigration of laborers to the United States."

In proceeding to the exchange of ratifications of the revised Treaty, the Acting Secretary of State communicated to the Japanese Ambassador on February 25, 1911, that the advice and consent of the

Senate to the ratification of the Treaty "is given with the understanding, which is to be made part of the instrument of ratification, that the Treaty shall not be deemed to repeal or affect any of the provisions of the Act of Congress entitled 'An Act to regulate Immigration of Aliens into the United States,' approved February 20, 1907." The Acting Secretary of State then added:—

"Inasmuch as this Act applies to the immigration of aliens into the United States from all countries and makes no discrimination in favor of any country, it is not perceived that your Government will have any objection to the understanding being recorded in the instrument of ratification."

Relying upon the assurance thus given by the American Government of the absence of any statutory discrimination against Japanese, the Japanese Government consented to have the above quoted understanding recorded in the instrument of ratifi-

With regard to the so-called "Gentlemen's Agreement," it will be recalled that it was designed, on the one hand, to meet the actual requirements of the situation as perceived by the American Government, concerning Japanese immigration, and, on the other, to provide against the possible demand in the United States for a statutory exclusion which would offend the just susceptibilities of the Japanese people. The arrangement came into force in 1908. Its efficiency has been proved in fact. The figures given in the Annual Report of the United States Commissioner-General of Immigration authoritatively show that during the fifteen years from 1908 to 1923, the net excess, in number, of Japanese admitted to Continental United States, over those who departed was no more than 8681 all told,—including not only immigrants of the laboring class, but also merchants, students, and other non-laborers and non-immigrants, the number of whom naturally increased with the

cation.

The foregoing history will show that throughout these negotiations, one of the chief preoccupations of the Japanese Government was to protect their nationals from discriminatory immigration legislation in the United States. That position of Japan was fully understood and appreciated by the American Government, and it was with these considerations in view that the existing Treaty was signed and the exchange of its ratifications effected. In this situation, while reserving for another occasion the presentation of the question of legal technicality, whether and how far the provisions of Section 13 (c) of the Immigration Act of 1924 are inconsistent with the terms of the Treaty of 1911, the Japanese Government desire now to point out that the new legislation is in entire disregard of the spirit and circumstances that underlie the conclusion of the Treaty.

growth of commercial, intellectual, and social relations between the two countries. If even so limited a number should in any way be found embarrassing to the United States, the Japanese Government have already manifested their readiness to revise the existing arrangement with a view to further limitation of emigration. Unfortunately, however, the sweeping provisions of the new Act, clearly indicative of discrimination against Japanese, have made it impossible for Japan to continue the undertakings assumed under the Gentlemen's Agreement. An understanding of friendly cooperation reached after long and comprehensive discussions between the Japanese and American Governments has thus been abruptly overthrown by legislative action on the part of the United States. The patient, loyal, and scrupulous observance by Japan for more than sixteen years, of these self-denying regulations, in the interest of good relations between the two countries,

now seems to have been wasted.

It is not denied that, fundamentally speaking, it lies within the inherent sovereign power of each state to limit and control immigration to its own domains. But when, in the exercise of such right, an evident injustice is done to a foreign nation in disregard of its proper self-respect, of international understandings or of ordinary rules of comity, the question must necessarily assume an aspect which justifies diplomatic discussion and adjustment. Accordingly, the Japanese Government consider it their duty to maintain and to place on record their solemn protest against the discriminatory clause in Section 13 (c) of the Immigration Act of 1924, and to request the American Government to take all possible and suitable measures for the removal of such discrimination.

(右記)  
(翻訳)  
右和訳文

人ヲ目的トスルノ意図ニ由テタルコト明白ナルヲ以テ日本政府ハ曩ニ米國議会ニ於ケル本法案ノ討議中機ヲ失セス該差別的条項ニ対スル米國政府ノ注意ヲ喚起シタリ然ルニ右日本政府ノ申入並大統領及國務卿ノ勸告ハ共ニ米國議会ノ無視スル所トナリ遂ニ同条項ハ米國成文法ノ一部ヲ成スニ至レリ

凡ソ國際間ノ差別待遇カ其ノ形式又ハ事項ノ如何ヲ問ハス仮令純然タル経済上ノ理由ニ基ク場合ニ於テモ正義公平ノ原則ニ背反スルコトハ敢テ言説ヲ要セス惟フニ正義公平ノ原則ハ列國親交ノ根柢ナリ現今一般ニ承認セラレ米國ノ終始支持セル機會均等主義亦実ニ此原則ニ基礎ヲ有ス殊ニ二人種ニ因ル差別待遇ハ不快ノ念ヲ一層深カラシム千九百十二年米國政府ハ露國ニ於テ特殊人種ノ外國人力不公平ナル待遇ヲ受クルヤ之ニ対スル抗議トシテ千九百十一年十二月十三日ノ下院ノ決議ニ從ヒ露通商條約ヲ廢棄セリ是レ米國政府自ラ人種ニ因ル差別待遇ニ対シ強ク不満ノ意ヲ示セルモノナリ然ルニ今ヤ米國新移民法ハ之ト同様ナル差別待遇ノ規定ヲ設ケタリ帰化法ニ関スル米國最高法院ノ解釈ニ顧ミルニ右移民法ハ外國人ニ対スル米國入國ノ許否ヲ以テ

千九百二十四年五月二十六日裁可セラレタル千九百二十四年移民法第十三条(c)項ニ包含セラルル日本人差別の規定ニ関シ本使ハ茲ニ政府ノ訓令ニ依リ日本ノ立場ヲ闡明セル覺書ヲ閣下ニ提出スルノ光榮ヲ有ス  
尚日本政府カ右覺書ヲ米國政府ニ提出スルハ全ク虛心坦懐友好ノ精神ニ出ツルモノナルヲ以テ米國政府ニ於テモ同一精神ニ依リ之ヲ接受セラルヘキヲ確信シ此旨ヲモ付言ス  
キハトキ命セラレタリ

本使ハ茲ニ閣下ニ向テ重テ敬意ヲ表ス

千九百二十四年五月三十一日

華盛頓日本大使館ニ於テ

埴 原 正 直

國務長官  
チャールズ・イー・ヒューズ閣下

覺書

日本政府ハ米國ニ於テ「千九百二十四年移民法」ト称スル法律制定セラレタルノ報ニ接シ憂慮ニ堪ヘス本法中ノ差別の条項即チ第十三条(c)項ハ帰化不能外國人ニ付他ノ種類ノ外國人ト區別シテ入國ノ禁止ヲ規定シ其ノ適用ハ日本

個人ノ具備スル資格ノ適否ニ依ルコトナク入國請求者ノ属スル人種ノ如何ニ依リテ決定セムトスルノ法則ヲ樹立セルコト疑ラ容レス殊ニ曩ニ公表セラレタル千九百二十四年二月八日付下院移民帰化委員長宛國務長官ノ書翰中ニモ指摘セラレタルカ如ク日本人以外ノ亞細亞人種ハ從来ノ諸法律ニ依リテ入國ヲ禁止セラルモノナルヲ以テ前頃新移民法中ノ人種的區別ハ其ノ實質ニ於テ日本人ノ入國禁止ヲ目的トセルモノト思惟セラル

日本人ハ到底米國ノ生活及理想ニ同化スルモノニ非ストノ説ハ從來米國ニ於テ此種ノ差別的措置ヲ弁護セムカ為ニ屢々唱ヘラレタル所ナルモ第一ニ外國系移民ニ対シ単ニ人生一代ノ短期間にニ新ナル環境ニ同化セムコトヲ期待スルカ如キハ難キヲ求ムモノト謂ハサルヘカラス顧ミルニ日本人口多少米國ニ移住スルニ至レルハ十九世紀ノ末期数年以來ノ事ニシテ此際米國ニ於テ各人種ノ同化力ニ付日本人ト帰化權ヲ有スル外國移民トヲ比較シテ断定的判断ヲ下スハ早計ニ失スルモノト思考ス  
將又同化ノ実現ハ公正平等ナル待遇ノ温情アル雰囲氣中ニ於テノミ之ヲ期スルコトヲ得ベク約二十年間米國ノ若干諸

## 一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一四七

二〇〇

州ニ於テ日本人カ法律上並事實上蒙リ来レルカ如キ冷酷ナル差別待遇ノ下ニ於テハ同化力ノ自然的發達ノ阻害セラルヘキハ當然ナリ一社会自ラ或外国系分子ヲ爾余ノ分子ヨリ隔離シナカラ其ノ外国系分子カ該社會組織中ニ融合セサルヲ批難スルカ如キハ公平ノ所見ニ非サルヘシ從テ日本人ニ對スル非同化性ノ論断ハ根本的ニ不正ナルカ然ラサレハ少クトモ時期尚早タルヲ免レス

翻ツテ日米間ニ於ケル通商條約ヲ考察スルニ千八百九十四年ノ旧條約第二条中ニハ左記ノ但書存セリ

「但シ本条及前条ノ規定ハ両締盟國ノ各方ニ於テ商業、労働者ノ移住、警察及公安ニ關シ現ニ行ハレ又ハ将来制定セラルヘキ法律勅令及規則ニハ何等ノ影響ヲ及ホスコトナシ」

千九百十一年條約改訂ノ際日本政府ノ要求ニ依リ新條約ニ於テハ右但書ヲ削除シ入國、旅行及居住ノ自由ヲ保障セル通則ハ依然之ヲ存スルコトトナリ之ト同時ニ日本政府ハ條約ノ付属文書トシテ千九百十一年二月二十一日付ヲ以テ左記ノ宣言ヲ為セリ

「本日日米通商航海條約ニ調印セムトスルニ當リ華盛頓

叙上ノ交渉ニ際シ終始日本政府ノ念頭ヲ離レサリシ一点ハ移民ニ關スル合衆国ノ差別的立法ニ対シ本邦人ヲ擁護スルニ在リタルコトハ前述ノ歴史ニ照シ自ラ明白ナリ右日本ノ立場ハ米国政府ノ十分理解シ諒悉シタル所ニシテ此点ハ現行條約ノ調印及批准交換ニ方リ常ニ考量中ニ加ヘラレタリ事情斯ノ如クナルヲ以テ千九百二十四年移民法第十三条（c）項ノ規定ト千九百十一年條約ノ規定トノ抵触及其ノ抵触ノ範囲ニ關スル専門的法理問題ノ提起ハ他日ノ機会ニ留保スルモ新立法力右條約締結ノ根柢タル精神並經緯ヲ全然無視セルモノナルコトハ茲ニ日本政府ノ指摘セムトスル所ナリ

次ニ所謂紳士協約ナルモノヲ考查スルニ同協約ハ一方ニ於テ日本移民ニ關シ米国政府ノ認メタル現実事態ノ須要ニ副ハムカ為又他方合衆国ニ於テ日本人民ノ正当ナル感情ヲ害スヘキ排斥法制定ノ要求アルヘキヲ予防セムカ為案出セラレタルモノニシテ千九百八年ヨリ實施セラレタルカ爾來着其ノ効果ヲ發揮セリ合衆國移民長官年報中ニ掲載セラレタル統計ニ徴スルニ千九百八年ヨリ千九百二十三年ニ至ル十五年間ニ米本国ニ入國ヲ許可セラレタル日本人ハ同國ヨ

駐劄日本特命全權大使タル下名ハ本国政府ノ委任ヲ受ケ左ノ通宣言スルノ光榮ヲ有ス

日本帝国政府ハ労働者ノ合衆國移住ニ關シ過去三年間实行シ來リタル制限及取締ヲ從來ト均シク有効ニ維持スルノ覺悟ナリ」

新條約ノ批准ヲ交換スルニ當リ國務長官代理ハ千九百十一年二月二十五日日本大使ニ通知スルニ「米國上院ニ於テハ該條約ハ千九百七年二月二十日裁可セラレタル外国人ノ合衆國移住取締法ト称セラルル法律ノ何レノ条項ヲ廢止又ハ変更スルモノト認ムヘカラストノ了解ノ下ニ條約批准ニ對スル協賛ヲ與ヘ且此了解ハ批准書ノ一部ヲ成スヘキコトヲ決議セル旨」ヲ以テシ且左ノ如ク付言セリ

「本法ハ合衆國ニ移住スヘキ總テノ國ノ移民ニ適用セラルモノニシテ何レノ國ノ利益ノ為ニモ差別待遇ヲ設定セルモノニ非サルヲ以テ貴國政府ニ於テモ右了解ヲ批准書中ニ記載スルニ付別段ニ異議ナキモノト思惟ス」日本國政府ハ斯ノ如ク米國政府カ日本人ニ対スル何等差別のノ法律規定ナキコトヲ保障セルニ信賴シ前記ノ了解ヲ批准書中ニ記載スルコトニ同意シタル次第ナリ

リ出国シタル日本人ニ比シ數ニ於テ僅々八千六百八十一人ノ増加ヲ見タルニ過キス而モ右数字中ニハ労働移民ノミナラス商人、学生及其ノ他ノ非労働者及非移民ヲモ包含シ此等ノ者ノ員數カ両國間ニ於ケル商業的、學問的並社會的關係ノ發達ト共ニ増加スヘキハ自然ノ理ナリ加之若シ斯ノ如キ少數ノ者スラモ合衆國ニ取リテ好マシカラストスルニ於テハ日本政府ハ移民ヲ更ニ制限スルノ目的ヲ以テ現存取締ヲ改訂スルノ意向アルコトヲ既ニ表示セリ然ルニ不幸ニモ日本人ニ対シテ差別待遇ヲ設ケル新法律ノ規定ハ竟ニ日本國ニ於テ紳士協約ニ因ル責務ノ繼續承認ヲ不可能ナラシムルニ至レリ日米両國政府間ニ於テ長時日ニ亘リ反覆討議ノ未成立セル友好的協調ノ了解ハ今ヤ米國ノ立法行為ニ依リ突如トシテ破壊セラレ日本カ両國ノ親善關係ノ為ニ過去十六箇年以上耐忍ヲ以テ誠実且正確ニ遵守シ來レル自制的取締モ今ヤ徒爾ニ終レルカ如シ

根本論トシテハ各國ノ版圖内ニ於ケル移民入國ノ制限及取締力國家固有ノ主權内ニ屬スルコトハ茲ニ之ヲ否定セムトスルモノニ非ス然レトモ右權利行使ニ當リ外國ノ正當ナル自尊心國際間ノ了解又ハ礼讓ノ通義ヲ無視シ外國ニ対シテ

# 一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一四八 一四九

二〇二

明ニ公正ヲ失スルノ措置アルニ於テハ問題ノ性質トシテ固ヨリ外交的交渉及解決ニ訴フルコトヲ得サルヘカラス仍テ日本政府ハ茲ニ千九百二十四年ノ移民法第十三条（c）項ニ包含セラルル差別的条項ニ対シ嚴肅ナル抗議ヲ持続シ之ヲ記録ニ留メ且米国政府ニ対シ差別待遇除去ノ為一切ノ適当ナル措置ヲ執ラレムコトヲ要請スルヲ以テ其ノ当然ノ責務ナリト思考ス

編註 右訳文ハ外務省編『一九二四年米国移民法制定及之ニ関スル日米交渉經過』（大正十三年七月）ニ依ル

一四八 六月八日（着） 在米国埴原大使ヨリ  
松井外務大臣宛（電報）

日本政府抗議ニ対スル米国側回答主旨ニ關シ

ヒューズヨリ内話ノ件

第五〇二号 六月七日前日当地ニ帰省セル「フレデリック・モーア」ハ

國務長官ト会談シタル趣ノ處右会談ノ節同長官ハ日本ノ抗議ニ対スル米国政府ノ回答ハ最早出来上リ居リ不日埴原大使ニ手交ノ運トナリ居ルモ移民法既ニ制定セラレタル以上國務長官タル自分トシテハ日本ノ抗議ニ対シテモ我国政府

セラレ居ラス

一五〇 六月十四日（着） 在米国埴原大使ヨリ  
幣原外務大臣宛（電報）

米国政府ノ回答文発送時機ニ關シヒューズ国務長官ヨリ内談ノ件

第五二五号 至急極秘

往電第五二〇号ニ關シ今十五日國務長官ノ求メニ依リ往訪シタルニ長官ハ昨日本使ノ談話中臨時帝国議会本月二十五日開会ノ一節アリタルカ之ニ付考フルニ右開会間際ニ米国政府ノ回答ヲ送リタルニテハ日本ノ朝野ニ於テ考慮ノ暇ナカルヘク而モ議会開会後ニ至リ尚未タ米国ノ回答ナシトアリテハ是亦議会ニ於テ物議ヲ生スル虞アルヘク特ニ何レノ途米国トシテハ右回答ハ七月一日以前ニ送ルノ必要アルニ付テハ寧ロ此際速ニ貴官ニ之ヲ交付スル方機宜ニ適スト思考スルカ如何ト述ヘタルニ付本使ハ右ハ一応尤ノ注意ト思考スルモ昨日会談ノ次第ハ直ニ東京ニ電報済ニテ今日明日中ニハ何分ノ回電アルヘクト存スルニ付一両日待タレ度シト

述ヘタルニ長官ハ月曜（十六日）ヨリ地方演説ノ為數日間不在トナルヘキニ付月曜午前中ニハ本使ニ交付スル様致シ

一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一五〇 一五一

ノ立場ヲ擁護スルノ外無キ次第ナルカ政府トシテハ該移民

法ノ効果ヲ減殺シ又ハundo。スル様ノ希望ハ今後全ク之無キモノト言ハサルヘカラス而シテ希望無キニ拘ハラス希望ヲ抱カシムルカ如キハ却テ人ニ忠ナル所以ニ非ラスト思考セラルニ付日本ニ対スル回答ハ此主旨ニテ作成セラレタリ尤モ事態ノ極メテ機微ナルニ顧ミ回答文ノ字句ハ細心ニ注意シ充分ニ意ヲ尽ス様用意シタリト内話シ更ニ該回答ヲ此際直ニ提出スルノ適否如向ニ付「モーア」ノ意見ヲ求メタルヲ以テ同人ハ今暫ク回答ノ提出ヲ待タレテハ如何カト思考スル旨ヲ答ヘタル趣ナリ

右御参考迄

一四九 六月十二日（着） 在米国埴原大使ヨリ  
幣原外務大臣宛（電報）

大統領ステートメントニ關スル件

第五一三号

貴電第二六六号ニ關シ大統領署名ノ場合ハ其旨法案ヲ「オリジネート」シタル上院又ハ下院（本案ノ場合ハ下院）ニ通告ヲ發スル事トナリ居レルカ本案ハ署名ノ旨通告アリタルノミニテ該「ステートメント」ハ上院ニモ下院ニモ送付

尚貴官ハ長官ト面会ノ際貴電第五二一号長官ノ祝意ニ対シ適當ニ本大臣ノ謝意ヲ表シ且本大臣カ今回就任ノ機会ニ於

一 米國ニ於ケル排日移民法成立問題 1月11

ト取扱ノ旧交ヲ追憶シテ欣懽措ク能ベサル眞アレ（本大臣ノ敦厚ナル敬意ヲ伝達セハレ度）

~~~~~

1月11 六月十六日 在米国埴原大使  
（本國外務大臣宛）

一九二四年米國移民法ニ關ヘル五月三十一日

廿日本政府抗議文ニ於ヘル米國政府回復文

送付ノ件

付屬書 六月十六日付ニハ一ノ國務長官より埴原大使宛  
右回答文写

機密第四八号

大正十三年六月十六日

在米

特命全權大使 境原 正直（左）

外務大臣男爵 純原 嘉重郎殿

新移民法ニ關スル帝國政府ノ抗議ニ

対ヘル米國政府ノ回答文写送付ノ件

本件ニ關シ往電第五三〇号及五三一號ヲ以テ及報告置候處  
該回答文写為念茲ニ及御送付候間御查閱相成度此段申進候  
也

（本國外務大臣宛）  
六月十六日付ニハ一ノ國務長官より埴原大使宛

Department of State,

Washington,

June 16, 1924.

Excellency:

I have the honor to acknowledge the receipt of your note under date of May 31st containing a memorandum stating the position of the Japanese Government with respect to the provision of Section 13 (c) of the Immigration Act of 1924. I take pleasure in noting your reference to the friendliness and candor in which your communication has been made and you may be assured of the readiness of this Government to consider in the same spirit the views you have set forth.

At the time of the signing of the Immigration Bill, the President issued a statement, a copy of which I had the privilege of handing to you, gladly recognizing the fact that the enactment of this pro-

vision "does not imply any change in our sentiment of admiration and cordial friendship for the Japanese people, a sentiment which has had and will continue to have abundant manifestation." Permit me to state briefly the substance of the provision. Section 13 (c) related to all aliens ineligible to citizenship. It establishes certain exceptions, and to these classes the exclusion provision does not apply, to wit:

Those who are not immigrants as defined in

Section 3 of the Act, that is "(1) a government official, his family, attendants, servants, and employees, (2) an alien visiting the United States temporarily as a tourist or temporarily for business or pleasure, (3) an alien in continuous transit through the United States, (4) an alien lawfully admitted to the United States who later goes in transit from one part of the United States to another through foreign contiguous territory, (5) a bona fide alien seaman serving as such on a vessel

arriving at a port of the United States and seeking to enter temporarily the United States solely in the pursuit of his calling as a seaman, and (6) an alien entitled to enter the United States solely to carry on trade under and in pursuance of the provisions of a present existing treaty of commerce and navigation."

Those who are admissible as non-quota immigrants under the provisions of subdivision (b), (d) or (e) of Section 4, that is "(b) An immigrant previously lawfully admitted to the United States, who is returning from a temporary visit abroad";

"(d) An immigrant who continuously for at least two years immediately preceding the time of his application for admission to the United States has been, and who seeks to enter the United States solely for the purpose of carrying on the vocation of minister of any religious denomination, or professor of a college, academy, seminary, or universi-

sity; and his wife, and his unmarried children under 18 years of age, if accompanying or following to join him; or (e) An immigrant who is a bona fide student at least 15 years of age and who seeks to enter the United States solely for the purpose of study at an accredited school, college, academy, seminary, or university, particularly designated by him and approved by the Secretary of Labor, which shall have agreed to report to the Secretary of Labor the termination of attendance of each immigrant student, and if any such institution of learning fails to make such reports promptly the approval shall be withdrawn."

Also, the wives, or unmarried children under 18 years of age, of immigrants admissible under subdivision (d) of Section 4, above quoted.

It will thus be observed that, taking these exceptions into account, the provision in question does not differ greatly in its practical operation, or in

President has stated, "the determination of the Congress to exercise its prerogative in defining by legislation the control of immigration instead of leaving it to international arrangements." It is not understood that this prerogative is called in question, but, rather, your Government expressly recognizes that "it lies within the inherent sovereign power of each state to limit and control immigration to its own domains," an authority which it is believed the Japanese Government has not failed to exercise in its own discretion with respect to the admission of aliens and the conditions and location of their settlement within its borders. While the President would have preferred to continue the existing arrangement with the Japanese Government, and to have entered into negotiations for such modifications as might seem to be desirable, this Government does not feel that it is limited to such an international arrangement or that by virtue of the existing under-

the policy which it reflects, from the understanding embodied in the Gentlemen's Agreement under which the Japanese Government has cooperated with the Government of the United States in preventing the emigration of Japanese laborers to this country. We fully and gratefully appreciate the assistance which has thus been rendered by the Japanese Government in the carrying out of this long established policy and it is not deemed to be necessary to refer to the economic considerations which have inspired it. Indeed, the appropriateness of that policy, which has not evidenced any lack of esteem for the Japanese people, their character and achievements, has been confirmed rather than questioned by the voluntary action of your Government in aiding its execution.

The point of substantial difference between the existing arrangement and the provision of the Immigration Act is that the latter has expressed, as the

standing, or of the negotiations which it has conducted in the past with the Japanese Government, it has in any sense lost or impaired the full liberty of action which it would otherwise have in this matter. On the contrary, that freedom with respect to the control of immigration, which is an essential element of sovereignty and entirely compatible with the friendly sentiments which animate our international relations, this Government in the course of these negotiations always fully reserved.

Thus in the Treaty of Commerce and Navigation concluded with Japan in 1894 it was expressly stipulated in Article II:

"It is, however, understood that the stipulations contained in this and the preceding Article do not in any way affect the laws, ordinances or regulations with regard to trade, the immigration of laborers, police and public security which are in force or which may hereafter be enacted in either

of the two countries."

It is true that at the time of the negotiation of the treaty of 1911 the Japanese Government desired that the provision above quoted should be eliminated and that this Government acquiesced in that proposal in view of the fact that the Japanese Government had, in 1907-8, by means of the Gentlemen's Agreement, undertaken such measures of restriction as it was anticipated would prove adequate to prevent any substantial increase in the number of Japanese laborers in the United States. In connection with

the treaty revision of 1911, the Japanese Government renewed this undertaking in the form of a Declaration attached to the Treaty. In acquiescing in this procedure, however, this Government was careful to negative any intention to derogate from the full right to exercise in its discretion control over immigration. In view of the statements contained in your communication with respect to these negotia-

reservation in question is not only not necessary, but that it is an engagement which, if continued, is more liable to give rise to misunderstandings than to remove difficulties. In any case it is a stipulation which, not unnaturally, is distasteful to national sensibilities. In these circumstances the Imperial Government desire in the new treaty to suppress entirely the reservation above mentioned, and to leave, in word as well as in fact, the question to which it relates, for friendly adjustment between the two Governments independently of any conventional stipulations on the subject. In expressing that desire they are not unmindful of the difficulties under which the United States labour in the matter of immigration and they will accordingly, if so desired, be willing to make the proposed treaty terminable at any time upon six months' notice.

"The Japanese Embassy is satisfied that in the presence of such a termination clause the Contract-

tions I feel that I should refer to the exchange of views then had. You will recall that, in a memorandum of October 19, 1910, suggesting a basis for the treaty revisions then in contemplation the Japanese Embassy stated:

"...The measures which the Imperial Government have enforced for the past two and a half years in regulation of the question of emigration of labourers to the United States, have, it is believed, proved entirely satisfactory and far more effective than any prohibition of immigration would have been. Those measures of restraint were undertaken voluntarily, in order to prevent any dispute or issue between the two Countries on the subject of labour immigration, and will be continued, it may be added, so long as the condition of things calls for such continuation.

"Accordingly, having in view the actual situation, the Imperial Government are convinced that the

ing States would actually enjoy greater liberty of action so far as immigration is concerned, than under the existing reservation on the subject, however liberally construed."

Replying to these suggestions the Department of State declared in its memorandum sent to the Japanese Ambassador on January 23, 1911, that it was prepared to enter into negotiations for a new treaty of commerce and navigation on the following bases:

"The Department of State understands, and proceeds upon the understanding, that the proposal of the Japanese Government made in the above-mentioned memorandum is that the clause relating to immigration in the existing treaty be omitted for the reason that the limitation and control which the Imperial Japanese Government has enforced for the past two and a half years in regulation of emigration of laborers to the United States, and which the two Governments have

recognized as a proper measure of adjustment under all the circumstances, are to be continued with equal effectiveness during the life of the new treaty, the two Governments when necessary co-operating to this end; the treaty to be made terminable upon six months' notice.

"It is further understood that the Japanese Government will at the time of signature of the treaty make a formal declaration to the above effect, which may in the discretion of the Government of the United States be made public.

"In accepting the proposal as a basis for the settlement of the question of immigration between the two countries, the Government of the United States does so with all necessary reserves and without prejudice to the inherent sovereign right of either country to limit and control immigration to its own domains or possessions."

On February 8, 1911, in a memorandum informing

within the legislative power of this Government to determine. As this power has now been exercised by the Congress in the enactment of the provision in question, this legislative action is mandatory upon the executive branch of the Government and allows no latitude for the exercise of executive discretion as to the carrying out of the legislative will expressed in the statute.

It is provided in the Immigration Act that the provision of Section 13 (c), to which you have referred, shall take effect on July 1, 1924. Inasmuch as the abstention on the part of the United States from such an exercise of its right of statutory control over immigration was the condition upon which was predicated the undertaking of the Japanese Government contained in the Gentlemen's Agreement of 1907-08 with respect to the regulation of the emigration of laborers to the United States, I feel constrained to advise you that this Government cannot

the Department of State of the readiness of the Japanese Government to enter upon the negotiations which had been suggested by the Embassy and to which the Department had assented subject to the reservation above quoted, the Japanese Embassy stated that

"the Imperial Government concur in the understanding of the proposal relating to the question of immigration set forth in the above mentioned note of January 23 last."

It was thus with the distinct understanding that it was without prejudice to the inherent sovereign right of either country to limit and control immigration to its own domains or possessions that the Treaty of 1911 was concluded. While this Government acceded to the arrangement by which Japan undertook to enforce measures designed to obviate the necessity of a statutory enactment, the advisability of such an enactment necessarily remained

but acquiesce in the view that the Government of Japan is to be considered released, as from the date upon which Section 13 (c) of the Immigration Act comes into force, from further obligation by virtue of that understanding.

In saying this, I desire once more to emphasize the appreciation on the part of this Government of the voluntary cooperation of your Government in carrying out the Gentlemen's Agreement and to express the conviction that the recognition of the right of each Government to legislate in control of immigration should not derogate in any degree from the mutual goodwill and cordial friendship which have always characterized the relations of the two countries.

Accept, Excellency, the renewed assurances of my highest consideration.

(Signed) Charles E. Hughes

His Excellency

# 一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一五二

Mr. Masanao Hanihara,

Japanese Ambassador.

(右和訳文) 仮訳文ナリ

本官ハ茲ニ千九百二十四年移民法第十三条(c)項ニ闕スル日本政府ノ立場ヲ闡明セル覚書ヲ載録セル五月三十一日付貴翰ヲ受領スルノ光榮ヲ有ス

本官ハ右覚書カ虛心坦懐友好ノ精神ヲ以テ提出セラレタル旨貴官ノ陳述ヲ欣然了承シ米国政府モ亦同一ノ精神ヲ以テ貴官ノ開陳セラレタル所見ヲ考慮スルモノナルコトヲ茲ニ確言ス

大統領ハ移民法案署名ニ際シ「ステートメント」ヲ公表シ右写ハ曩ニ本官ヨリ貴官ニ手交シタル所ナルカ大統領ハ日本国民ニ對スル称賛ノ念ト深厚ナル友誼ノ情ハ今後モ從來ニ於ケルト等シク依然十分ニ披瀝セラルヘク右情念カ排斥条項ノ制定ニ依リ何等變化ヲ生スルモノニ非サルコトヲ欣然確認セラレタリ試ミニ同条項ノ内容ヲ略述スレハ第十三条(c)項ハ帰化権ヲ有セサル總テノ外国人ニ適用セラルモノナルカ同条項ハ特定ノ例外ヲ設ケ次ニ列挙セラルモノニ對シテハ排斥条項ヲ適用セサルコトトセリ

# 二一二

移民法第三条ノ定義ニ從ヒ移民タラサル者即チ(一)政府ノ官吏並其ノ家族從者婢僕及雇人(二)一時的ニ旅行者トシテ又

ハ用務若ハ觀光ノ為ニ合衆国ニ渡来スル外国人(三)合衆国ヲ單ニ継続的ニ通過スル外国人(四)適法ニ合衆国ニ入国ヲ許可セラレタル後接壤外国領土ヲ通過シテ同國ノ一地方ヨリ他方ニ赴ク外国人(五)合衆国ノ港ニ到著スル船舶ニ海員トシテ從業スル善意ノ海員ニシテ单ニ其ノ職務ノ為ニノミ一時のニ合衆国ニ入国セムトスル外国人(六)現行通商航海條約ノ規定ニ準拠シ单ニ商業ヲ營ム目的ヲ以テ合衆国ニ入国シ得ル

外国人  
第四条(B)、(D)又ハ(B)項ノ下ニ非歩合移民トシテ入国シ得ル者即チ(B)前ニ適法ニ合衆国ニ入國ヲ許可セラレタル移民ニシテ一時外國ニ赴キタル後帰還スル者(D)合衆国入國請求直前少クトモ二年間孰レノ宗派タルヲ問ハス宗教教師ノ職ニ在リタル者又ハ大学、専門学校、宗教学校、又ハ総合大学教授ノ職ニ在リシ者ニシテ单ニ其ノ職ニ從事スル目的ヲ以テ入国セムトスル移民並其ノ同伴シ若ハ呼寄セタル妻及十八歳未満ノ未婚ノ子女(E)十五歳以上ノ善意ノ学生ニシテ單ニ公認セラレタル学校、大学、専門学校、宗教学校又ハ総

合大学ニ於テ勉学スル目的ヲ以テ入国セムトスル移民但シ右学校ハ本人自ラ之ヲ制定シ労働長官ノ認可ヲ経タルモノタルコトヲ要ス又右学校ハ各移民学生ノ就学終了ヲ労働長官ニ報告スルコトヲ要シ右報告ヲ怠リタル場合ニハ右認可ハ直ニ取消サルモノトス

尚前記第四条(D)項ノ下ニ入國ヲ許可セラルル移民ノ妻及十八歳未満ノ未婚ノ子女

此等例外ノ者ヲ考慮ニ入ルルトキハ本件条項ハ其ノ實際ノ運用上又ハ其ノ反映スル政策ニ於テ日本労働者ノ合衆国移住ヲ阻止スルニ付日本政府カ合衆国政府ト協力シ來レル紳士協約中ニ包含セラルル了解ト大差ナキコトヲ認メ得ヘシ吾人ハ此ノ永年ノ政策ヲ遂行スルニ當リ日本政府カ提供セラレタル助力ヲ十分諒トスルモノニシテ右政策ノ樹立ヲ促セル經濟上ノ事由ニ付キテハ言及スルノ必要ナキモノト思惟ス右政策ハ日本国民其ノ特性及業績ニ対シ何等尊敬ノ念ヲ欠如スルモノニアラシシテ同政策ノ妥当ナリシコトハ何等問題トナリタルコトナク寧ロ日本政府カ自發的ニ之力遂行ニ助力セラレタルコトニ依リテ確認セラレタルモノナ

現行取極ト本移民法ノ規定トノ實質的相異ハ蓋シ大統領ノ声明セル如ク本移民法案ニ於テハ移民ノ取締ヲ國際取極ニ委セスシテ議會カ其ノ有スル権能ヲ行使シ立法ニ依リ之カ取締ヲナサムトスル決意ヲ表顯シタルニ存ス

右権能ノ存在ハ人ノ疑ハサル所ナルノミナラス各国ノ版図内ニ於ケル移民入國ノ制限及取締カ國家固有ノ主權ニ属スルコトハ寧ロ貴国政府ノ明ニ承認セラルル所ニシテ日本政府ニ於テモ外国人移入ノ許否、其ノ領土内ニ於ケル定住ノ条件及場所等ノ決定上適宜此ノ権能ヲ行使シ居ルモノト信セラル

元來大統領ハ日本政府トノ現行取極ノ存続ヲ希望シ又現行取極ニ対シ何等望マシキ修正ヲ為サムカ為商議ヲ行ハムコトヲ欲シタルモ之ト同時ニ米国政府ハ此ノ如キ國際取極ノ締結ヲ余儀ナクセラレ又ハ現行取極ノ存在ヲ理由トシ或ハ米国政府カ從来日本政府トノ間ニ行ヒ來レル商議ヲ理由トシテ本件ニ關シ其ノ本来有スル行為ノ自由ヲ失ヒ又ハ毀損セラレタルモノトハ決シテ思考シ居ラス此ノ移民取締ノ自由タルヤ主權ノ要素ヲ為スト同時ニ我對外關係ノ立脚スル友誼的感情ト全ク相容ルモノニシテ米国政府ハ從来如

## 一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一五二

二一四

上ノ商議ニ際シ常ニ十分之ヲ留保シ来レリ

仍テ千八百九十四年日本ト締結セラレタル通商航海条約第

二条中三次ノ明示的規定ヲ設ケタリ

但シ本条及前条ノ規定ハ両締盟國ノ各方ニ於テ商業、労働者ノ移住、警察及公安ニ関シ現ニ行ハレ又ハ将来制定セラルヘキ法律勅令及規則ニハ何等ノ影響ヲ及ホスコトナシ

千九百十一年条約締結商議ノ際日本政府カ前記規定ヲ削除セムコトヲ希望シ又千九百七一年紳士協約ニ基キ米国ニ於ケル日本労働者ノ員數ノ実質的増加ヲ阻止スルニ割切ナリト予期セラレタル禁遏手段ヲ遂行シ来レルニ鑑ミ米国政府ニ於テモ日本政府ノ提議ニ同意シタルハ事実ナリ千九百十一年条約改締ニ際シ日本政府ハ同条約付属宣言ノ形式ニ拠リ右手段ノ遂行ヲ更新セリ然レトモ米国政府ハ之ニ同意スルニ当リ移民ノ自發的制限ニ關スル全權ヲ毀損スルノ意向アルヲ否認スルニ注意セリ此等ノ商議ニ關シ貴翰中ニ陳述セラレタル所ニ顧ミ當時行ハレタル意見ノ交換ニ言及セサルヲ得ス

貴官ノ承知セラル如ク日本大使館ハ千九百十年十月十

九日付覚書中ニ於テ當時考量中ノ条約改正ノ一要点ニ関シ左ノ如ク記述セラレタリ

米国行労働移民問題ノ調節ニ關シ帝國政府カ過去二年有半ニ亘リ励行シ來レル手段方法ハ間然スル所ナク且移民禁止ノ手段ヨリモ遙ニ有効ナルコトヲ立証セルモノト信セラル而シテ此ノ如キ制限手段ハ労働移民問題ニ關シ両國間ニ論争異論ノ發生スルコトヲ防止スル為日本政府ノ自發的ニ執リタル所ニ係リ事態ノ必要トスル限り之ヲ持続セムトスルモノナルコトヲ茲ニ付言ス

斯ノ如キ実情ニ鑑ミ帝国政府ハ右留保条款ハ啻ニ不必要ナルノミナラス之ヲ将来ニ存スルニ於テハ困難ヲ排除スルノ資トナラシテ却テ誤解ヲ招致スルノ因タルヘシト信ス、蓋シ此ノ如キ規定ハ国民的感情ニ不快ヲ与フルコト自然ノ数ナリト謂フヘシ此ノ如キ事情ヨリシテ日本政府ハ新条約ニ於テハ上述ノ留保条款ヲ全然排除シ労働移民問題ニ關シテハ条約上ノ規定ニ俟ツコトナク名実共ニ両国政府ノ友誼的解決ニ倚頼セムコトヲ希念スルモノナリ、尤モ日本政府ハ此ノ希望ヲ述フルニ當リテハ米国政府カ移民問題ニ關シ種々難関ニ苦心シ居ラルコトヲ看

過スルモノニアラサルヲ以テ若シ米国政府ニシテ希望セラルニ於テハ新条約ハ何時ト雖モ六箇月ノ予告ヲ以テ之ヲ廢止シ得ルコトト為スモ異論ヲ存セス日本大使館ハ如上ノ廢止条款ヲ存置スル場合移民問題ノ關スル限り両締約國カ保持スル行為ノ自由ハ現存留保条款ヲ廣義ニ解スル場合ヨリモ實際上遙ニ広汎ナルコトニ満足スルモノナリ

右提議ノ回答トシテ國務省ハ千九百十一年一月二十三日日本大使ニ送付シタル覺書ニ於テ同省ハ次ノ基礎条件ノ下ニ於テ新通商航海条約締結ノ商議ヲ為スヘキ旨明セリ

前掲覺書中ニ日本政府ノ為シタル提議ハ即チ現行条約中移民ニ關スル条項ノ削除ヲ為スハ米国ニ於ケル労働者ノ移住ニ關シ日本政府カ過去二箇年半實行シ來リタル制限及取締カ所有事情ノ下ニ於テ適當ナリト両國政府ノ認メタル理由ニ基クモノニシテ新条約ノ効力存続期間日本政府カ從來ト均シク有効ニ維持シ両國政府ハ其ノ目的遂行ノ為必要ノ協力ヲ為スヘク又該条約ハ六箇月ノ予告ヲ以テ消滅スヘシトノ点ニ在リト國務省ニ於テ了解シ且其ノ了解ヲ維持スルモノナリ

更ニ日本政府ハ条約調印ノ際前記ノ趣旨ヲ正式ニ宣言シ米国政府ハ其ノ裁量ニ依リ之ヲ公表シ得ヘント了解ス米国政府ハ其ノ領域又ハ屬領ニ來ルヘキ移民ノ制限及取締ヲ為スヘキ固有ノ主權ニ對シ一切ノ必要ナル留保ヲ為シ該主權ニ影響ヲ及ホスコトナク右提議ヲ両國間ノ移民問題解決ノ基礎トシテ承認ス

千九百十一年二月八日日本大使館ハ其ノ覺書ニ於テ日本政府ハ同大使館ノ提議シ且又前ニ引用シタル留保ヲ条件トシテ國務省ニ於テ同意セル所ニ從ヒ商議スヘキ旨同省ニ通告シ更ニ次ノ如ク述ヘタリ

日本政府ハ本年一月二十三日付前記公文ニ陳述セル移民問題ニ關スル提議ニ付キテノ了解ニ一致ス

前述ノ如ク千九百十一年条約ハ自國ノ領域又ハ屬領ニ來ルヘキ移民ノ制限及取締ヲ為スハ各國固有ノ主權ニ何等影響ヲ及ホスコトナシトノ明確ナル了解ノ下ニ締結セラレタルモノナリ而シテ一方ニ於テ法律制定ヲ必要ナカラシムカ為考案セラレタル手段ヲ日本ニ於テ実行スルニ米国政府ハ同意シタルモ他方ニ於テ法律制定ノ適否ノ決定ハ米国政府ノ立法権ノ範囲ニ屬スルコト當然ナリ而シテ今ヤ議会ハ

一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一五三

二一六

右立法権ヲ行使シテ本件条項ヲ制定シタル以上此ノ議会ノ行為ハ行政部ニ対シテ命令的ニシテ法律ニ表明セラレタル議会ノ意志ヲ遂行スルニ当リ行政部ハ其ノ裁量ヲ以テ之ヲ取捨スルノ自由ヲ有セス

移民法ノ規定ニ拠レハ本件第十三条(c)項ハ千九百二十四年七月一日ヨリ実施セラルヘシ而シテ米国ニ於テ移民取締ニ対スル立法権ノ行使ヲ自制スルハ是レ日本政府カ米国ニ至ルヘキ労働者ノ移住制限ニ関スル千九百七十八年紳士協約中ニ包含セラル趣旨ヲ履行スル条件タルニ顧ミ移民法第十三条(c)項ノ実施期日以後ハ前記取極ニ拠ルノ責ニ任せサルヘシトノ日本政府ノ見解ニ対シ米国政府ニ於テ同意ヲ表セサルヲ得ス

本官ハ此ノ機会ニ於テ紳士協約ヲ実行スルニ当リ貴国政府ノ尽シタル自發的協力ハ米国政府ノ深ク諒トスル所ナルコトヲ反覆力説スルト同時ニ移民制限ニ関スル各國立法權ノ承認ハ両国間ノ善良敦厚ナル友誼ヲ毀損スルモノニアラサルコトヲ述ヘムトス

本官ハ茲ニ重テ閣下ニ向テ敬意ヲ表ス

千九百二十四年六月十六日

移民法ノ規定ニ拠レハ本件第十三条(c)項ハ千九百二十四年七月一日ヨリ実施セラルヘシ而シテ米国ニ於テ移民取締ニ対スル立法権ノ行使ヲ自制スルハ是レ日本政府カ米国ニ至ルヘキ労働者ノ移住制限ニ関スル千九百七十八年紳士協約中ニ包含セラル趣旨ヲ履行スル条件タルニ顧ミ移民法第十三条(c)項ノ実施期日以後ハ前記取極ニ拠ルノ責ニ任せサルヘシトノ日本政府ノ見解ニ対シ米国政府ニ於テ同意ヲ表セサルヲ得ス

本官ハ此ノ機会ニ於テ紳士協約ヲ実行スルニ当リ貴国政府ノ尽シタル自發的協力ハ米国政府ノ深ク諒トスル所ナルコトヲ反覆力説スルト同時ニ移民制限ニ関スル各國立法權ノ承認ハ両国間ノ善良敦厚ナル友誼ヲ毀損スルモノニアラサルコトヲ述ヘムトス

本官ハ茲ニ重テ閣下ニ向テ敬意ヲ表ス

千九百二十四年六月十六日

第五三〇号 至急

往電第五二八号所報ノ通り六月十六日國務長官ニ面会シタルニ長官ハ別電第五三一号ノ米国政府回答ヲ本使ニ手交シ同時ニ「右回答ヲ貴大使ニ手交スルニ当リ右米国政府ノ日本ニ対スル最モ誠実ナル友好ノ念ヲ以テ之ヲ為スモノナルコトヲ貴大使ニ於テ諒セラレンコトヲ希望ス」ト付言セリ依テ本使ハ右精神ハ本使ノ多トスル所ニシテ我政府モ亦之ヲ諒トスヘキヲ信スル旨答ヘタリ尚右回答ハ前電ノ通り木曜日（十九日）朝刊ニ発表方同意シ置ケルニ付右御承知アリタシ在欧州各大使ニハ十八日午後適當ノ時期ニ平文ニテ右回答全文ヲ電（報）スヘシ

別電第五三一号ハ其六ヲ以テ完結ス

一五三 六月十七日（着） 在米国埴原大使ヨリ  
幣原外務大臣宛（電報）

ヒューズ國務長官ヨリ米国政府ノ回答公文手交ノ件

日本國大使 壇原 正直閣下

二一六

チャールス・イー・ヒューズ

一五四 六月二十日（着） 在米国埴原大使ヨリ  
幣原外務大臣宛（電報）  
新移民法ニ關スル米国政府ノ回答文米紙ニ掲  
載ノ件

第五四号

十九日新聞報

一、排日問題米国回答予定ノ通り昨夜發表各新聞トモ朝刊ニ全文ヲ掲ゲ且 comment ヲ付シ報道シ居ルガ孰レモ右回答ノ慰懃鄭重ナル調子ト移民制限ニ關スル國權留保ノ嚴然タル論拠トヲ賞揚シ居レリ大体ニ本問題ハ既定ノ事實トシテ最早ヤ協議変更又ハ論議ノ余地無キモノトノ印象ヲ与フル如キ説明ヲ加フルト同時ニ日米双方ノ文書ノ両国親善ニ努力セル点ヲ認メ居レリ新聞記事輻輳ノ際ナル為乎論説欄ニ於テモ華府「ポスト」ヲ除キ重ナル新聞ハ何等ノ論評ヲモ試ミ居ラズ本件ニ關スル東京特電モ大体政府筋ニテハ調子ノ親善的ナルヲ認メ米国新聞ト同様移民制限主權ニ關シテハ日本モ之ヲ承認シ居ルガ更ニ之ガ反駁書ヲ提起スルヤ否ヤ未定ナルガ右ニテ紳士協約廢棄トナリ今後ハ近隣国ヘ移民自由ナリト語レル旨ヲ報シ居レリ「ポスト」ハ國務卿

一五五 六月二十八日（着） 在米国埴原大使ヨリ  
幣原外務大臣宛（電報）

一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一五四 一五五

二一七

一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一五六 一五七

新移民法ニ関スル日米交渉文書公表ニ際シテ

ノ留意事項ニ付キ申進ノ件

二一八

切御省略アリタル儀ト思考スルモ為念

貴電第三一三号ニ閑シ

第五四九号

彼我往復ノ公文中昨年十二月四日國務長官宛公文（十二月六日付機密第一〇四号往信付属）及本年一月十五日付同長官宛公文（一月二十一日付機密第五号往信付属）ハ何レモ機密扱シテ同長官ニ手交シタルモノニシテ少クトモ同長官ノ諒解ヲ経タル上ナラデハ我方ノミニテ発表スルコト妥当ナラス之等ノ文書ハ勿論今回ノ公表中ニハ包含セラレサル儀トハ存セラルモ為念申進ス

尚本省トノ往復電報ニ付テモ充分御注意ノ上御取捨アリタル儀ト存セラルモ本使ト國務長官トノ間ノ交渉其他ニ関スル暗号電報ハ何レモ當方ニテ全然發表ヲ予期セスシテ起草シタルモノナルニ付両者間内々ノ協議ニ閑セラルモノニテモ若シ万一公表ノ場合ハ字句其他ノ点ニ付適當ノ取捨改作ヲ加フル必要アルヘキハ勿論ナリ尚又両者間内々ノ協議ニアラストモ公式又ハ非公式ニ両者限リニ打合セ又ハ言明シタル事項及諜報者ヨリ内密接受セル報告電報ノ如キハ一

一五六 七月三十一日 在サン・フランシスコ大山總領事宛  
（電報）

新移民法實施後ノ在留邦人ヘノ影響等ニ付キ

概報方訓令ノ件

第九一号

新移民法實施後一ヶ月ヲ経過シタル處同法施行ノ結果在留日本人ノ受クル精神的並物質的影響殊ニ在留民将来ノ立場ヨリシテ如何ニ同法ヲ眺メ居ルヤニ付要点簡単ニ電報アリ度シ

沿岸各領事へ本大臣ノ訓令トシテ転電シ在米大使へ参考トシテ転電アレ

一五七 八月三日（着） 在サン・フランシスコ大山總領事ヨリ  
幣原外務大臣宛（電報）

新移民法ノサン・フランシスコ方面邦人ヘノ

影響等ニ付キ報告ノ件

第一三三三号

貴電第九一號ニ閑シ

新移民法ノ在留民ニ対スル直接且一般的影響ハ申ス迄モ無

ク家族呼寄禁止条項ナル處之ヲ在留労働者ニ就キ考察スルニ家族扶養ノ能力アル正当入國者ハ大多数新法実施前ニ迎妻又ハ呼寄ヲ了シ居レルヲ以テ彼等ニ対スル實際的打擊ハ現ニ結婚ノ可能性ヲ有スト推定セラル未婚ノ男子約二〇

〇〇人位ニ止マルベク（今後成長スル子女ノ問題ハ之ヲ別

トシ）又在留商人ハ商人ノ妻子呼寄禁止条項ヲ包含スル本法ノ如キ立法ヲ予見セザリシヲ以テ可ナリ打擊ヲ受ケタル次第ナルモ相当ノ者ハ遊覽其他ノ名儀ヲ以テ渡米ノ途無キニアラザルノミナラズ在留労働者ニ比シ其數僅少ナリ要スルニ新移民法ノ物質的打擊ハ略右ノ如クナルガ精神的打擊ニ至リテハ一般在留民ヲ通ジテ甚シク意氣沮喪ヲ免カレ難シ

貴電後段ニ閑シ在留同胞ノ新法ニ対スル将来ノ立場ハ其環境一樣ナラザルモ嚮ニハ土地法判決アリ今又新移民法ノ制

定ニ面シ愈々浮腰トナリ居レルハ争フベカラザル一般的現象ナル處事業ノ根柢稍強固ナルモノ又ハ米国出生ノ子女ヲ擁スルモノ等ハ多少将来ニ囁望シ然ラザルモノト雖モ故國ノ生活難ヲ觀念シ實際上引揚決心ヲ為ス迄ニハ至ラザルヤ

一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一五八

二一九

二察セラル  
在米大使、「ポートランド」「シアトル」「ロス・アンゼルス」ヘ転電セリ

一五八 八月六日（着） 在ロス・アンゼルス若杉領事ヨリ  
幣原外務大臣宛（電報）

新移民法ノロス・アンゼルス方面邦人ヘノ  
影響等ニ付キ報告ノ件

第一八七号

桑港總領事宛貴電第九一號ニ閑シ

(一) 在留日本人ノ受クル物質的影響ハ迎妻及父母妻子呼寄不能トナレルニ過キシスシテ紳士協約施行當時ニ比シ大差無ク現在ニ於ケル在留者ハ専ラ自己現在ノ地位確保ニ腐心し居ルヲ以テ之サヘ保障サルレハ新移民法ノ制限ハ直接著シキ影響ヲ感セス寧ロ之ヨリ遙カニ大ナル物質上ノ影響ハ土地法励行ニ依ル打擊ナリ

(二) 精神的方面ニ於テハ未婚ノ在米青年男女及本邦ニ家族ヲ残セル既婚者等ハ今後米国ニ於テ家族的生活ヲ営ムノ希望ヲ絶タレタル為一方土地法其他ノ排日の法規等ヨリ蒙ル物質的及精神的打擊ト相俟ツテ将来永住ノ見込乏シクナリ

## 一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一五九

二二〇

幾分浮腰ト為レル傾アリ從テ茲數年間ハ免モ角トシテ其後ニ於テハ在留者數減少スルニ至ル可シト推測セラレ居レリヨ、殊ニ從来ノ排日ハ地方的事実ト目セラレタルモ今回ノ移民法ニ依リ之ヲ全國的ニ且法制上確認スルニ至リタル結果少數ノ識者ハ別トスルモ一般米国人ヲシテ日本人ニ対シ支那同様差別的待遇ヲ受クル特殊階級ノ人種トシテ確然区別セラレタルモノノ如キ觀念ヲ有セシメ此ノ觀念ハ土地法等ノ地方的排日法制ノ影響ト相俟テ益深刻トナルニ至ル可ク特ニ米國兒童及在米日系市民ノ脳裏ニ印セラルベシ加州諸地方ニ於ケル本邦人ニ対スル米人暴行事件ノ如キモ右觀念間接ノ影響ト見ルヲ得ヘシ

在米大使、「ホノルル」ヲ含ム在米各領事へ暗送セリ

一五九 八月七日(着) 在ボートランド岡本事務代理ヨリ  
幣原外務大臣宛(電報)

新移民法ノポートランド方面邦人ヘノ影響等

二付キ報告ノ件

第五〇号 在桑港總領事宛貴電第九一号ニ関シ

新移民法ノ成立ハ日本ヲ蔑視シタル米國ノ不遜ナル態度ノ

表現ニシテ本邦人ヲ支那人ト同様ノ待遇地位ヲ以テ律スルモノト看做サレ從テ在留邦人ノ受クル精神的打撃ハ可成リ深刻ナリ現ニ從來同化ニ努メ永住ノ決心ヲ有シタル者モ其意氣込ヲ挫カレ此ノ上ハ機会アラハ帰国セントノ浮腰氣分邦人間ニ濃厚トナレル觀アルモ去リトテ本邦ニ於ケル活計ノ態様ニ比スレハ遙カニ安易ナルモノアルト個人トシテ直接侮辱的圧迫ヲ受クル次第ニハ非サルヲ以テ隱忍現在ニ甘ンセサルヲ得ストスルモノノ如シ

翻ツテ物質的影響ヲ見ルニ新法ノ主ナル打撃タル呼寄セナリシニ鑑ミ将来ハ其数漸次減少スヘク現ニ其大部分ヲ占ムル鐵道及製材就労者ノ平均年齢ハ約四十二、三歳ニ達シ居邦人労働者ハ呼寄セニ依リ労働ノ供給ヲ補ヒ来レル実情ナリ

止ノ新制限ハ現在ノ所左シテ苦痛トナラサルモ從来當地方關係上其命脈モ永カラスト觀察セラレ延テハ邦人労働者ヲ主ナル顧客トセル普通ノ本邦商人ハ勢ヒ衰微ノ外ナク且是等商業從事者ハ資金ノ融通ヲ労働者ノ預金ニ俟ツモノ鮮カラサルト労働者タリシ者カ事業經營者ト成レル邦人發展ノ跡ニ微シ労働者ノ衰亡ハ将来一般在留人ノ事業ニ影響スル所大ナルヘシ

叙上ノ如クニシテ今後十年乃至十五年後ニ於ケル在留邦人ノ狀態暗澹ナルヘキヲ予見シ得サルニ非サルモ在留民ハ将来両国政府間ノ協商ニ依リ何等カ光明ヲ得ルノ一点ニ希望ヲ繋キ居レリ

在米大使ヘ転電シ沿岸領事ニ郵送ス

一六〇 八月九日(着) 在シアトル大橋領事ヨリ  
幣原外務大臣宛(電報)

新移民法ノシアトル方面邦人ヘノ影響等ニ付

キ報告ノ件

第二七五号 桑港宛貴電第九一号ニ関シ

独身者ハ妻帯ノ機會減少セルニ幾分悲観ノ色アリ妻帯者ハ

從来通リ未ノ見据付カズ帰國力永住カ未定ノモノ多シ或者ハ将来ノ日米關係ヲ憂慮シ永住ノ決心ヲ鈍ラシツツアルモ

帰國ヲ決心シタルモノアルヲ聞カズ殊ニ排日法実施前ニ多數ノ渡米者アリタルハ彼等ノ帰國決心ヲ動搖シタル模様ナリ地方的何等迫害ナク却テ土地法修正、帰化権賦与等我方ニ對スル同情ノ声沸々聞エ初メ且将来労働力ノ不足ヲ見越シ樂觀スルモノモアリ之ヲ要スルニ新移民法制定ノ結果同

ニ対スル同情ノ声沸々聞エ初メ且将来労働力ノ不足ヲ見越

シ樂觀スルモノモアリ之ヲ要スルニ新移民法制定ノ結果同

一六一 九月十一日 在米國吉田臨時代理大使宛(電報)  
新移民法ニ關スル六月十六日付米國政府回答  
別電 同日幣原外務大臣發在米國吉田臨時代理大使宛  
電報第四一六号  
排日移民法ニ對スル抗議ノ維持ヲ表明セル英文  
訓電

第四一五号 極秘

一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一六〇 一六一

二二一

1 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 1-K-1

11111

於テ未タ覆答ヲ為ササル所以ハ今更申ス迄モナク朝野ヲ挙  
ケ大統領選挙ニ注意ヲ集中シ居ル現下ノ情勢ニ於テ仮令米  
国政府ト本件交渉ヲ繼續スルトモ問題解決上何等益スル所  
ナクシテ徒ニ両国ニ於ケル国民的感情ヲ刺戟スルノ結果ヲ  
来スニ止マルヲ以テナリ

然レトモ之カ為我ニ於テ從來ノ抗議ヲ棄テ又ハ之ヲ弱メタ

リトノ感想ヲ聊カタリトモ米國ニ与ヘサル為適當ナル機會

ノ發生スル毎ニ之ニ関シ先方ノ注意ヲ喚起シ置クノ要アリ

ト認ム仍テ貴官ハ八月十四日大統領ノ候補受諾演説（貴電  
第六三三号）ニ関連シ親シク國務長官（長官不在ノ場合ハ  
其帰華ヲ俟タレ差支ナン）ニ面会ノ上右演説ニ關シ本国政  
府ニ報告シ置キタル處右ニ付今回本国政府ヨリ訓電ニ接シ  
タル函ヲ前置シタル後別電第四一六号英文ヲ讀ミ開カセラ  
レ其全文写ヲ長官ニ残シ置カレ度シ

右面謁ノ際國務長官ニ於テ万一移民法改正ノ如キハ難<sup>ハ</sup>難  
キロナリト曰フカ如キ口吻ヲ洩シタル場合ニ之ヲ躊躇シ  
置クテキハ我方ノ立場ヲ弱カラシムル虞アルニ付貴官ヘ別  
電トノ重複ヲ厭ハス「移民法ニ因リテ惹起セラレタル好マ  
シカラサル事態ハ日米親交増進ニ対スル大ナル障害ナル」

以テ日本政府トシテハ到底斯ノ如キ事態ヲ永ク其儘ニ放任  
シ置クヲ得サル立場ニ在ルコトハ米国政府ニ於テモ篤ト諒  
解セラレムコトヲ希望ス」トノ趣旨ヲ然ルベク述ヘラレ度  
シ

尚本件ハ差当リ全然外部ニ發表セサル積ナルニ付右御含置  
アリ度シ

（別電）

九月十一日幣原外務大臣發在米國吉田臨時代理大使宛電報  
第四一六號

It has seemed evident to the Japanese Government  
that, for the time being, any further exchange of  
correspondence between the two governments in  
continuation of the discussion on the subject of  
Section 13 (c) of the Immigration Act of 1924 would  
only tend to arouse popular agitation in both coun-  
tries and to complicate further the situation without  
serving any useful purpose. For this reason they  
have refrained from making a reply to the note of  
the Secretary of State under date of 16th June.  
The Japanese Government have not, at any stage

of the question, failed to appreciate the sentiments  
of friendliness and sympathy consistently manifested  
by the American Government, and they are gratified  
to find reassuring proof of such sentiments in the  
last note of the Secretary of State.

There is, however, nothing in the development  
of the question that tends to dispel from the minds  
of the Japanese people the painful impression that  
injustice has been done them by the recent legisla-  
tion. The Act of Congress is admittedly mandatory  
upon the administrative branch of the American

Government. But the Japanese Government are  
unable to concede that the incident in its inter-  
national aspect is now closed. They feel it their duty  
to maintain the protest filed in the note of the Japa-  
nese Ambassador of May 31, so long as the grounds  
of that protest remain unadjusted.

You will invite the attention of the Secretary of  
State to the foregoing position of the Japanese Gov-

ernment on the subject. You will add that in the  
interest of cordial friendship between the two na-  
tions, so earnestly fostered by both Governments, it  
is believed to be of the utmost importance that some  
satisfactory solution of the pending difficulty be  
reached as soon and as far as practicable.

The above communication is to be made orally, but,  
in order to prevent any possible misunderstanding,  
you will leave with the Secretary of State a copy  
of this telegram.

~~~~~

I-K-1 九月十一日(着) 在米國吉田臨時代理大使<sup>モニ</sup>  
幣原外務大臣宛(電報)

ヌラーズ國務長官ニ日本政府ノ抗議維持ア表

明セル訓電ヲ朗讀ノ上回電局手交ノ件

第六七八号 極秘

貴電第四一五号ニ關シ十五日長官ニ面会御來示ノ前置後貴  
電第四一六号ヲ要点特ニ強メテ朗讀シツツ注意セシニ長官  
ヽ見ル見ル眼ヲ真赤ニシテ傾聴セリ本官讀<sup>ハ</sup>終リ之ヲ手交  
ヤハリ先方ハ我が公表ニ付問ヒシラ以テ本官ハ右ノ考く無

# 一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一六三

一一四

キ旨通報アリシト述ベシニ長官ハ I certainly appreciate

it. ト語リシ上日本ニテ公表アラバ新聞紙ハ何故之ヲ秘ス

ルカト米国政府ニ迫ルベシト云ヒシニ付之ヲ公表スル意味

ナラバ電報読上ゲニテ済マヌ要ナシト愚考スト述ベシニ彼

ハ実ニ然リト云ヒシノミニテ本官ハ其ノ発言ヲ待チシモ黙

黙タリ依テ辞退シタルニ先方ハ前記語句ヲ繰返ヘセシノミ

本官帰館後貴電中公表ニ関シ「差当リ」ノ文字アルヲ忘レ

シニ氣付キ直ニ極東部長ニ対シ時期ノ長短ヲ知ラザルモ

for the time being ノ語アル旨長官ニ伝言方依頼シ置ケリ

~~~~~

一六三 九月十九日 在米國吉田臨時代理大使ヨリ

幣原外務大臣宛

日米問題ニ関スルハーディング大統領トノ会

談ニ付テ前駐日大使ウッズヨリ内話ノ件

機密第一一〇号 (十月十五日接受)

大正十三年九月十九日

在米

臨時代理大使 吉田 伊三郎 (印)

外務大臣男爵 幣原 喜重郎殿

前駐日米国大使「ウッズ」氏内話ノ件

ハ然ラハ大使在任中ニ余親シク謝状ヲ送ルヘキニ付辞職ノコトハ七月一日ニ延期スヘシト語リ午餐ニ列スヘキヲ命セ

リ余ハ午餐ノ席上ニ於テ他ニモ人アリンニ付腹藏ナキ談話ヲ為ササリシモ午餐後大統領ト差向ヒニテ種々内話セリ

〔〕 「シアーマン」(在支米国公使)ニハ余ハ面識ナシ然

レトモ彼カ日本ニ赴カサリシハ両国ノ為幸ナリ「ヒューズ」ト「シアーマン」ノ關係ハ「シアーマン」ノ子ガ「ヒューズ」ノ法律事務所ニ居ル故ノミ余ハ彼ヲ日本ニ派遣ス

ルノ不可ナル所以ヲ曩ニ大統領ニ内告シ大統領モ了解セリ

彼ハ今回米国ニ帰り来レル趣ナルカ辭職スルナランカ(之ニ対シ本官ハ「夫人ハ北京ニ居残レルト聞ク」ト告ケシ

ニ) 然ルカ college professor ハ何時迄モ噬リ付ク者ナリ「マクマレー」(国務省極東部長ヲ指ス)ノ如キハ支那ニ関シスクスクノ事ハ如何ト問ハバ同人ハ直ニ右ハ何々条約第何条ニ在リト條約ヲ持チ来ルヘキモ其丈ケノ人間ナリ(本年五月二十三日松井外務大臣主催ノ「ウッズ」大使送別会ニ於テ同大使ハ「シアーマン」公使ヲ駐日大使トシ同公使ノ後任ニハ「マクマレー」氏ヲ任命スル計画ナルモノニ付

同大臣ニ内話シタルコトアリ「ウッズ」氏ハ一ハ此関係ノ

前駐日米国大使「ウッズ」氏 (Mr. Cyrus E. Woods) 去ル十六日午後三時半頃本官ヲ來訪「今回ハ大統領選挙運動ノ要務ニテ前夜來着自分ハ華府ニ来ル毎ニ大統領ト白宮ニテ午餐ヲ共ニセルカ今日モ同様午餐ヲ共ニシ夫ヨリ「ヒューズ」ニ面会今シガタ數分前迄談話ヲ交エ居レリ」トテ例ノ腹藏ナキ態度ニテ種々内話致候ニ付重要ナル諸項ハ拙電第六八二号ヲ以テ報告致候處其他ノ諸点左ノ通ニ有之候

(一) 自分日本ヨリ帰來スルヤ大統領ヲ訪問シタルニ大統領ハ余ノ遣リ方ヲ賞揚シテ日本ニ帰任セシコトヲ希望シタルニ対シ余ハ職ニアリツカンカ為主義ヲ曲クル者ナリトノ非難ヲ受クヘク又余ヲ再派スルコトハ大統領ニトリ不得策ナルヘク適當ナル後任者ヲ求ムルコトヲ勧メタリ大統領ハ余ニ候補者ヲ推薦スヘシト言ヒシニ対シテハ余ハ何人ヲモ指名スル能ハサリキ

余辭表ヲ懷中ヨリ出シテ之ヲ大統領ニ呈セントシタルニ大統領ハ之ヲ遮リ余ニシテ如何ニシテモ日本ニ帰任スルヲ肯セストナラハ致方ナキニ付歐州ノ如何ナル「ポスト」ニテモ与フヘシ如何ト語リシモ余ハ日本ヨリ帰來シテハ如何ナル「ポスト」ヲモ欲セストテ転任ヲ固辞セシヲ以テ大統領

統領ハ之ヲ遮リ余ニシテ如何ニシテモ日本ニ帰任スルヲ肯セストナラハ致方ナキニ付歐州ノ如何ナル「アドヴァイス」「ロッヂ」ハ「ヒューズ」カ埴原大使ニ「アドヴァイス」ヲ与ヘ居リシコトヲ聞知シ「ヒューズ」ニ対スル敵対心ヨリ今回ノ始末ニ至ラシメシモノナリ日本ハ實ニ上院国務省間確執ノ犠牲トナリシモノナリ

(四) 「ヒューズ」ハ上院外交委員ト輒轢シ居リ以前双方融和ノ為斡旋スル者アリ委員ト「ヒューズ」会合シタルニ又又衝突アリ到底両者親善ノ望ナク早晚「ヒューズ」ノ辭職スヘキコトハ論理的帰着ナリ

〔〕 自分ハ日本ニ在ルトキ考ヘタルニ米国内一切ノ教会ハ排日問題ニ關シテハ反対ノ態度ヲ執リ這回ノ議會ノ行動ニハ強硬ニ反対セルニ鑑ミ此際此等ノ寺院ヲシテ特定ノ日曜日ニ於テ上院議員連カ神ノ御指図ヲ守ル様ニトノ祈禱ヲ為サシメハ彼等議員連ハ排日ヲ議決シ得サルヘキニ付此考案ヲ実現セシメタク一宣教師ニ語リシモ彼ハ夫程勢力ナカリシニ付實現セス遺憾ニ堪エス

右何等御参考迄此段報告申進候也

一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一六四

一一一六

一六四 十一月二十日 在米国吉田臨時代理大使ヨリ  
幣原外務大臣宛

米国ニ於ケル排日移民法修正運動ノ状況ニ閲

シ報告ノ件

機密第一四三号

(十一月二十日接受)

大正十三年十一月二十日

在米

臨時代理大使 吉田 伊三郎 (印)

外務大臣男爵 幣原 喜重郎殿

移民法修正運動ニ閲スル件

本件ニ閲シ曩ニ往電第六八二号並十月二十二日付機密第一三一号及十月三十日付機密第一三六号ヲ以テ申進ノ次第有之候處十一月十九日「フョデラル・カウンシル・オブ・チャーチズ」(The Federal Council of Churches)ノ会員ニシテ且「アメリカン・バプティスト・フォーラム・マッソーン・ノサイタ」(American Baptist Foreign Mission Society)ヘ Foreign Secretary ヨ勤メ居ハル Dr. James Franklin (本邦ニモ屢次渡航シタルコトアリテ最近ハ本年六月頃帰米シタル人ナリ) 当館來訪本官及「ムア

条項修正ニ対スル絶対反対ノ趣旨ノ決議ヲ通過シタル由ナルガ右ハ別紙新聞記事ノ如ク加州ノ Grange (加州ニ於ケル所謂排日四团体ノ一)ノ代表者ノ提議ニ拠レル趣ニ有之候右新聞記事切抜相添此段御参考迄及報告候也

一六五 十一月二十七日(着) 在米国吉田臨時代理大使ヨリ  
幣原外務大臣宛(電報)

排日移民法修正運動ニ閲シウップ前大使ヨリ

内話ノ件

第七七一號

往電第六八二号ニ閲シ

「ウ」氏二十六日内話左ノ通り

議会モ教会ニハ反対シ兼ヌルニ付余日本ニテ米国宗教家全

体ヲ動カシ一切ノ寺ニテ排日法案反対ノ為祈禱ヲナサシム

ル考ナリシモ當時東京ニテ承知セシ宣教師モ亦米国ニテモ

問題ノ重大ナルヲ感セサリシニ付此運ニ至ラサリシニ付テ

ハ帰米スルヤ「フェデラル・カウンシル・オブ・チャーチズ」ハ余ノ歓迎会ヲ開キ貴官等ヲモ招カントセシモ余ハ

夫ヨリモ代表的宗教家俗人約五十名ノ米人ヲ集メテ本件事

情ヲ詳説シ米人ノミニテ善後措置ヲ議スルコトヲ良シトシ

一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一六五

一」ハ内話シタル処ニ依レバ同氏等ハ大統領選挙戦中ハ日本移民法修正運動モ政争ニ利用セラル懸念モアリ旁々得策ナラスト思考シ差控ヘ居リタルモ最早大統領選挙戦モ終リ自由ノ言動モ為シ得ル事態トナリタルニヨリ過日来ヨリ

予テ計画中ナリシ移民法修正運動ヲ開始シ同氏ハ各地ニ旅行シテ講演其他ヲ行ヒ居レル趣ニ有之且同氏ノ言フ所ニ依レバ右修正運動ノ目的ハ来るベキ千九百二十七年ニ於ケル quota ノ変更ノ際日本移民ニ閲スル部分ヲモ修正セシメントルモノナル趣ニ有之候又往電第六八二号末段申進置候十一月八日紐育ニ於ケル Federal Council of Churches ノ集会ニ閲シテハ其ノ後今日迄新聞其他ニ何等ノ記事無之モ右集会ハ關係者限リニテ行ハレタルモノノ由ニテ「ウツヅ」前大使モ予定通り出席演説セラレタル趣ニ候處前記「フランクリン」ノ語リタル所ニ依レバ右「ウツヅ」前大使ノ演説ハ要スルニ米国宗教団体ノ力ニヨリテ移民法ノ修正ヲ達成センコトヲ主張セラレタル趣ニ有之候尚右ニ閲連シテ十一月十七日「ヒュー・ジャーシー」州「アトランティック・シティー」(Atlantic City N. J.) ニ於テ開カレタル National Grange ノ年会ニ於テハ日本人及支那人ノ排斥

同「カウンシル」モ之ニ賛成シタルニ付七日会合シ四十五分間力説シタリ余ハ之ヲ以テ生涯最良演説ト思料ス右措置トシテ余ノ説キタルハ宗教団体ハ実業家連及婦人団体ト連絡シテ活動シ排日移民法修正案提出ヲ待シテ米国内一切ノ寺ハ同法反対ノ決議ヲナシ之ヲ各州上下両院議員ニ送ル外確定ノ日ニ神カ議会ヲ導ク様祈禱ヲナスコトナリ  
「ビンヨップ」ハ起立シテ余ノ演説ハ尤モナリ質問スレハ意氣ヲ弱ムル惧アリ之ヲナサストテ讚辞ヲ呈シ座長モ全然余ニ賛成セリ東部中部ニ対スル西部排日宣伝強キニ付吾人ハ之ニ対抗セサルヘカラス余ハ「ペンシルベニア」上院議員兩名ニ語リシニ法案通過ノ見込アラントノコトナリ余ノ案ハ日本人ニ「クオタ」ヲ与フルニアリ  
宗敎団体ハ婦人団ト連絡シ得ヘキモ実業家トノ連絡困難ノ趣ナリ余ハ貴官ニ二方法ヲ提議ス  
「國務長官ハ彼ノ「ノート」ヲ議会ニ送リシニ付テハ自分ニ責任アリ埴原氏ニ関係ナキコトヲ議会ニ告白セハ議会ハ満足スヘキモ「ヒュース」諾セサルヘキニ付同大使東京ニテ「ステートメント」ヲ發シ該公文ハ長官ノ勧誘ニ依リシコトヲ公表セハ如何(之ニ対シ本官ハ此措置ハ日本政府大

# 一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一六六

使トモ賛成シ兼ヌヘシト述ヘシニ「ウッズ」氏ハ夫モ一理アリト答ヘタリ)

〔日本ニ在ル米国商会ノ代表者タル米人又ハ日本人ヲシテ排日法ヲ修正セスハ米国貿易ノ発展困難ナルコトヲ盛ニ米本国ニ宣伝セシムルコト（本官ハ右ハ前者程ノ困難ナカルヘシト述ヘタリ）

余ハ右二点ニ関係ナク活動スヘシ来月早々四年目ニ一回開催ノ前記宗教団体「アトランタ」大会合ニ自分ハ此書面ヲ送ラントストテ本官ニ朗読セリ（写機密第一四八号拙信ニテ發送）余ハ之ヨリ大統領ヲ往訪シテ移民法修正ニ付懇談ヲナサントス此短期議会ニハ見込ナキモ次期議会ニハ見込アラント思ハル

「ウ」氏第二方法御同意ナラハ御尽力請フ

一六六 十二月五日 在米國吉田臨時代理大使ヨリ  
幣原外務大臣宛

排日移民法修正問題ニ關スル日本大使館嘱託

モアートノ談話内容報告ノ件

機密第一五二号 （大正十四年一月九日接受）

大正十三年十二月五日

其後昨日「モアー」ト本官ノ談話左ノ通り

「モ」、「ウッズ」氏ハ書面（右ハ前記拙信第一四八号添付書類ノコトナルカ「ウッズ」氏カ右本官ニ手交ノ際同団体ヨリノ発表以前ニ其内容ノ漏ルルコトヲ虞レ本官限りノ参考トシテナリト内話セシニ付本官之ヲ他人ニ内示セサリシ次第ニ候）ヲ「フェデラル・カウンシル」ニ送り

タル趣ナルニ付（十二月三日付公第一〇四三号参照）何レ同団体ヨリ右書面發表セラルコトト思フ処「ウッズ」氏ハ例ノ通極端ナル言辞ヲ弄スルニ付右日本ニ伝ハルニ於テハ日本側ニテハ排日移民法反対運動奏効スヘシトノ期待ヲ大ナラシムルヲ以テ其誤解ナカラシムル様注意スル必要アリト思フ

「吉」、何ノ意味ソ

「モ」、自分ハ「バンクロフト」大使トモ其赴任前談話シタルカ「ウッズ」ハ行キ過ぎ居レリト「バ」氏ハ自分ニ語レリ「ウッズ」氏ノ主張ハ国務省及米国政府ノ所見ニ「コントラリー」ナリ

「吉」、然ラハ「ウッズ」氏カ排日移民法反対運動ヲ為シ居レルヲ国務省ハ之ヲ阻止セントスルカ又若シ議会ニ於テ

一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一六六

在米

臨時代理大使 吉田 伊三郎（印）

外務大臣男爵 幣原 喜重郎殿  
排日移民法反対運動ノ件

前駐日米国大使「ウッズ」氏ノ排日移民法反対運動ニ関シテハ客月二十六日機密第一四八号拙信及第七七一号往電ヲ以テ報告致置候處右ニ関シ客月末当館「モアー」嘱託ト本官ノ談話左ノ通ニ有之候

「モ」、來月三日ヨリ「アトランタ」ニ於テ「フェデラル・カウンシル・オブ・チャーチス」ノ大会アリ排日移民法反対運動アルヘキニ付自分モ出張シテ討議ニ加ハルコト便利ト思ハルヲ以テ同地ヘ出張方許可アルヘキカ

「吉」、同団体ハ相当ノ勢力アリ彼等独力ニテヤリ居レルニ對シ我方之ニ関与スルハ一般米国人心ヘノ影響上採ラサル所ナリ貴下出席セハ彼等ハ貴下ヲ以テ一米人ト認メス大使館關係ノミヲ考フヘシ日本大使館カ同団体ニ對シ運動セル如キコトヲ示スハ最モ避クヘキコトナリ

「モ」、自分モ爾カ思フ故ニ「アトランタ」往キノ考ハ放棄スヘシ

# 一 米国ニ於ケル排日移民法成立問題 一六七

二三〇

トニ力ムルヲ疑ハサルモ真心ヲコメタル米国トノ協調ハ  
或ハ困難ナルヘシト自分一個ノ考ヲ自分一個ノ考トシテ  
告ケシコトアリ日米両国真ニ相互ヲ諒解セハ何等ノ面倒

モナカルヘキニ排日移民法カ面倒ノ種トナリ居ルハ遺憾  
ナリ

「モ」全然貴説ノ通ナルモ改正ヲ見ルコト非常ニ困難ナリ

右談話ノ趣ハ何レ國務省側ヘモ通セラル事ト思ハレ候處  
何等御参考迄此段報告申進候也

## 3 米国内ノ動向及ビ一般輿論

一六七 三月五日 在サン・フランシスコ大山総領事ヨリ  
松井外務大臣宛

排日条項維持ニ関シ加州排日団体ヨリジョン  
ソン下院移民委員長ニ宛テタル覺書要領報告

ノ件

(四月一日接受)

公第八一号

大正十三年三月五日

在桑港

主張スルモノナリ  
(註)右新聞切抜相添此段御報告申進候 敬具

本信写送付先 在米大使

第六五号

本官発在米大使宛電報第二八号  
去ル十五日「ラモント」ト会談ノ折同氏ハ本官ニ対シ米国  
上院ノ移民法案ニ対スル態度ヲ甚タ遺憾トシ其ノ日米国交  
ニ及ホス影響ヲ深慮スル旨ヲ述ヘ出来得レハ在米大使ヨリ  
國務長官ニ宛テ上院ノ誤解ヲ是正スル趣旨ノ書簡ヲ送リ是  
ヲ公表スル措置ニ出テラルコト最良ナルヘシト内話シタ  
ルカ今十七日同氏ハ特ニ本官ニ会見ヲ求メ前述ノ「ザゼ  
スチヨン」ヲ大使ニ伝ヘタリヤト尋ねタルニ付本官ハ大  
使ニ於テハ事態対応ノ策ニ付日本政府及國務長官ト熟議シ  
居ラルヘキコト「ザゼスチヨン」ノ如キ手段モ当然氣付キ  
居ラルコトト考ヘラレタルニ付本官ヨリ之ヲ申送ルコト  
ヲ差控ヘ居タリト答ヘタルニ同氏ハ実ハ自分ハ本件ニ付非

限ハ一般割当移民法案ニ依ルノ外ナク然カモ割当ノ規定ハ  
一時的ノモノニシテ何時如何ニ変化セラルルヤ難計永久的  
移民制限ノ方法トナスニ足ラス又日本人ノ入国制限ニ関シ  
テ紳士協約ニ信頼シ排日条項ノ如キ日米親善ヲ毀損スル  
惧アル立法ヲ避ケサルヘカラストノ説ヲ為ス者アルモ該協  
約ハ現行日米通商條約ニ依リ日本人ニ対シ通商及居住ノ為  
メニ入国ノ自由ヲ保障シアルヲ以テ其ノ効力微弱ナリ且ツ  
該協約ノ實際上ノ効力ニ顧ミルモ協約ノ交渉開始ヨリ一九  
二〇年ノ國勢調査ニ至ル期間ニ加州在留日本人ノ人口ハ約  
三倍ニ上リソノ増加ノ大多数ハ協約実施期日タル一九〇八年七月一日以降ニ属ス是ヲ排支立法実施後ノ支那人口ノ約  
半減セルニ比セハ蓋シ思半ニ過クルモノアラン

且ツ日本婦人ハ多産的ニシテ一年五千人ノ増殖ヲ示シツツ  
アリ然モ写婚ハ禁止ノ翌年ニ觀光団ト称シ二千二百人ノ花  
嫁ノ入国ヲ見タルカ今尚此種日本婦人入国ノ跡ヲ絶タス加  
之日本移民ハ同化困難ニシテ其ノ米国出生ノ者ト雖モ前者  
ニ比シ同化稍々容易ナレトモ他人種ニハ比較シ難キノミナ  
ラスニ重国籍ノ存在ハ更ニ同化ノ実効ヲ障害ス

吾人ハ紳士協約及日米通商條約ヲ此際直ニ廢棄センコトヲ

外務大臣男爵 松井 慶四郎殿 総領事 大山 卵次郎(印)

「ジョンソン」移民法案中ノ排日条項維  
持方ニ関シ加州排日団体ヨリ「ジョンソン  
ン」ニ送付シタル覺書掲載新聞切抜送付

ノ件

「ジョンソン」新移民法案中ノ排日条項撤回方ニ関シ下院  
移民委員長「ジョンソン」宛國務卿日米關係委員会並ニ米

国連合基督教会等ヨリ抗議ヲ提出シタルニ対シ加州「アメリカン・リジョン」米国労働連合、農業組合、「ネーチブル・サンズ」ノ四団体ヨリ同移民委員会ニ対シ「ヒアリング」ヲ要求シタル次第ハ二月二十一日付往電第三五号ヲ以テ電報致置候處右「ヒアリング」要求ト同時ニ該四団体代表者連署ニテ要領左ノ如キ覺書ヲ「ジョンソン」宛提出シタル趣ニ有之候  
所謂排日条項設定ノ目的ハ米国市民タルニ不適當ナル人種ノ故ヲ以テ一七九〇年帰化法ニ依リ帰化不能ノ人種ト規定セラレタル人種全般ニ対シ其ノ入国ヲ永久ニ禁止セントスルニアリ若シ此種条項ヲ削除センカ帰化不能人種ノ入国制タル趣ニ有之候